

公務員勇者
御一行様

芳田尚哉

仕事は定時まで

「そっちいったぞ」

剣を持った男の横を、ひょいっとなにかが飛んでいった。それは薄い青色をしたゼリー状の物体で、着地すると、みよこみよこと動いている。どうやら生物らしい。

「逃がさないでよね、面倒なんだから」

文句を言いながら、空手着のようなものに、動きを阻害しない程度のサポーターを着け、皮のグローブを両手にはめた若い女が、長い髪を揺らしてそれを殴る。

べちよっと音がして、弾力性がありそうなその生物が見事に粉碎された。

「よっしゃ！　ここは攻略だ」

二人の後方にいた若い男が、あどけない笑顔で右手を高々と挙げて宣言して、ばさばさとマントをたなびかせながら飛び跳ねる。ガチャガチャと腰に差している剣が音を立てる。

その重さによろけながらもポーズを決めると、キラリと額当てに埋め込まれている玉が光った。

その言葉とほぼ同時に、向かいの壁にあった扉が開く。

「しかし、こんな造り、無駄が多いですよ」

長い杖を持った男が周囲を見回す。

「確かにな。住むわけでもなく、物置でもないな」

黒い装束を着た男が答える。

「部屋と部屋は通路で繋がっているが、基本は一本道。それが……えっと、どのくらいあった？」

剣を持った男が杖を持った男に訊く。

「そうですね、正確には数えていませんが、だいたい一〇くらいはありましたかね」

「そんなにあったのか」

剣を持った男が驚く。

「出勤した日からすると、だいたいそんなもんでしょ」

紅一点の女が面倒そうに言う。

彼らがいる部屋は、おおよそ一〇メートル四方といったところだろうか。壁から床から全てがきちんと石で組まれている。扉は二カ所のみ。それもご丁寧に石で造られている。さらには、どのような仕組みかは不明だが、自動で開閉する。ローテクに見せかけて、実はハイテクという微妙な構造だ。

「いいじゃないですか。まさにダンジョンって感じで」

確かにファンタジー系のロールプレイングゲームに登場しそうな場所だ。

若い男がはしゃぐのを、四人はため息を吐いて生温かい目で見ろ。

「別にどうだっていいんだけどさ、今日の終業ってあとどのくらい？」

女が剣を持った男に訊く。

「えっとだな……」

男は時間を確認しようとするが、着用しているもののせいで難しい。

「あと五分ってとこだな」

黒装束の男が、腕時計で確認して答える。

「さすが、マサユキさん。年長者よね」

年寄り扱いされているとしても、当の本人たちは気にしていないので問題なし。

「ちくしょう。こんな装備さえなければ……」

と、男が悔しがる。

「なんで、こんなのを着なきゃいけないんだよ」

「しょうがないでしょ。制服なんですから」

杖を持った男が淡々と答える。

「マサユキさんや、ケンゴは楽な格好だからいいだろうけどな、オレはこれだぞ。なんだよ、この西洋甲冑みたいなのはよ」

そう言いながら、男は自分が着用しているものを主張する。

男が着用しているのは、銀色に輝く防具だった。全身を覆うそれは、鎧とか甲冑とかそんな感じのものだ。兜はないが。その防具とさらには大きな剣という重装備だ。言葉通りそれなりに重い。

それに比べると、マサユキと呼ばれた男が着ているのは修道着風の黒装束のみだ。手には、先端の輪に細長い飾りが五つある銀色の錫杖を持っている。

同じく軽装だと言われたケンゴは、茶色いローブに木製の長い杖。ちなみにその杖は、木製に見せかけて中に鋼が仕込まれていたりするので、見た目よりは攻撃力と重さがある。

確かにマサユキと二人を比べると、比べるまでもない差が存在している。

「あっ、そろそろ終業時間じゃない？」

「そうですね。じゃあ、今日はここまでって事で」

そんな会話をしていると、終業時間にセットされている女の携帯電話のアラームが鳴った。

「セーブ！」

若い男が宣言すると、キラキラっと周囲が光る。そして、五人の姿が部屋から消えた。

直帰はできません

シュン！ と実際に音が鳴るわけではないが、なんとなくそんな雰囲気音がしそうな感じで、五人の姿が再び出現した。しかしそこは、先ほどまでいた部屋ではなく、建物の外だった。

石で造られた中は風通しなんかあったものではないので、こうして外に出ると、たとえそろそろカナカナと蝉が鳴きそうな暑さでも気持ちよかったりする。

そろそろ日が落ちるのも遅くなってきたな……と感慨深く思ったりする彼らの目の前には、西洋のお城のような巨大な建築物が建っている。どこか禍々しさを感じさせるそれを見上げて若い男が呟く。

「ボクたち、どの辺まで攻略したんでしょうね」

「内部が不明ですからね。さっぱり不明です」

ケンゴが答える。

内部に関しては全く不明。そもそも、目的の部屋までは、どのくらい小部屋を攻略すればいいのか見当もつかない。

「ようやく終業だったのに、ハルトは元気よね」

「まあ、結構この仕事って楽しいからね。でもさ、そういうアヤサさんだって、楽しそうですけど？」

確かに言葉では疲れているような事を言っているが、彼女はニコニコスマイルだ。

「そりゃそうでしょ。アフターファイブよ。アルコールの時間だもん。むしろ、ここからが本番でしょ」

アヤサは飲み物を飲む手真似をしながら言う。

「ほどほどにするんだぞ」

マサユキが年長者っぽく注意するが、彼もどこか嬉しそうだ。

「大丈夫ですって。お酒は強いですから。今までも二日酔いで出勤した事はないでしょ？」

しょうしょう
「升々 しか呑みませんから」

ほほほと笑うその姿からは、なかなか想像できない。

「アヤサの場合は、`ショウショウ、の字が違うんだよな」

いつも自主的に付き合わされているワタルが苦笑する。

「さあさあ、早くアルコールを摂取したいから、とっとと車出してよね」

そう言うなり、近くに駐車してあった白いワンボックスカーに乗り込む。

「ほら、早く早く」

ドアを開けたまま、シートをバシバシと叩いて急かす。

「ワタル、運転よろしくな」

了解と返事をして、ワタルが運転席に乗り込んでエンジンをかける。

「明日は、どこまで攻略できるかな……」

ハルトが少し名残惜しそうに見ていると、ハルト置いてくぞ、と助手席からケンゴに言われて、慌てて車に乗り込む。

「さて、帰るとしますか」

そう言うとワタルはアクセルを踏み込む。目指すは市役所！

「お疲れえ〜」

私服に着替えたアヤサは、男性陣にひらひらと手を振りながら挨拶をする。ついでに通りがかった別の部署の人にも挨拶をする。アルコールタイムに向けて超ご機嫌だ。

薄いブルーの長袖のブラウスに、ゆるやかなプリーツのスカートは薄いピンク色で、さわやかさを猛アピールしているし、それが似合ってもいる。それだけを見れば、上品で女子力の高い人なんだろうな……と思わせる。あくまでも、思わせるだけなのが残念だ。

「ワタルくん、行きましょう」

見目麗しい女性に、そんな甘い言葉を言われて嬉しくない男などいない。いていいはずがない。たとえそれが地獄だとしても。

ワタルもその例に漏れる事なく、ウキウキと胸躍らせながらアヤサに駆け寄る。しかし、男たるものデレデレしているわけにはいかないと、必死に冷静さを装っている。ついでに、迷惑そうな素振りもしている。もっとも、その演技は、同僚にはバレバレなのだが、当の本人は気付いていない。

そうして二人は夜の街へ消えていった。

他のメンバーも、タイムカードを押して帰宅の準備を終え、外に出ていた。

「どうだ、今日も行くか？」

マサユキがケンゴに話しかける。

「いいですね。行きましょう。たまにはハルトもどうだ？」

「いえ、ボクはいいです」

ハルトは笑顔でその誘いを断る。

「ボクは、いつもの場所に帰らないといけませんので」

それじゃと挨拶をして、スキップでもしそうな勢いで駅へ向かっていった。

「わしらだけでいいだろうよ。それぞれ合った場所ってのがあるものさ」

「ですね。ハルトには、あの高尚な雰囲気は理解できないでしょうよ」

「高尚ってお前な……。喫茶店でそれはどうなんだ？ ハルトが行ったのも、確か喫茶店だろ」

「そうですけど、ハルトの場合は……」

「まあ、とにかくそれぞれって事さ。じゃあ、行くか」

「はい」

と、マサユキとケンゴも駅の方へ歩いていった。

アルコールの時間です

「いらっしゃいませ」

と元気な声とアルコールと油っぽい匂いに迎えられ、アヤサとワタルは店内に入ると、当たり前のように三つのうち唯一空いていた座敷席に向かった。

カウンターやテーブル席にも人はまだまばらだったが、それでもそれぞれの席ではわいわいと楽しそうに盛り上がっている。空いている席もすぐに埋まってしまうだろう。

「生二つ」

アヤサがお通しの京こかぶの味噌田楽を持ってきた店員に告げながら、メニューを広げる。

「それと、今日のおすすめの新生姜のかき揚げも二つ。とりあえずはそれで」

かしこまりましたと下がり、店員が厨房に注文の内容を告げる。

そして、すぐにキンキンに冷えたジョッキに注がれた黄金色のアルコールドリンクを持ってくる。上部を覆うふわふわの泡が見事に風味を閉じこめている。

「お疲れ」

アヤサはジョッキを掲げると、ワタルがこれから持とうとしていたジョッキにカチンと当てて、一気に飲み干してしまう。

「お代わりお願いします」

最初から三杯頼んでおけよというペースだが、店員も慣れたもので、既に次のジョッキが準備されていたりする。

「焼き鳥の盛り合わせと、茄子の一本漬け。それと、焼き茄子のごまひたしは二つね」

お代わりを受け取りながら注文する。

ここでようやくワタルはジョッキを持って、改めて乾杯をする。

「今日も疲れたわね」

アヤサは後ろに手を突いてぼやく。

「そうだな。まさかお役所勤めで、こんな肉体労働をするなんて思ってなかったな」

「そうね。でも、ストレス発散になっていいじゃない」

「ストレス発散ね……」

この飲みはストレス発散じゃないのか、と思わなくはないが口にはできない。

「そもそも、自衛隊とか機動隊の仕事でしょ。こういう時こそ出張しないと、いつすんのって感じだけどね」

ジョッキをグイッと空ける。

ワタルはまたか……と思いながら、お通しの味噌田楽をつまむ。

「わからんでもないが、それを元WACが言うか？ 任務内容からして、絶対出動できないだろう」

「まあね。防衛じゃないもんね。ただの訪問だもんね。元機動隊員さん」

「そうなんだけどな。住民票や税金なんかの書類作成と徴収。これで自衛隊や機動隊が出動なんか考えられないよな」

ワタルもジョッキを空にする。

ちょうどその時、茄子の一本漬けと焼き茄子のごまひたしが運ばれてきたので、それぞれビールと熱燗を注文する。

「だいたい、なんなのあの魔王城って」

「オレがわかるわけないだろ」

「でしょうね」

「……………ああ」

その通りでも、即座に肯定されると、それはそれで落ち込む。

「その辺は、元科学班のケンゴの分野だろ」

「う～ん、それはそれでちょっと違う気もするけどね。あの人って、どこかの研究所出身なんですよ」

「そうらしいな。オレも詳しくは知らないけど。マサユキさんなら知ってるんじゃないか」

「マサユキさんね……。あの人も謎なんだけどね」

「あの方は、僧侶だか住職だか、そんな資格を持ってるんだろ？」

「神主じゃなかった？」

「どうだっけな。っていうか、オレには違いがサッパリだし」

ワタルが注文したビールが運ばれてきて、ワタルがグイッと飲む。

「なにが違うのかわからないわね。一緒じゃないの？」

手持ち無沙汰なアヤサは、箸で茄子の一本漬けをつついて遊ぶ。

「おいおい、食べ物で遊ぶのはどうかな……」

「アルコールはまだあ？」

まだジョッキ二杯なので、ほろ酔いにもなっていないにもかかわらず絡む。

「わけわからんってのは、ハルトもそうだな」

「確かに。ハルトってなんなのかしらね」

「謎だよな。っていうか、オレたちがチームを組んでるってのが一番の謎だろうけどな」

他のメンバーは、だいたいながらも経歴がわかっているが、ハルトに関しては誰も詳しくは知らない。

「そうかもね。顔見知りってわけでもないし……って、待ってました」

熱燗と焼き鳥の盛り合わせと新生姜のかき揚げを持ってきた店員が目に入り目を輝かせる。

「お待たせしました」

そう言って戻ろうとした店員を、アヤサが引き留める。

「ねえ、参考までに訊きたいんだけどさ、あの魔王城ってどう思う？」

話の脈絡もなにもない唐突すぎる質問だった。そのぶっ飛びすぎた質問に、ワタルは焦りを隠せなかった。

「どう……とは？」

それは店員も同じで、突然の質問にドキリとなる。

「とにかく、どう思う？」

「急に言われてましても……」

いきなりで悪かったな、とワタルがフォローするものの、アヤサは質問を続ける。

「別に侵略してくるわけでもないけど、あの大きさのものが郊外とはいえ、突然現れたわけじゃない。この辺に住んでたり生活してる人たちって、どう思うのかな……って、ちょっとした興味よ」

あくまでも一般論として訊く。

「そうですね……」

「たとえばさ、いきなり街の上に円盤が現れたらどう思う？」

「なんだ、その質問は」

質問が突拍子もなければ、たとえ話も突拍子もない。どういう発想なのか困惑するしかない。

「円盤ですか？ それって、どういうものですか？」

店員は全くそれが理解できないようで首を傾げる。

「ちょっと、円盤といたら円盤でしょ。ユーエフオー。未確認飛行物体」

「未確認？ 確認されていないものをどうすればいいのか……」

トボケているのか、生真面目すぎるのか、店員がズレた事を言う。

「……うん、確かにそうね。わたしは見た事がないし、写真とか映像なんて、どうとでも捏造できるわけだし、すごいじゃない、あなた。そうよね、わかるわけないわよね」

しかしアヤサは妙に納得してしまう。

こいつもう酔ってるのか？ とワタルはアヤサを見るが、普段と変わる様子はない。

お猪口に注いだ日本酒を、グイッと飲み干すと、店員をじっと見る。

「存在するかわからないものはどうでもいいわ。でも、魔王城は実際に存在する。あれについては、近隣住民としてどう思うの？」

「おい、店員さんが困ってるだろ。すみません、工作中に」

ワタルがなんとかしようとするが、アヤサを抑えられるわけがなかった。

「工作中なのはごめんなさいね。ちょっと参考までに知りたいの」

「そう言われましても……」

店員が悩んでいると、別のテーブルから声かけられた。

「すみません、失礼します」

と、店員は二人のテーブルを離れて、呼ばれたテーブルに向かった。

「おいおい、いきなりあの質問はどうだよ」

「そう？ 別に普通じゃない？ これって、世間話みたいなものじゃない。JSだって、このくらいの会話するでしょ」

「確かにそうかもしれないけどさ……」

しかし、実際に小学生でもするような話題だ。真剣に討論するわけでもないなら、特に問題はないんだよなと考えているワタルの前で、アヤサは新生姜のかき揚げをおいしいおいしいと連呼しながら食べていた。

楽しいご帰宅

「おかえりなさいませ、ご主人様」

きらびやかな黄色い声に迎えられ、ハルトは笑顔で店内に入った。

派手すぎず落ち着いた雰囲気の内は観葉植物が多く、壁やところどころにある格子状になっている木製のスクリーンには模造の蔦をはわせており、どこか森の中のような雰囲気さえある。

やっぱりここは落ち着くな……と入店しただけでまったりしているハルトの前に、青みがかった灰色と黒のモノトーンメイド服をまとった少女が近付いてくる。頭の青みがかった灰色のヘッドドレスがポイントだ。

二〇ほどあるテーブルは、そのほとんどがおひとり様の男性客で埋まっている。

「おかえりなさいませ。えっと……あそこが空いてますね」

と、彼女に案内された席に向かう。二人掛けの小さなテーブルだが、おひとり様には充分だ。

ハルトが席に着く頃に、さっきのメイド少女が、グラスに入った水とおしぼり、そしてメニューを持ってきてくれる。

「おかえりなさいませ、^{えんかん}円環の勇者さん」

一見さんではなく、幾度か通っていると、それなりに親しくなるもので、名前呼び合うのが普通だ。ちなみに、円環の勇者というのが、この店でのハルトの呼び名だ。

「ただいま、ゆきなさん」

ハルトも慣れたもので、彼女を名前と呼ぶ。

「えっとですね、今日の限定メニューは、もう完売しちゃったんですよ」

それぞれ挨拶を終えると、ゆきが今日のメニューの説明をする。

「マジですか。ちなみになんだったんですか？」

説明の途中にもかかわらずハルトが訊く。

「えっと、今日はみいわさんが作ったブルスケッタでした」

ゆきはニコニコしながら答える。

「みいわさんかっ！ 残念」

がっくしとテーブルに額をつける。店内でもトップクラスの癒し系である彼女の料理は、彼女自身同様人気なので、アフターファイブだとありつけない事も多い。

「本当においしそうだったんですよ。わたしも食べたかったです」

「ですよね……」

と、妙に意気投合して、ゆきはメニューの説明を続ける。

「で、今日のケーキがフロマージュです。限定ないですけど、今日はどうします？ 決まったら呼んでください」

そう言い残して、メイド少女がテーブルから離れる。

「さて、どうするかな……」

いつもは限定メニューを注文するので、こういう場合は悩んでしまう。フードメニューには、定番のオムライスをはじめ、パスタやプレート料理がそれぞれ数種類と豊富だ。

「久しぶりにオムライスにしておこうかな……」

定番すぎてあまり注文しないので、ハルトにとっては久しぶりだ。

一度考えてしまうと、口がそれになってしまう。

注文を決めたハルトは、テーブルの上にある小さなベルを持って揺らす。

チリンチリンと綺麗な音を鳴らすと、は～い、とメイドさんたちが音の方を見る。

はい、と一番近くにいたメイドさんがハルトのテーブルに来る。ふわふわとした肩までの髪が、ほんわかとした雰囲気醸しだし、とろんとした目が癒しオーラを放っている。

「あっ、みいわさん。こんばんは」

やってきたのは、今日の限定を作ったメイドさんだった。

「あっ、円環の勇者さん。ごめんなさい、限定すぐになくなっちゃって……」

いつも限定メニューを注文している事を知っているの、ちょっと申し訳なさそうにする。

「やっば、みいわさんの限定は人気だし。今日は残念だけど次の機会に」

「よろしくです」

「それで今日はね……オムライスと、食後にアイスレモンティー。それと、ゆきなさんとみいわさんのピンチェキをお願いします」

メイドカフェといえば、他のお店と違うのがやっぱりチェキだろう。常連とはいえ、何枚でも欲しいもので、ハルトはほとんど毎回、誰かしらにチェキを頼む。

ツーショットで撮る事もあるが、メイドさんだけのピンの方が多い。

「ありがとうございます。ポーズはどうします？」

「お任せで」

「わかりました」

みいわは伝票を書くと、キッチンの方に行ってオーダーを伝える。

チェキは一見さんの場合は、その場ですぐに撮って落書きをして渡すが、常連となれば後日渡しが普通になっている。特にそういう説明はなくても、暗黙のルールというものだ。

「これ、たまってた分です」

と、みいわさんがペーパーナプキンに包まれたチェキを持ってくる。

以前に頼んでいたチェキだ。

メイドさんによっては頼まれる枚数も違うし、落書きのペースも違うので、結構前に頼んだものもあったりする。それはそれで楽しいので、遅くなっても文句を言うようなご主人様やお嬢様はいない。ご主人様お嬢様は心が広いのだ。全てを受け入れる心の余裕が合ってこそ、こうしてまったりと時間と空間を味わえるというわけだ。

「ありがとう」

チェキを受け取ったハルトは、チェキを確認していく。

裏表チェックしたハルトは、バッグからファイルを取り出す。チェキ専用のフォトアルバムだ。受け取ったチェキは、きちんと保管しなければ失礼だと、当たり前のようにそれを使っている。チェキ本体はもちろん、包んであったペーパーナプキンもきちんとたたんで保存している。だって、そこにはメイドさん直筆で名前が書かれているんだもん。ぞんざいに扱えるわけがないでしょう。

それらをきちんと整理すると、ハルトは増えたチェキを見てニヤニヤする。この場でなければ通報ものだ。この場でも際どかったりするが。

チェキを堪能していると、ゆきなさんがテーブルにやってきたので、顔を上げて彼女を見る。「ごめんなさい。書くの遅くてあたしのいっぱいたまってるんですよ」

入店してまだ間もないが、その人気はトップクラスなので、チェキを頼まれる枚数も多い。そういう事もあり、彼女のチェキを待っているご主人様は多い。しかし、誰一人として、その事に文句を言ったり、急かしたりする事はない。

「別にいいですよ。ゆきなさんだって忙しいでしょ」

「すみません。できるだけ急いで書きますね」

そうこうしていると、注文していたオムライスが運ばれてくる。

とてとてと小柄ながらも、どこか大人っぽい雰囲気を持っているメイドさんだ。

「お待たせしました。さて、なに描きましょうか。っていうか、私とゆきなさん、どっちが描きます？」

小柄なメイドさんが、ハルトとゆきなを見る。

「ここはやっぱり、じえるちゃんでしょ。ね、円環の勇者さん」

ゆきなさんにニコニコと言われれば、肯くしかない。しかしハルトとしても、別にゆきなさんがよかったというわけでもない。言い方はともかく、誰でも素晴らしいのだから。

「じゃあ、私が描きますね。なに描きましょうか？」

改めて訊かれて、ハルトは考える。

そういえば、なにも考えていなかった。あまりに久しぶりに注文したので、その事をすっかり忘れていた。

「そうだな……ディットで」

ハルトは最近放送しているアニメのマスコットの的なキャラをリクエストする。ウサギの容姿に鹿の角が生えているキャラなのだが、毒舌キャラとして人気だ。

「わかりました」

じえるはケチャップで、オムライスの上にディットを描いていく。

「すっげえ巧い」

あまりの出来に、思わず途中ながら感心してしまった。

「はい、できました」

じえるは、見事にディットを描ききった。プレートには、決め台詞の`所詮はクズだからな、も書いてある。

「すごいよ、これ。っていうか、もったいなくて食べれないって」

ハルトはあまりの出来に、テンションが異常な上昇をしていた。

「えへへ。絵は得意なんですよ」

大人っぽい雰囲気の彼女だが、笑うと途端に年相応に幼くなる。このギャップにメロメロのご主人様も多かったりする。

「じゃあ、いただきます」

ハルトは手を合わせて、オムライスにスプーンを入れようとする。その手がぶるぶると震えている。

本当にこの芸術を食べてもいいのだろうか。

オムライスを前に葛藤する。

莫迦じゃないのか、と誰に思われても、そうになってしまうものはそうなのだ。

しかし、料理には食べ頃というものがある。

あたたかいものはあたたかいうちに、冷たいものは冷たいうちに。その基本は揺るがない。

その基本に従うのなら、やはりオムライスはあたたかいうちに食べるべきだ。

だが現実はどうだ。

こうして芸術に臆して躊躇っているうちに、オムライスはどんどん冷めつつある。このままでは、ひんやりオムライスになりかねない。

そう思いつつも、やはりこのまま凍らせてでも、この芸術を保存し、あわよくばお持ち帰りして保管したいという気持ちをなくす事ができない。

しかし、そんな事ができるはずもなく、ここで食さねばならない。残すなど失礼極まりない。

「よし」

と気合いを入れ直すと、今度こそとスプーンを芸術オムライスに入れる。

ちなみに、この店は特においしくなる呪文とかないからね。リクエストしてもしてくれません

。

「もったいないけど」

そう言って口に運ぶ。

「……うまっ」

もぐもぐと咀嚼して飲み込む。

「オムライスって、こんな旨かったっけ？」

「円環の勇者さんは、基本メイドの限定ですもんね」

「そういえばそうかも」

それ以外を注文する事もあるが、だいたいはそうだ。

「えっとですね、キッチンがヤマトさんなんですよ」

「ヤマトさん……ああ、あのイケメンさん」

誰もが美形と認める容姿で、お嬢様が来店した時はホールに出る事もあり、ハルトも顔は知っていた。

「ヤマトさんって、すごい料理が上手なんですよ。同じ材料を使ってるはずなのに、全然味が違うんです。なんかズルいんですよ」

ハルトは、じえるが作った料理を食べた事があり、とてもおいしいと感じていたので、そんな事を言うのが意外だ。しかし、実際にオムライスを食べると、その差は歴然だった。

そのあまりのおいしさにハルトのスプーンは止まらず、あれだけもったいないと思っていたお絵かきも気にする事なく、あっという間にたいらげてしまったのだった。

「うますぎですよ、これ」

と、食後のアイスレモンティーを持ってきたみいわに、ハイテンションで告げる。

「そうなんですよね。ヤマトさんが作ると、おいしすぎて困るんですよね」

「いやいや、みいわさんの料理だって、すっげえ旨いですよ」

「ありがとうございます、円環の勇者さん」

えへへと照れるみいわを見てほんわかしながら、まったりとくつろぐのであった。

大人の時間の過ごし方

香ばしい香りが外にいてもはっきりとわかる。

その香りは、まるで誘蛾灯のように人を惹きつけてしまう。

その例に洩れず、ケンゴとマサユキもその店に入っていく。

カランコロンと落ち着いたベルの音が二人を迎えるとともに、香ばしい香りが一気に二人を包み込む。

「おや、いらっしゃい」

カウンターから穏やかで落ち着いた低い声に迎えらる。そこには、真っ白い清潔なシャツに黒いベストという、バーテンダーのような服を着て、どっしりとした体格ながらも、繊細にグラスを拭いている男がいる。初老というには若く見えるが、本人曰くそれなりの高齢らしい。

「マスター、今日も来ちゃいましたよ」

そう言いながら、マサユキはマスターの前に座る。

「こんばんは、マスター」

その右隣にケンゴも座る。

カウンターには他に誰もいないが、テーブル席には、夫婦らしい老齢の男女が談笑している。

「今日はどうぞされますか？」

マスターの問いに、二人は同時にナポリタンと答える。

「かしこまりました」

と、マスターはささっとフライパンを取り出し調理を始める。

香ばしいコーヒーの香りに混じって、オリーブオイルやガーリックの香りがふつとする。パスタを茹でている間に、具材を炒めていく。それが終わると同時に茹で終わり、絡めて仕上げしていく。すると、ケチャップと隠し味に使っているドミグラスソースの香りができて、二人の胃袋を刺激する。

「お待たせしました」

ナポリタンを差し出された二人は、待ってましたと手を合わせて食べ始める。フォークではなく箸を使って。

「やっぱりおいしいわ、これ」

「超絶美味ですね」

マサユキとケンゴがいつものように感動しながら食べるのを、マスターはコーヒーの準備をしながら眺めていた。

マサユキがあっという間にたいらげると、同じタイミングでコーヒーを出される。少し遅れてケンゴも完食したが、同じようにぴったりのタイミングでコーヒーが出される。

「この時間は最高だな」

マサユキはブラックのまま一口飲む。豆の香りと味はブラックでしか感じられないという信念の元、絶対になにも入れようとしない。

それとは対照的にケンゴは、砂糖にガムシロップにミルクとほぼフルコースで投入し、元の味がわからないだろうという状態になったコーヒーを飲む。

「あちっ」

ケンゴは息を吹きかけて冷ます。

「本当にお前は妙に子どもだよな」

「なんですかそれ」

異論を唱えながらコーヒーを冷ましている。

「いや、知識はあるのにな。こういうところは、おこちゃま体質だよな」

「いやいや、そんな事ないですよ。っていうか、マサユキさんの経歴でそんな事言うと、単に嫌味にしか聞こえないですよ」

「NASDAの経験と神主の資格があるだけだぞ。理研には負けるぞ」

「いやいや、充分すぎるくらいすごいでしょ」

「そんな事はないさ。無駄に経験があるだけで、今はこうして役所の仕事だからな。もともと、これはこれで大変だけどな」

「今回のはかなり特殊ですし」

「そうじゃなくても、公務員ってのは大変なんだな。イメージだと楽な感じだったのにな」

「それは同感です」

「大変なんですね」

と、マスターが無難な事を言いながら、会話に参加する。

「いやあ……大変なんですよ。詳しくはコンプライアンスがあるんで言えませんがね」

マサユキはコーヒーを飲み干す。

「お代わりしますか？」

「お願いします」

と、カップを差し出す。マスターはそれを受け取ると、新しいカップにコーヒーを注ぐ。途端に香ばしい香りが広がる。

「やっぱり、ここのコーヒーはおいしいな。他では飲んだ事がないんだけど、やっぱり産地を選んでいるの？」

「まあ、自家栽培ってところですかね」

「自家栽培っ？」

マサユキは自分でも驚くほど大きな声が出た。そのせいで、他の客が一齐にマサユキを見る。

「あっ、失礼しました。申し訳ない」

マサユキは立ち上がって、マスターと客に向けてそれぞれ頭を下げる。

「恥ずかしいじゃないですか」

そう言って責めるケンゴだが、マサユキの声に驚いて声が出なただけで、ほんの数秒の差があれば叫んでいたのだが、なんだかんだで結果が全てだ。店内で騒いだのはマサユキという事実だけがそこにある。

「マスター、本当に申し訳ない」

座りながらテーブルに額を擦りつけるように――いや、実際にグリグリと擦りつけて謝罪する。座り土下座とでも表現されると納得できそうだ。もともと、土下座も座っているわけだが。

「いえいえ、あまりお気になさらず」

そう言いながら、お代わりのコーヒーを出す。

マスターはそう言うが、マサユキは座り土下座をやめようとしめない。

「マサユキさん、あまりしすぎるのも逆効果ですよ」

「いいや、わしの気が済まない。こんな静かな場所を乱したんだ。いくら謝っても足りないだろ」

「面倒な人だな」

ケンゴがやれやれとぼやく。

「確かに静寂を破った事は赦されるものではないでしょうが、マスターが広大な心で赦免して下さったんですから、素直にそれを甘受しましょうよ」

そう言いながら、ケンゴがマサユキの背中をポムポムと叩く。

「……………わかった。マスター、本当に申し訳なかった」

と、最後に深々と頭を下げて、コーヒーを一気に飲み干した。

「熱っ」

さすがに熱く、口の中から喉まで火傷のピンチに。

「マサユキさん、これこれ」

と、ケンゴが水が入ったグラスを渡す。

「サンキュ」

それを受け取って、なんとか冷やして落ち着く事ができた。

「騒ぎすぎですよ」

ケンゴは冷たい視線をおくる。

「まあ、ほどほどにお願いしますね」

と、マスターも苦笑気味だった。

ちょっとしたハプニングはありつつも、静かな時間はゆっくりと過ぎていく。

魔王城の夜

「おかえりなさいませ」

あどけなさを残した若い男が、大きな門の前で出迎える。

「ああ、帰ったぞ」

ゆっくりと門をくぐったのは、どっしりとした体格の男だ。黒いベストを脱ぎながら、出迎えた若い男にそれを渡す。

「本日もお疲れさまでした」

深々と頭を下げているが、そういうお店ではない。ここは、彼らが生活している家である。

「他の者たちは？」

「はい。側近はいつもと同じの予定です」

「また明け方か。大変だな」

「ですが、昼過ぎからですので」

「それもそうだな」

男はゆっくりと頷く。

「そうですね。宰相と軍師は、少し早めに帰ってこれるそうです。少し前に連絡がありました」

「そうか。それでは、そろそろ帰ってくる頃合いだろうか」

「そうですね。そろそろかもしれません」

そうこう話していると、遠くから気配が二つ近付いてきた。

「どうやら、帰ってきたようだな」

「はい」

と、若い男は門の方を見ると、自転車が二台近付いてきている。どうやら若い男女のようだ。

「先にお帰りでしたか」

男が門の前で自転車を降りる。

「ワシも今だがな」

「おかえりなさいませ、魔王様」

女も自転車を降りる。

魔王様と呼ばれた男は、ああと答える。

「みなさん、今日は同時でしたね。では、入浴の準備はできていますので、順番にどうぞ。その間に食事の準備を終わらせましょう」

若い男が全員に言うと、先に中に入っていった。

「それでは、一番風呂は魔王様からどうぞ」

男——宰相が言うと、

「そんなの当たり前でしょ」

即座に女——軍師が言う。

「では、ゆっくりとさせてもらおうか」

魔王様と呼ばれた男を先頭に、それぞれ中に入っていった。

それを確認したかのように、大きな門が自動で閉じていった。

軍師のリラックスタイム

「ふう～、今日も疲れた。でも、楽しかったな」

軍師はゆったりと湯船に浸かって、一日の疲れを落とそうとしていた。魔王と宰相はすでに入浴を済ませている。きっと要望はないだろうから割愛だ。

軍師は湯面にぷっかりと浮かんだ二つの膨らみに顎を乗せる。

「やっぱり、あの職場は天国よね。ほどよく適当でいいし、雑談しててもそれが仕事の一部だったりするし、なにより可愛い女の子をじっと見ていられるなんて、本当に最高よね」

実際はそんなに楽しめないとか言われそうだが、本人がそう感じて、楽しんでいるのだからそういうものとしておこう。

「今日も宿題チェキが大量になっちゃった。結構たまっちゃってるかも」

持ち帰ってきたチェキの量を思い出すとげんなりしてしまう。人気があるこそその贅沢な悩みだとわかっていても、物理的な量を目の前にするとそう思ってもしょうがないだろう。

「でも、渡した時に嬉しそうにしてくれるのって、本当に嬉しいんだよね」

思い出だけで笑顔になる。

湯を掬ったりしながらくつろぐ。

しばらく湯船に浸かっていた軍師は、湯船から出て風呂椅子に腰掛ける。

シャワーを操作すると、水が彼女の肢体を弾いていく。もうピッチピチだ。

水の流れに髪を任せると、長い髪が水の流れと一体となって流れる。

水分をなじませると、シャンプーを手に出し、ゆっくりと髪になじませていく。そしてすぐに洗い流してしまう。

そうしてからシャワーを止めて、もう一度シャンプーを手に出して髪になじませ泡立てていく

。

毛先からゆっくりと優しく洗い、徐々に頭皮に近付いていく。そして、優しく揉むように頭皮の汚れを落とす。もっとも、美しい彼女に汚れなどないと叫ばれても反論はできないのだが。

それからトリートメントやコンディショナーでケアをして、タオルを頭に巻くとボディースポンジにボディークリームを出し、こしゅこしゅと泡立てて首筋から洗い始める。その手は首筋から豊満な胸へ、そして左肩から腕へ、次は右へ……と徐々に下へと向かっていく。その先はあなたの妄想でカバー。

体を隅々まで清めて再び湯船へ。しかし、肩まで浸かるわけではなく半身浴。さらにエクササイズグッズを使って、ウエストを引き締める運動を。こういう日々の積み重ねで、素晴らしいスタイルはキープされているのだ。夢がなくて申し訳ないが、これが現実なんだってばよ。水面下で頑張っているのさ。

そんな運動を一五分続けると、じわっと全身に汗が。ほどよくデトックスしたところで、冷たいシャワーを浴びる。そうすると、全身がさらにキュッと引き締まる気がしてくる。

魔王の夕餉

「相変わらず長いな」

軍師が入浴を終えてパールピンクのバスローブ姿で出てくると、両手にダンベルを持って筋トレをしている宰相がいた。ちなみに宰相は上半身裸だったりする。その鍛えられたボディは、マッチョというわけではないがきちんと引き締まっている。当然腹筋は割れているし、胸筋もいい感じに鍛えられている。

そんな素敵なボディだが、軍師はそれを見ても照れる事も見惚れる事もなく平然としている。

「長いかしら？ 普通じゃないの？」

「たかが湯浴みに三〇分は長いだろう」

それが長いかは個人の感覚で異なるだろうが、五分から一〇分足らずの宰相と比べれば長く感じて不思議ではない。

「それ以前に、どうでもいいんじゃないの？ あなたになにか関係があつて？」

「それがあるんだよ。軍師の湯浴みが遅いと、夕餉が遅くなるんだよ。魔王様がお待ちだ」

宰相に言われハツとなる。

「そうだった。魔王様を待たせてしまっているんだった。完全に失念していたわ」

「あれほど緻密な陣営と作戦を練るくせに、こういうところは弱いんだよな」

軍師はそんな言葉を聞く事なく、慌ててダイニングへと急ぐ。

「魔王様、大変お待たせしました」

「いや、構わんぞ」

魔王は黒いガウン姿でソファに深く腰掛け、化石を見ながらブランデーを燻らせていた。

「長湯をしてしまい、夕餉の時間がこのような時間になってしまつて――」

「気にせずともよい。必要な時間だと理解している。参謀もそれを計算して準備をしているのだからな」

と、魔王のその言葉通り、食事の準備が整った。

テーブルの真ん中には花瓶に生けられた真っ赤な花が飾られている。それを挟むようにバスケットが二つ。中にはカットされたバゲットが入っている。

その一方の横には大きなサラダボウルがある。各席には白い食器とピカピカに磨かれた銀のナイフやスプーンが並べられており、まるでレストランのようだった。

「ようやく夕餉か」

ダンベルを自室に置いてきた宰相がやってくる。

「揃ったようだな。では、それぞれ席へ」

魔王の言葉で、大きなダイニングテーブルのそれぞれの席に座る。当然ながら魔王はお誕生日席で、魔王の左前には宰相が。その向かいには軍師が座る。

三人が座ると、参謀がそれぞれの前の白い器に、真っ赤なスープを入れていく。

ほんのりと酸味を感じさせる香りが胃を刺激する。

自分の分を含めて全員分を終えると、軍師の横に座る。

「それでは、大地の恵みに感謝を」

魔王は揃ったのを確認し、食事の挨拶をする。

全員が唱和し手を合わせ食事を始める。

「今日も素晴らしいな」

赤いスープを飲んだ魔王が賞賛する。

「光栄に存じます」

参謀は少し照れながら答える。

そんなやりとりはあったものの、食事は静かに行われた。

本日の報告

食後には、参謀が淹れたコーヒーでくつろぐのが常だ。

食事は静かだったが、コーヒーを飲みながら今日の報告を行う。

「宰相と軍師はどうだ？」

「特に変化はないですね。今日も平和でした」

「宰相は、相変わらず女にデレデレしていましたしね」

軍師がここぞとばかりに茶々を入れる。

「そんな事はないぞ」

「嘘ばっか。メイドさんはもちろん、お嬢様たちにもデレデレしてるくせに」

「あれは仕事だ。ツンケンするわけにはいかないだろう」

「それが好みってお嬢様もいるけどね」

「それは……。俺はこれでいいんだ」

宰相はこれ以上はなにもないとばかりに、話を終わらせようとする。

「まあよい。この世界に馴染んでいるようだな」

「そうですね。この世界は、我々がいた世界とは違い、様々なものがあり賑やかですね。そしてなにより穏やかです」

「そうだな。戦乱の世ではなさそうだな。少なくともこの場所は」

世界は平和に見えても、戦乱が絶える事はない。多くの人を見て見ぬ振りをしているか、気付いていないだけだ。だがそれを含めても、魔王たちからすれば充分平和だ。

「軍師はどうだ？」

「いつも通り人気者ですから」

軍師は照れる事なく堂々と答える。

「人心を掌握しているようだな。いい事だ」

「恐縮です」

軍師は頭を下げる。

「軍師こそ、女に甘いだろうが。あまつさえ、同僚にも色目を使っているではないか。それだけでなく、仕事でさえじっと見ているだろうが」

宰相がここぞとばかり言い返そうとする。

「それがどうしたというのかしら？ 美しいものを愛でる。当然の事ではなくって？」

怯むなり慌てるなりするかと思った宰相だったが、完全に開き直った軍師の態度に戸惑いを隠せない。

「俺に対しては罪悪のように言いたくせに、自分は構わないというのか」

「別に悪いと言った覚えはないわよ。ただ事実を報告しただけ。それだけなのに、あなたが勝手に言い訳をしたり慌てたりしただけでしょ」

そう言われて宰相は言葉を飲み込む。確かにその通りで、そもそも後ろめたい事もないのに言い訳をした事が過ちだったのだと気付いた。

「さすがだな」

ここは軍師を賞賛するしかないだろう。気乗りしようがしまいが事実なのだから。

自滅しただけの宰相を見て、軍師はやれやれとため息を吐いた。

「もうそのくらいでよいであろう」

魔王がにこやかに笑う。

「お恥ずかしい」

「少し騒ぎすぎてしまいました」

宰相と軍師が謝罪する。

「いいや、問題ない。むしろ、お前たちがこの世界に馴染んできているという事であろう。よい傾向ではないか」

「全くですね」

魔王の言葉に参謀が賛同する。

「魔王様はどうでしたか？」

参謀に訊かれ、魔王は今日の出来事を思い返す。

「なかなか楽しかったな。充実していたという事であろうか」

基本的には落ち着いた時間が流れていた。もっとも、ほんの一時、常連が騒いで賑やかになったが、それも微笑ましい時間だった。

「それはよかったです」

「そうだな。やはり、コーヒーが好評なのがいいのだろうな。素晴らしい香りが人を惹きつけ、さらには至福の時間を与える。魅了と誘惑の代物だな」

「恐縮でございます。魔王様のために丹精込めて栽培しておりますので」

「その気持ちもよいが、最終的にはそれを飲む者の事も頭にないとな」

そう言いながら、まさにそのコーヒーを一口飲む。

「精進します」

「いやいや、充分過ぎるほどであるぞ。まさにこれなぞ、ワシが淹れるものよりも香りもコクもある。同じ豆からとはとても思えぬ」

「恐れ多い事です。魔王様はご自身を過小評価されております。ぼくなど、まだまだ若輩者です。こうして腕を磨くために、毎夜淹れさせて頂いているに過ぎません」

「あらあら、あたしたちは実験台だというわけ？ そういう事よね」

軍師がニヤニヤと笑む。

「なるほど、そういう事になるのでしょうか」

参謀は素直にそれを受け入れてしまう。宰相のように否定しながら慌ててくれれば軍師としては面白かったのだが、それを見越していた参謀は軍師が望まない答えを選ぶ。

「面白くないわね」

軍師はわかりやすく不機嫌な顔をする。

「それよりも例の侵入者たちはどうだ？」

軍師の莫迦話などもう結構だと、話題を変えようと宰相が訊ねる。もっとも、これが現状では一番深刻な話題だったりする。そのため、わりと軽いそれぞれの本日の報告から行っていたの

だが、毎夜こうして宰相がその話題にするのだ。

そんな宰相の言葉を受けて、他の三人の表情が真剣なものに変わると同時に、部屋の空気も引き締まった。

「本日も一部屋突破されてしまいました。目的や正体は未だ不明です。やはり現状では調査に限界がありますね」

参謀はゆっくりと首を振る。

「とにかく、この世界の者であろうからな。あまり事を荒げる事なく収束させたいものだな」

「そうね。戦力の問題もあるけど、一気に片付けられればね……」

軍師がため息とともに呟く。

「そうだな。現状では戦力はほぼない。だがそれでも、この世界では充分だろうがな」

宰相が軍師の呟きに答える。

強力な魔力を持つ者がいれば、あっという間に全滅させられてしまうのは明白だ。

魔王たち四人が本来の力を発揮する事ができれば、数秒と経たずに全滅させる事ができるだろう。

普通のゲームに例えるならば、現状の戦力は序盤も序盤の戦力しかない。

「もし戦力が潤沢であったとしても、この世界でそんな事をすれば、この世界で生活する事は不可能になるだろうな」

魔王がしみじみと言う。

「侵略しても無意味ですしね」

参謀が追随する。

「そうだな。仮にこの世界を侵略しても、我々だけになってしまっはなんの意味もないからな」

「そうですね。滅ぼすだけなら楽なんですよ」

軍師はコーヒーを飲み干して、参謀にお代わりを頼む。

参謀が一度席を外す。

「しかし、本当にあの連中はなんでしょうね。どのような目的で、この魔王城に侵攻しているのでしょうか。まさか、この世界の軍が動いているのでしょうか」

「しかし、この国に軍というものはないそう」

宰相の言葉を魔王が訂正する。

「もともと、近隣の他国には存在するようですが、それらがこの国で戦闘を行う事はできないようです。そもそも、そういう事をこの国は嫌うようです」

と、軍師が補足する。

「だとすれば、あれはなんでしょう。隠密部隊か国家や組織に所属しない集団なののでしょうか」

「わからん。それらの調査のためにも、我々はこの世界に順応し、親交をもたねばならないのだ。それによって、情報を得る必要があるのだ」

魔王は幾度目かの行動目的の確認を行う。

「お待たせしました」

参謀がコーヒーのお代わりを持って戻ってくる。

「おお、ワシにも頼む」

はい、と答えて魔王のカップにコーヒーを注ぐ。

「こっちも忘れないでよね」

「わかってますよ」

軍師のカップにも注ぐと、自分のカップにも注ぐ。

「宰相はどうします？」

「お代わりを頼む」

結局、全員がお代わりをするのだが、参謀はそれを想定していたので、宰相のカップに注ぐとサーバーのコーヒーがちょうど空になる。

「さて、なにを話していただろうか」

「この世界に順応し、情報収集を継続していく事を確認しました」

魔王の問いに宰相が答える。

「そうであったな。それぞれ、この世界の住人として過ごし、我々に有益な情報を集めるのだ。参謀はこれからも、我々が不在の間、この城の全てを任せる」

三人が声を揃えて、かしこまりましたと頭を下げる。

「それでは本日は解散とする」

魔王のその言葉を受け、それぞれはコーヒーを飲み干して自室に向かった。ただ参謀は、食事の後片付けが残っているので、キッチンに向かった。

「しかし、この世界はどこまでも平和であるな。自然と心が穏やかになってしまう。以前の生活がまさに別世界の夢のようだ」

魔王は残り少ないコーヒーをゆっくりと味わっていた。

二日酔いでも頑張ろう

「さあ、今日も頑張らしましょう」

ハルトが挨拶代わりに、両手を挙げて声を張り上げる。静かな朝にとって騒音でしかない。近所から苦情があってもおかしくないのだが、幸いにもこの近辺には一般の民家はなく、巨大な建造物があるだけだ。

「うるさいわね……。ちょっとは加減したらどうなわけ」

アヤサが眉間を押さえる。

「どうした？ 二日酔いか？」

マサユキが訊くと、アヤサは首を振る。

「そんなわけないでしょ。そんなに飲んでないもの。単に、朝っぼらから大声を聞きたくないっただけよ」

「同感です」

とケンゴが答える横で、ワタルが蹲っていた。

「どうしたんだ、ワタル。お前は……二日酔いのようだな」

ワタルは真っ青な顔で、マサユキの言葉に無言で頷くしかできない。

「本当に弱いんだから。昨日はほとんど飲んでなかったのに」

アヤサが残念そうに見る。

「体質もあるでしょうし、そんな責めるものでも……」

ケンゴはフォローしてみるが、ワタルがそれを手で制する。

「自分の限界を考えずに飲んだのが悪いんだ」

「あれで限界って、しょぼすぎでしょ」

「ちなみに、どのくらい飲んだんだ？」

マサユキが訊く。

「えっと……ビールをジョッキで五杯と。麦焼酎をロックで三杯。日本酒を半合だったかな」

「少ないでしょ？」

と、アヤサが同意を求めるが、全員が頷く事ができない。

「それで少ないって言われるんですね」

可哀想に……とケンゴがワタルの肩に手を置く。

「アヤサよ、そりゃワタルが可哀想だろ」

マサユキも同情する。

「そんな事ないでしょ。それっぼっちじゃ少なすぎでしょ」

その言葉に男性陣が全員首を振る。

「軟弱者連中ね」

そんな風に罵られるおぼえはない。

「ちなみにどのくらい飲んだんだ？」

「えっとね……」

マサユキの質問に、アヤサは昨日の事を思い返していく。

「初めにビールでしょ。二杯だったかしら。それから、芋をストレートで二杯と麦もストレートで二杯。梅酒をロックで一杯。そこから、赤ワインをデキャンタで頼んで……締めは熱燗で二合だったかしら」

聞けば聞くほど青ざめてくる。飲んでもいないのに酔ってしまいそうだ。

「ウイスキーもロックで二杯飲んでる」

ワタルが補足する。

「ああ、そうだった」

てへっと可愛く舌を出すのが、酒量を聞いた後ではとてもそんな風には思えない。

「とにかく、そんな事はどうでもいいから、今日も魔王城攻略を頑張りましょう」

ハルトが魔王城をキッと見据える。

「そうだな。ちょっとあまりのウバミっぷりにドン引きしてしまったな」

「マサユキさん、それってレディに対して失礼じゃないですか？」

アヤサは面白い冗談だとばかりに笑う。

「いやいや、間違っていないですって」

ケンゴがツッコむが、アヤサに睨まれ言葉を失う。

「失礼ですよね」

「あ、ああ、そうだね」

ケンゴは顔をひきつらせる。

「それはそうと、今日も頑張りましょう」

ハルトは一人張り切っているが、他の四人はそのまま雑談を続けている。

「今度、みんなで飲みましょうよ」

「……いや、わしは遠慮しておく」

「僕も」

マサユキとケンゴはブンブンと首を振って全力で拒否。

「男のくせに」

アヤサは舌打ちする。

「そう言ってもな、わしだってもう少し若ければな。さすがに四〇も半ばになると肝臓がな」

「年齢なんか関係ないのに。残念だな」

「オレは付き合うぞ」

ワタルは猛アピールする。

「しょうがない。この体たらくで我慢しておきますか」

「頑張るよ」

ワタルはできるだけ笑顔で答える。

そんなワタルを見て、マサユキとケンゴは健気だな……と思った。

「みなさん、いい加減出発しませんか」

ハルトがそわそわしながら言う。

「そんなに仕事熱心にならなくてもね……」

「アヤサさん、WAC時代もそんなだったんですか？ 人々のためにつて、思わなかったですか？」

真っ直ぐな瞳で言われると、アヤサでなくても照れてしまう。

「うるさい、熱血莫迦。そんな昔の事なんか覚えてないわよ」

「おお、真っ赤だ」

「うるさい」

茶化したケンゴをキッと睨む。睨まれたケンゴは、あやうく漏らしそうになってしまった。

「さて、そろそろ仕事をしないとな」

「そうですよ、マサユキさん。魔王城攻略ですよ」

ハルトはようやくかとはばかりに張り切る。

さすがに雑談ばかりしているわけにもいかないのて、そろそろ仕事を始めないといけない。

各々装備を確認する。

「さて、出発するか」

確認を終えるといよいよ出発だ。

「ロード！」

ハルトが門の前で叫ぶ――と五人の姿が消えた。

魔王たちの対応

消えた五人の姿は、城内の石室の中にあった。

「今日も現れました」

それを察知した参謀が魔王に報告する。

「今日も来たのか」

魔王は、やれやれと疲れたような、呆れたような声を出す。

「魔王様、いつその事、俺が向かいましょうか」

宰相が進言する。

「いいえ、そこはあたしの役目でしょ」

軍師が名乗り出る。

「いいや、お前たちはもうすぐ出勤だろう」

魔王に言われて二人は時刻を確認する。確かにあと二時間ほどで出勤だ。

本来の力が発揮できれば数秒で終わらせる事ができるだろうが、そうできない今の状態では終わらせる事ができるかわからないので、二の足を踏んでしまう。

「ここは、オレの役目かな」

とそこに、明け方まで仕事をしていた側近が帰ってきた。

「おかえりなさい」

参謀が普通に迎える。

「またあの連中が来てるのか。宰相も軍師も仕事だろう。だったら、ここはやっぱりオレだよな」

「お前は寝てろ」

欠伸混じりで言う側近に宰相が言う。

「そうだな。仕事から帰ってきたばかりだ。夜通しだったのだから休め」

「魔王様、大丈夫……ですよ」

ふああと大きな欠伸をしながらなので、説得力は欠片もない。

「おとなしく寝てなさい」

「だいじょう……ぶ、だ」

その言葉を残し、側近はそのまま床に倒れた。すうすうと気持ちよさそうに寝息をたてているのを、四人は見下ろしていた。

「……運びます」

しばらく無言の時間が流れたが、参謀が側近の体を起こす。

「しょうがないな」

と、宰相が側近の足を持つ。

二人で側近を持ち、彼の部屋へ運ぶ。

「魔王様、どうしましょう」

「まあ、今日も様子見でいいんじゃないか」

魔王ももうすぐ店に行って準備をしなければならぬため、来訪者たちの相手をしている時間

はない。

「悠長な……」

と言いつつ、それしかないのが現状だ。

「側近は寝かせてきました」

参謀と宰相が戻ってきた。

「ご苦労」

「魔王様、あの者たちはどうしましょう」

軍師とのやりとりを知らない参謀が訊いた。

「今日も様子見とする」

魔王は軍師に告げた事と同じ事を言う。

それを聞いた参謀は、そうですかと呟いた。

「ぼくでしたら城に残ってますので、あの者たちの相手をしますが……」

「いや、参謀はコーヒー園を頼む。大事な収入源だからな」

戦闘向きではない参謀を戦わせるわけにはいかないと、魔王は静観するように命令する。参謀もその気持ちがわかるだけに言葉が続かない。

「わかりました。与えられた命令を全力で遂行いたします」

参謀は恭しく頭を下げる。

「それでは、それぞれ出勤の準備をしようではないか。あの者たちは放っておけばいい。どうせここまで来るには時間が必要だろうからな」

その言葉を受け、三人はわかりましたと頷いて、それぞれの行動にうつった。

これが公務員の仕事です

「今日はどんなモンスターが出てくるかな……」

ハルトはわくわくしていた。

セーブした部屋から次の部屋までの通路は長い。しかし一本道なので迷う事はない。

装備が軽いケンゴやマサユキは普通に歩いているが、ワタルは重装備のため移動だけでもかなり体力を消費する。

「モンスターなんてゲームの中だけだと思っていたんだけどな……」

ケンゴはわくわくをなんとか隠そうとするが、それが徐々に表に出てきつつある。なにせ、すっごく楽しそうに、にんまりしている。

「本当にどうなってるのかしらね。いきなりこんな城が現れたと思ったら、今度は変な生き物でしょ。まあ、人間を襲ってこないだけマシなのかな」

アヤサが体をほぐしながら言う。

しかしそれはかなりの僥倖で、城の各部屋に配置されているモンスターはそこから出てくる事がない。

「いいじゃないか。こっちは書類を持っていくだけだろ」

「ワタルさん、そんな風に言われると萎えるじゃないですか」

ハルトが現実味がある言葉に抗議する。

「だってそうだろう。忘れがちだが、オレたちの仕事は戦闘じゃないだろう。戸籍関係の書類作成が仕事だからな」

ワタルは膝に手を置いて息を整える。

「そういえばそうだったな」

「そういえば、わたしも忘れてたかも」

マサユキとアヤサが真顔になる。

「なんだかんだで、すっかり馴染んできているようだな」

「そうみたいですわね。結構いい運動になるし、ストレス発散にもなるし、わりと楽しい仕事に思えてきてたわ」

「二人ともしっかりしてくれよ」

ワタルは大きなため息を吐く。

「でもですね、今はこうしているわけですし、これがメインの仕事でしょ」

「ハルト、ここの住人が普通に生きてくれば、オレたちがこんな事をする必要がないだろう」

「そんな事になったら物足りないじゃないですか。せつかくロールプレイングゲームみたいな事ができるんですよ。リアルゲームですよ。天職だと思える仕事に就けたんですよ」

熱く——いや、熱すぎるほど語るハルトを三人は冷めた目で見ている。ただケンゴだけは、同調したい気持ちを抑えるのに必死でそわそわしていた。

「そろそろ次の部屋みたいね」

アヤサの言葉通り目の前に石の扉が現れた。

ハルトが扉に触れると、ゆっくりと石の扉がスライドして開いていく。

完全に開くと、どういう仕組みなのかは謎だが、部屋の壁に設置されている蠟燭に火が点る。

「相変わらず不思議ですよね」

ケンゴはまじまじとその蠟燭を見るが、やはりなにもわからない。もともと、この世界のものではないという前提なので、常識が通用するわけではない。

「職業柄かい？」

そう言うマサユキも目を輝かせている。

「どうでしょうね。純粋な好奇心だと思うんですけど、もう職業病になってるだけかもしれませんね」

つまり自分でもよくわからないという事のように。

「不思議なものは不思議でいいじゃないですか。ファンタジーっぽくて最高！ それでいいんです」

ハルトが部屋に踏み込む——と、反対側にある扉の前が陽炎のように揺らぎ、ぼんやりとした影が次第に形になっていく。

はっきりしたその姿は、学校の理科室にありそうな骨格標本に似ていた。そんな骨格標本もどきがヘルメットをかぶり、手には錆びていそうな剣と円形の盾を持っている。

「今回はスケルトンか」

「うわっ。なにあれ。不気味。……でも、ちょっと可愛いかも」

ハルトは単純にわくわくしているが、アヤサはアヤサで楽しそうだ。

「定番というかベタな感じだな」

ケンゴは腕を組んで大きく頷く。

「ともかく、スケルトン退治やっちゃいましょうか」

ハルトがウキウキしながら突っ込んでいった。

お昼休憩

「ポーズ！」

時計の針がてっぺんを指す頃——正午になると、ハルトが叫んだ。

すると、今まで戦っていたスケルトンが動きを止める。だがしかし、この間に攻撃する事はできない。ポーズ——現状維持だ。

「ふう、疲れたな」

ワタルがどっしりと床に座る。ガシャンと鎧の派手な音が響く。

それに続くように、マサユキとケンゴも座る。

「疲れたわね」

アヤサはそう言いながら、一人用のレジャーシートを広げて座る。クッションがあるタイプなので石畳の上でも痛くない。

「なかなか手強いですね」

そう言いながら、ハルトは弁当とお茶をそれぞれに渡していく。

「今日はなんだ？」

ワタルは食べるのに邪魔になる鎧を脱ぎながら訊く。

「今日は生姜焼き弁当です」

「おおっ、わしの好物だ」

マサユキのテンションが上がる。

「ここのはおいしいですよ。ちょっと生姜が強めなんですけどね」

ハルトが自分の手柄のように自慢げに言う。

「期待できそうじゃない」

と、アヤサもテンションアップ。早速フタを開けて生姜焼きを食べる。

「うわっ、ビールない？ ねえ、ビールちょうだい。ビール。焼酎でもいいわ」

一口食べるなりアルコールを要求する。

「おいおい、真っ昼間だぞ」

「うるさい。アルコールに時間は関係ないの」

キッとワタルを睨む。

「時間は関係ないかもしれないが、今はまだ勤務中だからな」

「別にデスクワークじゃないんだし、いいじゃないですか。みんなが秘密にしてくれたら問題なさそうだし」

マサユキの言葉も届かないようだ。そう言いつつ、マサユキもその気持ちがわからないでもない。

「それよりも、あのスケルトンですけど、午後はどうします？ このままだと今日中に倒せるかわからないですよ」

ハルトはサラッとアヤサの問題発言をスルー。

午前中ずっと攻撃を続けたが、ほとんどダメージを与えられていない。

「そうだな……。意外と防御力が高いようだな。しょぼそうに見える鎧だが、高性能なのかもな

」

ケンゴが午前の状況进行分析する。

「そうですね。本体も骨ですからね。やっぱり硬いんでしょうね。ゲームだとわりと初期に登場するんですけどね」

「骨粗鬆症だったらよかったのにね」

アヤサは生姜焼きをもぐもぐさせながら、さらっとそんな事を言う。

「うわっ、なにそれ。面白いじゃないですか。コツシヨシヨウシヨウのスケルトン」

本人は流されるだけのつまらない冗談のつもりだったのだが、ハルトが過剰なまでに反応する。しかも言えていない。

「さすがに思いつかなかったな。なんだか悔しいな」

ケンゴもオーバーリアクションじゃないかというくらいに悔しがる。

「ですよ。その発想力、ちょっと欲しいですよ。ってというか、使わせてもらっていいですか」

「もしかして、自分の手柄にするつもりか」

「そ、そんな事は……………いいじゃないですか」

「それなら僕も使おう。さっそく呟いて……………って、ここは圏外だった」

スマートフォンを操作しようとするが、圏外だったので断念する。

その様子をマサユキはほのぼのとした表情で見ているが、ワタルはなにをはしゃいでいるのかまいちわかっておらず、ただアヤサだけを見ていた。

「そんなに反応されると、すごく恥ずかしいんだけど…………」

と、恥ずかしさを誤魔化すために、もぐもぐとご飯をかき込む。

がほかほと噎せたらすかさずワタルがお茶を渡す。その慣れすぎた行動に、マサユキはワタルの今後を心配をするが、すぐにどうでもいいと思う事にした。実際どうでもいい。

「それはそれとして、本当になにか対策を考えないと、攻略は難しそうだな」

マサユキがポテトサラダをもぐもぐしながら言う。

「あいつ硬すぎなのよね。このままじゃ、拳が潰れそう」

「アヤサは基本、素手だからな」

「そうなのよね。今回はなにか武器が欲しいかも。ねえ、なんでもいいから、サブマシンガン調達できないの？」

「銃器は手続きが煩雑なんだよ。そもそも、発砲許可が難しいのはわかってるだろ」

ワタルが生真面目に答える。以前の職種の経験上、その辺は一般人よりも身近だった。

「そんなのわかってるわよ。わかってるけど、言いたいのに」

それくらいわかるでしょ、とワタルを見る。空気を読めというか、行間を読めという視線だ。

「サブマシンガンか…………エアガンならなんとかかなるか。サバゲをしている誰かに頼めば、すぐに用意できるな。リクエストがあれば、たいてい大丈夫だと思いますよ」

「エアガンっておもちゃでしょ。BB弾なんかプラスチックの塊じゃない。そんなのでなにもできないでしょ」

実弾を撃った経験があるので、どうしても所詮はおもちゃだと思ってしまう。

「いやいや、ちょっとカスタムすれば殺傷能力を持たせるくらいできますよ」

暗黙の了解というか公然の秘密のようなものだが、公務員が言うと世間的に問題視されかねない。

「ケンゴよ、聞かなかった事にしておいてやる」

マサユキが熱く語るケンゴの肩に手を置く。

「いやいや、常識でしょ、こんなの」

「常識でも口に出すのは問題だぞ。ここではいいが、外では絶対に言うなよ」

「っていうかさ、本当にあのおもちゃでそんな事できるの？」

諷めようとしているマサユキを横に、アヤサが意外なほど食いついてくる。

「できますよ。スチール缶くらいならぶち抜けますよ」

「それってさ、ドラム缶を抜けるくらいにならない？」

「ドラム缶ですか……。まあ、なんとかできるかもしれないけど、僕はそんなに詳しくないんですよ。今度訊いておきますよ」

「おいおい、いくらエアガンでも、使うのは問題だぞ」

「マサユキさん、おもちゃなんだからいいじゃない」

「いやいや、殺傷能力がある時点でおもちゃ扱いは難しいだろ」

「でも、それって玩具でしょ。ちょっと威力を強めてるだけだし」

それを聞いて、マサユキは大きなため息を吐く。

「もうそのくらいでいいか」

もう満足か、と訊く。

「ありがとうございます。すっきりしました」

アヤサは晴れ晴れとした表情でマサユキにお礼を言う。

そのやり取りに、他の三人は首を傾げる。

「ちょっと待ってくれ。いったいなにがどうなってるんだ？」

その妙な空気――というか、マサユキとアヤサが以心伝心し過ぎているのが不安になり、ワタルがマサユキに詰め寄る。

「ちょっと離れんか。気持ち悪い」

マサユキがワタルを物理的に突き放す。

「マサユキさん、事と次第によっちゃ……」

「ん？ どうするつもりだ」

マサユキは全く動じない。むしろその態度にワタルが動じる。

「……すみません」

一瞬で冷静になったワタルが距離をとる。

「まったく……。まだまだ青いというか、純粹というか……」

やれやれと生温かい視線を向ける。

「まったく……なにやってるんだか」

アヤサも呆れていた。

「いやいや、なにがどうなってるんだ？ そのわかりあってるって態度はなんなんだよ」

不器用にも直球にしか訊けない事に、どこか微笑まじさがあった。

「説明するのって面倒だな……。マサユキさん、お願いしていい？」

「そうくるか」

マサユキは、しょうがないと言いながら、どう説明したものか考える。

「そうだな……。さっきの会話が全部ただの冗談だった。それだけだ」

それを聞いても、三人はいまいち理解できない。

「つまり、わたしの愚痴に付き合ってくれたの。わかった？」

「冗談？ 愚痴？」

ワタルが繰り返す。

「当たり前でしょ。これでも元WACよ。違法改造は問題だってくらい、一般人でもわかる事なんだから、わかってないはずないでしょ。そもそも、本物を扱ってる立場だったわけだし」

確かにそういう経験があればわかるだろう。

「つまり、あれだけノリノリだったのは嘘だと？」

ケンゴが継るようにアヤサを見る。

「当たり前でしょ。そりゃ、陸自仲間でサバイバルゲームをしてる連中はいるから、そういう違法改造を憎んでいる気持ちはわかるわよ。……もしかして、本気でしようとしていたとか？」

真っ直ぐに見られケンゴがたじろぐ。

「じよ、冗談ですよ。わかってるに決まってるじゃないですか。僕らは公務員ですし、違法とわかってるのに……。ねえ」

と、ハルトに助けを求める。

「えっ？ ここで？ えっと……。……ですよ」

いきなり振られたハルトはなにも言えない。

「つまりなんだ？ エアガンがどうかというのは、アヤサの悪ノリだったという事か？ で、それにマサユキさんが気付いて、その相手をしていたと……。そういう事か？」

ワタルは理解するために、言葉に出しながら状況を整理していく。

「さて、そろそろ昼休憩も終わりにするか」

マサユキは空になった弁当とお茶を片付けて立ち上がる。

「そうね。おいしかったわよ、今日のお弁当」

「ここのお店、他もいいんで、また用意しておきますよ」

ハルトがゴミを分別していく。

それを終わると、防具を身に着け、武器を手にする。

「さて、午後のバトル始めましょうか」

結局、作戦もなにもないまま、ただの雑談で昼休憩が終わった事に誰も気付かないどころか、気にすらしていなかった。

「ポーズ！」

再度宣言するとポーズが解除される。

みんなで飲もうよ

「セーブ！」

終業時間になりハルトが宣言する。

あれから四時間ほどスケルトンと戦ったが、結局倒す事ができず、今日はこの部屋を攻略する事ができなかった。

本日の業務を終え、五人は城門の前に移動していた。

「くっそー！ 攻略できなかった」

ハルトはガクリと膝をついて、ガシガシと地面を拳で殴る。

「気持ちはわかるが、それはやめておけって」

ケンゴがハルトの腕を握って止める。

今までは必ず一部屋は攻略していたので、一日かけて攻略できなかったのは初めてだ。つまり、今日はなんの成果もあげられていない。

「……悔しいじゃないですか」

ハルトは今にも泣き出しそうだった。

「そうだな。だけど、そんな事をして意味がないだろ。明日はその悔しさをプラスして、今日の借りを返してやろうじゃないか」

ケンゴはしゃがみこんで目線をあわせる。

「……………はい」

ハルトはその言葉に感動して涙をこぼす。

「うっわあ……なにこれ」

そんな二人を見てアヤサはどん引きする。その視線は侮蔑とっていいだろう。

ワタルはそんなアヤサを見て体が痺れていた。そのゾワゾワ感がちょっと癖になりそうだった。

マサユキはなんとか受け入れようと自分に言い聞かせていた。

「残念会じゃないけど、どうだ？ いい店があるんだ。落ち着くぞ」

ケンゴはいつも行っている喫茶店に誘う。

「そうだな。あの店のナポリタンはうまいぞ」

マサユキもそこには賛成する。

「アヤサとワタルもどうだ？ たまには落ち着く大人の店に行ってみないか」

「そこってアルコールありますか？」

アヤサが間をあげずに訊く。

「いや、確かなかったはずだ」

マサユキはメニューを思い出すが、アルコールはなかったように思う。

日本では曖昧になっているが、アルコールを提供する店はカフェで、喫茶店はノンアルコールのものしか扱っていないのが普通だ。それに従うなら、あの店は後者である。

「じゃあ意味ないじゃない」

アヤサは速攻で興味を失う。

「それじゃ、ボクがいつも帰っている店はどうです？　ちゃんとアルコールありますよ。居酒屋みたいに種類はないですけど」

「どんなのがあるの？」

「えっと……ビールと日本酒が何種類かと、焼酎もあったと思います」

普段注文する事がないのではっきりと覚えていないが、一応全てのメニューは把握している。

「しょうがないな……。今日くらいは行ってやりますか」

「というわけで、ワタルも行くだろ？」

「当然です」

わかりきった答えすぎてマサユキは笑いをこらえる事ができなかった。

「で、そこってどこだ？」

「わかりました。みんなで帰りましょう」

その妙な言い方に四人はクエスチョンマークを頭の上に浮かべるが、ハルトにとっては普通の言葉なので、まさかそうなのとは思えない。

しかし、なんとなく問えるような空気でもない。

とりあえず落ち込んでいるハルトを元気づけるんだという事を言い聞かせ、とりあえずそのままにする事にした。

ご帰宅

「ここです」

市役所に一度戻り終業の連絡をしてから、みんなで電車に乗って移動してきた。店の場所はハルトしか知らない。そもそも、ハルトが店の名前を言わないので、ハルトについていくしかなかったりする。

そんなこんなで到着したのは、賑やかな街にあるビルだった。

入り口からは店内がよく見える。

飲食店——広い意味では間違っていない。

ウエイトレスと違って差し支えなさそうだが、彼女たちの服装に特徴があった。別に露出が多いというわけではないし、ボディラインを強調しているわけでもない。

「そういえばそうだったわね」

アヤサはため息を吐く。次の瞬間、このままバックレてやろうと思ったが、マサユキに腕を掴まれて逃げるに逃げられない。一瞬行動が遅れた自分を呪う。

「アヤサよ、今日くらいは付き合っとうやろうじゃないか」

マサユキもハルトの趣向を完全に失念していた。

「へえ……メイドカフェってやつか。こんな場所なんだな」

ワタルは興味津々で店内を見る。

「僕も初めてです。テレビで見るくらいです」

どんな番組だと思わなくはないが、たまにワイドショーだったり、そういう雰囲気があるニュース番組で紹介される事もあったりする。なにしろ、こういうサブカルチャーは、世界に誇れるものなのだから。ただ、扱いとしてはキワモノの部類にされる事も多々あるが。

「では帰りましょうか」

帰る？ と全員が首を傾げる。ずっと気になっていたが、店に行くのになぜ帰るなのか。きっと未経験の人には理解されない表現だろう。しかし、ここではこれが正解。だってそうでしょー

—

「おかえりなさいませ、ご主人様、お嬢様」

五人の入店を見たメイドさんたちがそんな事を言う。

メイドカフェというものは、`行く、場所ではなく、`帰る、場所であるというのは常識だったりする。`ご主人様（お嬢様）をしに行く、`という言い方は例外かもしれないが、基本的には、`帰る、`と表現するんだぞ。なんて、こんな常識を語るまでもないよね。

「おお、これが……」

ケンゴはとにかく感動していたが、ワタルとアヤサはぼか～んとしている。なにがどうなっているのか理解できないし、そもそもこの不思議な空気に完全に飲み込まれている。アヤサが一緒だからというわけではなく、メイドさんに見惚れる余裕もない。

ここでもマサユキは、この空間を理解しようと店内を見回している。

「あ、円環の勇者さん、おかえりなさい。今日はお連れ様がいるんですね」

話しかけてきたのはみいわた。

「そういえばそうですね」

ハルトはにんまりとみいわを見る。

基本は一人なので……というか、誰かと一緒なのは初めてだとハルトも気付いていなかった。

「えっと禁煙と喫煙どっちがいいですか？」

普段なら空いている席に勝手に座ったりしても問題ないのだが、さすがに今日は連れがいるのでそれができない。

「えっと……」

と、ハルトは四人を見る。

それほど長い付き合いではないが、煙草を吸っている姿を見た事がない。

「禁煙席で」

マサユキが代表して答える。

「それではこちらへどうぞ」

みいわに案内されて席に向かうと、ゆきなが小さなテーブルをくっつけて場所を広げてくれていた。なにしろ基本的に小さなテーブルが多く、最大でも四人が限界なので、グループの場合はこうされるのが基本だ。

「おかえりなさいませ、円環の勇者さん」

ゆきなスマイルにハルトはメロメロになる。

「今日は大勢ですね。みなさんは初めてですか？」

明らかに挙動不審というか、所在なさげにしている四人は、一目瞭然でメイドカフェ初体験者だ。

「楽しそうですね。どうぞ」

と、みいわがおしぼりとお冷やを渡していく。

「それではメニューの説明をしますね。今日のケーキは木苺のタルトです。今日の限定は、ゆきなさんが作りました麻婆豆腐です」

おおっ、ゆきなさんの限定か。

と、ハルトはそれだけでトキメいて注文を決めた——が、そうしなくてもハルトを理解している彼女たちは、既にハルトのオーダーを書いていたりする。

「円環の勇者さんは限定ですよ。チェキはどうします？」

そうだな……とハルトは店内を見回す。

「みなさんもチェキ撮ってもらいましょうよ」

そう言われても、他の四人は別世界の言葉にしか聞こえない。

「悪いがよくわからないんだが」

マサユキが切り出してくれて、他の三人が少し楽になった。

「チェキですよ、チェキ」

常識でしょという顔で言うが、写真をよく撮る人を別にすれば、そこまでメジャーかと言われると答えづらい。

「小さな——名刺サイズのインスタント写真ですよ。記念にどうですか？」

そんなみいわの説明でなんとなくだが理解できた。

「それでは注文が決まりましたらベルで呼んで下さい」

別に急がせる必要もないので、みいわは一度離れる事にした。

「円環の勇者さんの限定は、みなさんの注文と一緒にいいですか？」

最後にそう訊かれ、ハルトはみんなを見て、そうですねと答える。

「さすがに慣れてるといふか常連だな。あれが噂に聞く、いつもの、というやつか」

みいわがいなくなるとケンゴが興奮してまくし立てる。

どうやら、ハルトが注文を言う前に注文の確認をされた事を言っているらしい。

他の三人は緊張というか、この不思議な空間のせいで、そんな事に気付かなかったが、ケンゴが改めて言った事で、すごいな……と素直に感心していた。

もっとも、ケンゴとマサユキも珈琲屋で似たような立場だという事には気付いていなかった。

結局、アヤサはビールを注文して、ワタルはそれに付き合うようにビール。そしてつまみになるように唐揚げプレート。ケンゴはトンカツプレート。マサユキはペペロンチーノと食後にコーヒーを注文した。それを聞いて、ケンゴも食後にコーヒーを追加した。

そしてハルトは、ツーショットチェキをお願いしていた。

落ち着きません

「なんだか変な感じ」

先に運ばれてきたビールを飲みながら、アヤサは店内をキョロキョロ見回し落ち着きがない。いつもは賑やかな居酒屋が多く、周囲が全く気にならないのでむしろ落ち着くのだが、他の客が基本的に一人なので静かなうえに、可愛い制服を着た女の子たちがフロアにいるのが、彼女には違和感でしかない。

「こんなに若い女の子がいっぱいなのって、ちょっとしたキャバクラみたいだな」

「ああ、なんとなくわかるかも」

ワタルの言葉に、アヤサがうんうんと頷く。

「チャージ料ってあるわけ？」

「なんですか、それ」

アヤサの当然の質問にハルトはピンとこない。

「ちょっとチャージ料よチャージ料」

「すみません。初めて聞く言葉です」

「アヤサよ、そういうのはなさそうぞ」

「こいつの場合、知らないうちに取りられてたりするんじゃないの？ 単に名前を知らないだけで可能性もあるし」

そう言い返されて、マサユキはなるほど……と納得した。

「だったら訊けばいいんじゃないか？」

そう言うなりマサユキはテーブルにある小さなハンドベルを鳴らす。

「はい、なんででしょう？」

そう言ってやってきたのは、丸い童顔の女の子だった。短めのツインテールがさらに幼く感じさせる。

「すみません。先に訊いておきたいんですけど、ここってチャージ料はいくらですか？」

アヤサが不躰じゃないかと心配になる感じで訊いた。

「チャージ料はいただいておりません。純粹にご注文いただいた料金だけです」

にっこりと答える。

多少のアミューズメント性はあるが普通のカフェだ。健全なお店だよ。もっとも、あくどいお店もあつたりするので注意は必要だけど。

「そうなんだ。ありがとう」

アヤサが言うとそのメイドさんは、失礼しますと言って戻っていった。

「健全なお店ね」

「普通の喫茶店でチャージ料はないでしょ」

ケンゴが何故か自慢げに言う。

「普通ね……。まあ、エロい制服のファミレスなんかもあるらしいし、普通っちゃ普通なのかもね」

「そういうのと一緒にしないで下さい」

ハルトが少し声を荒げる。

「落ち着きなさいよ」

周囲の視線を気にしてアヤサが宥める。

「悪かったわよ」

そのタイミングで、それぞれ注文した料理が運ばれてきた。

「結構マジじゃない」

メイドカフェの料理だからしょぼいと勝手に思っていたようで、アヤサはそれぞれの料理が普通のお店で食べるものと同じか、それ以上のクオリティだったので驚いてそのまま口にしてしまった。

てっきり冷凍ものをあたためただけのものが出てくると思っていたのだが、定食屋で出てくるような料理だった。もっともプレートなので、メインと付け合わせが一枚のお皿にのっている。ご飯もお皿だったりする。それでも本格的に見える内容だった。

「ぼったくりかと思ったけど、ちゃんとしてるよな」

ワタルもいつものノリでそんな事を言ってしまう。彼もさして期待していなかったらしい。

「二人とも失礼な。この料理はすごいんですよ」

そう言うハルトの前には、今日の限定の麻婆豆腐があった。

「うまそう……」

「ねえ、なにそれ」

おいしそうな料理に目を輝かせるハルトをよそに、アヤサは不思議そうにその料理を見る。

「麻婆豆腐じゃん」

なにを訊いているんだ？ とアヤサを見る。

「もしかして、麻婆豆腐を知らないとか？」

「知ってるわよ。それが麻婆豆腐？」

どうにもアヤサには信じられない。

というのも、ハルトの前にあるのは、ご飯の上に麻婆豆腐のようなものが――いや、麻婆豆腐がかけられているものだ。カレーライスのような状態は、彼女だけでなく他のメンバーも口にしないだけで不思議に思っていた。

「カフェのランチってこういうもんでしょう」

ハルトがそう言っても納得できるはずがない。

「そもそも、カフェで麻婆ってのがわけわからないんだけどね。普通ないし」

アヤサがイメージするカフェには決してないだろう。プレート料理も定食のようなのだが、これらはギリギリセーフといったところだろう。少なくとも彼女にとってはカルチャーショックだった。

「まあいいじゃないか。いただきますか」

マサユキが音頭をとって食事を始める。

アヤサはワタルの前の皿から唐揚げをひよいぱくひよいぱくと取るので、ワタルは付け合わせのポテトやサラダだけでご飯を食べている。

「アヤサ、食べるなら自分で注文したらどうだ？」

「いやいいんですよ。最初からこうなるだろうって思ってたんで」

マサユキの言葉にワタルは笑顔で言う。諦めているのかとも思えるが、その立場を喜んでいる節もあるのでどうしようもない。

「なにこれ、すごくおいしいんだけど」

パサパサした唐揚げならこんなに食べるはずがない。

「ジューシーだしスパイシー。でも、きつすぎない感じ。ちょっと、そこいらのレストランのチキンソテーとか、そういうのより高級料理感あるわよ」

アヤサが絶賛していると、ちょうどヤマトが通りかかった。

「ヤマトさん、今日も最高に旨いですよ」

ハルトが感想を告げるとアヤサは目を輝かせる。

「もしかして、これってこのイケメンが作ったの？」

アヤサのテンションが振り切れ気味になる。

「お気に召していただけましたか、お嬢様」

ヤマトは全ての女性を悩殺してしまうような笑みを向ける。普段はそういう素振りのないアヤサも、その笑みに悩殺されてしまっている。もう目がハートだ。

「嫁に欲しい」

しかし口から出た言葉はこれだ。

「おお、アヤサさん、わかってるじゃないですか」

ハルトはノリノリだ。

「でしょ。嫁に欲しいですよね」

テンションが上がるハルトを見てマサユキとワタルは、頭大丈夫か？ と目が語っている。

男に対して嫁に欲しいと言うアヤサは、まだ異性という事でなんとか理解できなくはないが、ハルトに関しては同性だ。まさかそういう趣味なのかというのは想像もしたくない。

「ごゆっくりくつろいでいて下さいね」

「あの……写メいいですか？」

店のルールを知らないアヤサは、普段のノリでそんな事を言う。

「申し訳ありませんが、当店はお食事以外は撮影をお断りしておりますので。チェキをご注文でしたら喜んで」

ヤマトは柔和な笑みで対応する。

「じゃあ、そのチェキで」

アヤサはとにかく勢いだけだ。チェキがなんなのか、いまいちわかっていない。

「かしこまりました。準備ができましたら、お声をかけさせていただきます」

そう言って礼をして戻っていった。

「アヤサさん、ちゃんとチェキは頼んでますよ」

どうせ誰にもわからないと、ハルトは人数分のチェキを頼んでいた。しかもそれぞれのツーショットと、ゆきなと五人の集合チェキをだ。

食事が終われば言うつもりだったのに……と、ハルトはため息を吐く。

まさかの共通点

それからアヤサが日本酒を……と冷酒を注文。枡に入ったグラスに注がれているのに違和感をおぼえつつ、それでもおいしく飲んでいた。ついでにチキンソテープレートを注文し、ライスは全てワタルに食べさせて、ツマミにしてほどほどに満足していた。

食事を終わるとチェキタイム！

それぞれ気になるメイドさんとチェキを撮る事になり、ハルトとアヤサはノリノリだったが、他の三人はものすごく照れていた。

全員でせつなとチェキも撮って、ハルトの分以外は、それぞれすぐに落書きしてくれた。

チェキを撮り終わると、マサユキとケンゴが注文したコーヒーが運ばれてきた。

「砂糖とミルクはどうしますか？」

「わしは結構」

「僕もいいです」

ハルトはせっかく混ぜてもらえるのに……と思ったが、二人にはどうでもよかった。

「しかし、こういう店――」

と、喋りながらコーヒーを飲んだ瞬間、マサユキは言葉を詰まらせた。

「ケンゴ、お前も飲んでみる」

慌てた声でケンゴに飲むように言うが、ケンゴはまさに今飲もうとしていた。

「なんですか、マサユキさん」

「いいから飲め。そうすれば全てわかる」

やけにテンションが高いマサユキを怪訝に思いつつ、ケンゴはコーヒーを飲む。

「……………っ！」

一口飲んだ瞬間、ケンゴはクワツと目を見開いた。

「マサユキさん、これって……。僕、そんなに味がわかる方じゃないですけど、これって……あれですか」

「やっぱりそう思うか？ わしも飲んだ瞬間に思ったんだが、これってあの喫茶店のコーヒーと同じだよな」

ケンゴは大きく頷く。

二人が盛り上がっているが、他の三人には全くわからない。

「すみません、ちょっと訊きたいんですけど」

と、マサユキはたまたま通りかかったゆきなを呼び止める。

「なんででしょう？」

「このコーヒーなんだが……」

「なにか問題がありましたか？」

ゆきが反射的に申し訳なさそうな顔をする。

「いや、そうじゃないんだ。このコーヒーと同じ味を別の店で飲んだ事があるんだが……」

マサユキは言いながら、どう説明すればいいのかよくわからなくなってきた。仕入れる店が一緒なら、豆が同じだという事もあるだろう。

「ああ、もしかして」

どうやらゆきなには思い当たる節があるようだ。

「なにか知っているのかね」

「そのコーヒー豆はちょっと特別で、他で使ってる店はひとつしかないですけど……もしかしてその店って、月の音色、ですか？」

ゆきなの中から出た店名をハルトたちは知らなかったが、マサユキとケンゴの顔色が変わった。そもそも二人以外は、それが店名だと一瞬わからなかった。

「まさにそこだ。その店のコーヒーなんだ」

マサユキは、そうそうと何度も頷く。似た業種だとはいえ、まさかここで共通点があるとは思ってもいなかった。世間は狭いな……とちよつと思った。

「ご主人様は、あの店に行かれた事があるんですね」

「最近はほとんど毎日通ってるんだ。なあ、ケンゴ」

突然の事だったが、ケンゴは何度も頷く。

「今まで飲んだどのコーヒーよりもおいしいんで、間違はずのない味なんだ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

ゆきが満面の笑み（営業用）を向ける。本当は小躍りしたいくらいだが、TPOを考えるとさすがにそれはできない。

「そういえば、マスターが豆は自家栽培と言っていた気がするんだが……」

どこの国から仕入れているのかと訊いたのに、返ってきた答えがまさかのものだったので印象に残っていた。そもそも、想像する事すらなかったものだ。

「そんな事を言っていましたか。そうなんですよ。そこの豆を使ってるんです」

それを聞いてハルトが、そうだったのか……と、とりあえず納得している。普段ほとんどコーヒーを飲まないので興味がなかった。

「まさかここでも飲めるなんて……。というか、どうしてここはその豆を使ってるんですか？」

マサユキの質問にゆきんは少し言いづらそうにしたが、知り合いなんです、と答えた。

「いやあ……まさかの発見だ。ハルトよ、なかなかいい店を知ってるじゃないか」

いきなり褒められて、ハルトはどうすればいいのかわからない。

「なにマサユキさん。そのコーヒーって、そんなにおいしいの？」

アルコールにしか興味がないと思っていたアヤサがまさかの食いつきだ。

「アルコールじゃないぞ」

とワタルが反射的に言ってしまい、アヤサがキツと睨む。

「そんなにおいしいおいしって言われたら飲みたくなるでしょ」

「ボクも飲んでみたいです。ゆきなさん、コーヒー追加でもらえますか」

「わたしもお願いします」

ワタルがオレも……と言う前に、

「それでは三人分でいいですか？」

さすがのゆきなだ。

「わしはお代わりを」

「僕も」

「では、人数分でよろしいですか？」

「それをお願いします」

と、ハルトが代表して答える。

しばらくしてコーヒーが運ばれてきて、全員が堪能して至福の時間を過ごした。

「なかなかよかったな」

マサユキは満足そうだった。

「そうですね。まさかここであのコーヒーが飲めるなんて驚きですね」

ケンゴもほくほく顔だ。

「確かにあんなコーヒーは飲んだ事なかったわ。本当にコーヒーなの？」

誰もが驚くほど、アヤサのテンションは高かった。

「アルコール以外でこんなになるのを初めて見た」

ワタルが感動しているが、やっぱりアヤサに睨まれて縮こまってしまう。

「でも、あのコーヒーはおいしかったですね。今度帰った時はまた飲んでみようと思いました」

ハルトを元気付けようと思つての会だったが意外や意外、マサユキとケンゴも満足したし、アヤサも予想外の発見をして、当初の予想よりも満足な結果となった。

ご満悦の報告

「魔王様、今日のご報告をさせていただきます」

食事を終え、軍師が真っ先に口を開く。

「やけに乗り気だな。しかも嬉しそうだな」

ニコニコしている軍師は珍しいので、魔王はなにかと興味津々だ。

「もしかしてあれか？」

宰相が訊くと、軍師はニヤニヤと笑みを返す。

それを見て宰相は大きなため息を吐いた。

「魔王様、今日ですね、ご主人様の中に、あのコーヒーをすごく褒めてくれる人がいたんです」

「ほう……」

今までもあのコーヒーがおいしいと言ってくれるご主人様お嬢様はいたが、今日は特別だった

。

その度に報告しているのに、魔王としてもその程度では新鮮味はない。しかし軍師の笑顔から、なにかあるんだろうなとは思っていた。

「今までもおいしいって言ってくれる人は大勢いましたけど、それがですね今日は違うんですよ」

「なにが違うんですか？」

参謀が訊く。

普段なら話に割り込んで機嫌が悪くなりそうな場面だが、今日はよく訊いてくれた——と軍師のテンションを上げる効果になった。

「なんとですね、魔王様のお店を知っている人が来たんですよ」

それを聞いて魔王は頷いて、いったい誰だろうと客の顔を思い返していくが、メイドカフェに通いそうな人が思い浮かばない。

「最近結構通ってるらしいですよ」

と、軍師は話した事やその容姿を魔王に伝える。

「ああ、それなら思い当たる節があるな」

思い浮かびはしたが、そういう店には行かないと思い除外していた。しかし、同僚と一緒にだったという事なので納得できた。

「その人があまりに褒めるので、他の人も飲んで絶賛していたんです」

「それはよかったではないか」

と、魔王は参謀を見る。

「宰相の淹れ方もよかったのでしょうか」

参謀は謙遜で宰相に手柄を分譲する。

「いやいや、もうどうでもいい」

宰相は想像しなかつたりアクションをする。

「どうかしたのか？」

魔王が訊く。

「いえ、もう聞き飽きただけです」

げっそりと宰相が答えるが、軍師はニコニコしまくっている。

「軍師のヤツ、給仕中はもとより、帰り道でもずっとこれですよ。いい加減もう聞きたくないんです」

喜ばしい内容でも、その回数によっては聞きたくない話になるんだという事がわかった。それでも軍師は話し続ける。

「だって嬉しいじゃない。魔王様のお店の常連さんだよ。しかも、ちゃんとコーヒーの味をわかってくれてるんだよ。それを褒めてくれるんだよ。これが嬉しくないわけじゃない」

いつになく軍師が可愛いな……と誰もが思ったが、口にはしなかった。

「どう？ 嬉しいでしょ。あたしたちが認められているって事よ。受け入れられてきているって事よ。この世界に馴染んできているって事よ。あわよくばこれでこの世界を魅了して征服できるかもしれないって事よ」

軍師が早口でまくしたてる。こんなテンションになるのはわからなくはないが、それにしても高すぎじゃないだろうか、さすがに引き始めてきていた。

「そうだな。嬉しいのはわかった。少しだけ落ち着いてもいいのではないか。そのままだと疲れるだろう」

魔王がやんわりと気遣う体で言うが、軍師のテンションが下がる気配がない。

「いえ、この喜びを語るのに疲労など感じるはずがございません。いつまでも語っていても語り足りないほどです。まだまだ話したいです」

それを聞いて、魔王、宰相、参謀は青ざめる。

「そろそろ自室に戻らせてもらおう」

そう言って魔王が席を立つと、忙しいアピールをしながら部屋を出ていく。

「それじゃぼくも農園が気になるので、ひとまず失礼しますね」

ここだとそのタイミングを逃さず参謀も席を立つ。

「俺も……」

「あんたは聞いていなさいよ。どうせなにもないんだし」

それはお前の勝手な理屈だ……という宰相の言葉は、軍師には届かない。

「頑張ってください」

参謀は小声で宰相に声をかけて出ていく。

「冗談だろ……」

諦めて覚悟を決めるしかないのか……と、これからどれだけ続くかわからない地獄を想像するだけでも辛かった。そして今、それが現実になろうとしていた。

結果、軍師は同じ話を延々と続けて朝を迎えた。宰相が眠る事をよしとせず、眠りそうになると文字通り叩き起こしていた。二人で過ごした夜はある意味では朝チュン。桃色成分は皆無だけどね。

「ただいま」

そんなところへ、深夜勤務を終えた側近が帰ってきた。

「おかえり、側近。頼むからここに座ってくれ」

ここが最後のチャンスだと、宰相は今まで座っていた席に側近を座らせる。

「おいおい、どうしたんだ？ オレは疲れててシャワーを浴びたいんだが……」

「まあ、俺を助けると思って」

そう言って無理矢理座らせると、それじゃ寝るわ、と宰相はダッシュで部屋を出ていった。

「しょうがないな。でも、側近にはまだ話してないもんね。最初からじっくり話さないとだけど、この気持ちはやっぱり全員に伝えないといけないよね」

軍師は睡魔を全く寄せつけず、あのテンションのまま継続していた。これはもはや脅威。

「いったいなんなんだ？」

側近はそんな軍師が放つオーラに圧倒されて動けずにいた。

「今日ね……もう昨日か。とにかくすごく嬉しい事があったのよー」

側近が解放されたのは、軍師の出勤時間になった時だった。ちなみにその日はお給仕が休みだったので、丸一日以上だった事を補足しておく。

将軍、来る

農園の手入れを終え、城内に戻ってきた時、参謀は部屋の一部の空間が歪んでいる事に気付いた。

なんだ？　と思って近付いていくと、大きくぐにやりと歪み、そこにシルエットが現れる。

「うわっ」

参謀が慌てて跳び退く。

そのシルエットがまるで透明なカーテンの中から出てくるようにはっきりとしてくる。

「あ、あなたは……」

それは参謀も知っている顔だった。

「しよ、将軍？」

大きな長い角がついた兜をかぶった大男に向かって言う。

「参謀殿。お久しゅうございます」

ガシャガシャと甲冑の音を響かせながら片膝をつく。

そう言いながら兜を脱ぐと、もじゃもじゃの髭が現れた。顔全体が髭で覆われているのでそう見える。

「将軍、どうしてここに」

つい訊いてしまったが、そもそも自分たちがこの世界にやってきた方法がわからない。気が付けばいたし、城内には大勢いたはずなのに五人しかいなかった。

「わかりませんが、魔王様たちの姿を見なくなり、城内を探索しておりましたら、なにやら怪しく空間が歪んでおりまして、調査をしようとしたら参謀殿の姿があった次第です」

無骨な外見のくせにやたらと丁寧な物言いは通常仕様だ。

「なるほど。そうだったのですか」

この世界に来てから元の世界の事は全くわからなかったが、初めて元の世界の状況を知る事ができた。

「参謀殿、早速ですが魔王様は」

魔王の配下としては、やはり気になるのはそこだろう。

「魔王様は、今はお休みになられています」

そろそろ起床の時間だが、起き抜けに将軍に問い詰められるのは苦痛だろうと判断した。

「そうですか。ご無事なのですね」

姿が見えなくなってからどれほど心配していたのかは想像するに難くない。それは誰もが同じ気持ちのはずだ。だからこそ、こうして無事を確認できただけでも安堵だろう。今すぐは無理でも、もうすぐその御身を確認できるのならなおさらだ。

「まもなくお目覚めになられるでしょう。宰相と軍師も同席できるでしょう。側近はこれより休息に入られるはずなので、込み入った話は難しいでしょう」

参謀が現状を伝える。

「皆様様もご一緒でしたか。でしたら魔王様もさぞご安心でしたでしょう」

「どうでしょうね。慣れない環境ですが、それぞれに馴染んできたところですよ」

それを聞いて将軍は安堵のため息を吐いた。

魔王様と朝食を

将軍を客間に待たせ、参謀が朝食の準備をしていると、大きな欠伸をしながら宰相が起きてきた。ふわっとした薄ピンクのガウンが妙に似合っている。寝起きなので少しだらしない顔をしているのは、店での彼のファンなら垂涎ものだろうなと思ったが、残念ながらそういう趣味はない。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

そう言うなり、朝食のサラダ用にと用意したフルーツトマトをぱくつつまむ。

「つまみ食いはやめて下さいね」

振り返りもせず窘める。

「まあいいじゃないか。それにしても、誰か来ているようだな」

寝起きでも流石だろう、宰相はその気配を感じていた。

「殺気はないようだが、気配を殺すどころかアピールしているかのようだ。いくらなんでも、これでは気になってしょうがないぞ」

「そうですね。でしたら、宰相が言ってきてくれませんか」

「俺がか？ 相手と場合によれば、どうなるかわからんぞ」

「大丈夫だと思いますので、全て宰相にお任せします」

参謀は調理の手を止めないので、宰相はどうなっても知らないぞと呟きながら、気配がする方に向かっていった。

「さて、どうなるやら」

参謀は楽しそうに無邪気な笑みを浮かべた。

その次の瞬間、宰相の大きな笑い声が城内に響いた。

その直後、軍師の抗議が響いた。

「賑やかですね」

それでも参謀は調理の手を止めない。ただニヤニヤと笑うだけだ。ただ、魔王の睡眠の邪魔になっているかと思ったが、目覚まし時計だと思えば問題ないと思い、やっぱりそのまま調理を続けた。今日は一人分多いが、手間はたいして変わらない。

ダイニングの席が全て埋まっていた。普段は側近がいないので空席があるのだが、今はその席に将軍が座っている。

「将軍よ、よくぞ来た」

魔王様……と話し出しそうになる将軍を魔王が止める。

「語るべき事は多々あろうが、今は食事をする時間だ。後ほどじっくりと聴こうではないか」

そう言われ、将軍は黙るしかなかった。ここで話そうものなら不忠でしかない。

その間に、参謀がサラダボウルから、それぞれの皿にサラダをわけていた。

「それでは、本日も健やかに過ごせるよう、まずは朝食をいただきます」

「そうですね。お腹が空きましたし」

軍師は目の前の朝食を早く食べたくてしょうがない。

カリッカリに焼かれたベーコンは、やはり熱いうちに食べたい。目玉焼きも黄身が絶妙なトロトロ具合だ。

カリッと焼かれたバゲットの上では、トロ〜ンとバターが溶けている。

「ではいただきます」

魔王の言葉をきっかけに、全員が食事の挨拶を唱和して、目の前に用意された食事を食べ始める。

それは特におかしな光景ではないはずなのだが、将軍にとってそうではなかった。

穏やかすぎる。

あちらの世界では、日々戦闘が行われていた。そのためというだけでなく、落ち着いて食事を摂るという事はなかった。少なくとも、将軍はそういう環境だった。

それが今はどうだろう。血の匂いは微塵もない。殺伐とした空気が全く感じられない。

どういう事ですか――将軍は今すぐにでも訊きたい。しかし、食事後に話を聴くと魔王に言われているため黙っているしかない。

「……………」

どうする事もできず、将軍もとりあえず目の前の食事を摂る事にした。

「……なんだ、これは」

将軍は目玉焼きをそのまま口に運ぶ。食事の礼儀作法などというものは戦場にはない。ついその癖で食べてしまう。

「うまい。なんだこれは」

口の中でトロ〜ッと広がる濃厚な黄身の風味と、それをさらに強調するような淡泊な白身のハーモニーが広がっていく。

「おいしいでしょ」

「どうして軍師が偉そうなんだ」

ニコニコしている軍師に宰相が言う。

「別にいいじゃない」

「どうだ、参謀の料理はうまいだろう」

「はい。とても」

将軍はガツガツという表現そのままに、皿まで食べてしまうんじゃないかという勢いでかき込む。

うまいうまいと連呼しながら食べる姿を見ていると、この世界は平和なんだな……と改めて感じさせられる。

将軍の報告

どこか微笑ましい食事を終え、コーヒーを飲みながら魔王が切り出す。

「では聴こうか」

魔王がそう言っても、一瞬わからなかった。将軍はあまりに充実した食事で、本題をすっかり忘れてしまっていた。

「魔王様、まずはご無事でなによりでした。全ての者が願っておりました。お慶び申し上げます」

まずは跪き深々と頭を下げる。

「うむ。心配をかけてすまぬ。しかし、連絡の方法がなかったのだ。赦せ」

「とんでもございません。こうしてお姿を拝見する事ができ、他の者にも今すぐにでも伝えたいと願っております」

「どうにかせねばな」

魔王とて最初に連絡をとろうとしたが、どうする事もできず諦めていた。

「現在、他の者はどうしておる？」

「はい。他の者たちはなんとか現状を維持しつつ生活しております。魔王様たちのご不在である事以外、これといった問題はありません」

それを聞いて、よかった、と全員が安堵した。

「やはり、魔王様がおられない城内はもの淋しいです」

「城内……？」

軍師が引かかる。

「魔王城はここにあるのよ。どうして城が……」

「いえ、城はなくなってなどおりません。そのままです」

「どういう事？ だって城はここに……」

確かに今は城の中にいる。ずっと生活をしていた。城内にいた者たちの姿が消えている以外は以前と変わっていない。この世界に馴染むために、新たに入手したものがあるほどだ。

「よくわかりませんが、どうやら魔王城はあちらとこちら、両方の世界に存在するようですね」

参謀が呟く。

「しかし、そうだとすれば納得できる事もあるな」

宰相が頷く。

「どういう事？」

軍師が訊く。

「各部屋には、それぞれモンスターが出現するだろう。彼らはどこから来て、どうなっているのか、不思議じゃなかったか？」

宰相に言われ、そう言えば……と参謀と魔王も思った。

「城がどういう理屈かわからないが、繋がっているとしたら納得できるとは思わないか」

「確かにそうですね。だとすれば、どうにかして連絡できてもよきそうですけどね」

「参謀の言うとおりでな。しかし、一方通行なのだろうな」

魔王はあまり希望を持っていなかった。

もし双方向なら連絡ができて当然だ。しかし、部屋に出現したモンスターとすら連絡ができないのだ。

「でも、そうならどうして将軍はここにいるわけ？」

確かに――と全員が頷いた。

他のモンスターとは会話すらできないのに、将軍はこうして会話をし、食事まで摂っている。

「どうやらなにかあるようですね。ただ、それがサッパリわかりませんが」

参謀は首を振る。

「参謀はなにか気付いた事はないか？」

魔王が訊く。

他の者たちは外にいる事がほとんどだが、城の留守を預かる参謀ならばなにか気付く事もあるかもしれない。

「申し訳ございません。思い当たる節がないのです。侵入者たちの件も含め、なにかと不手際が多く申し訳ございません」

「いやいや、それは気にするでない」

「侵入者ですと？」

将軍が参謀の言葉に反応する。

「どういう事ですか。侵入者とはどういう事ですか」

詳しく教えろと参謀に詰め寄る。

「将軍、落ち着いて下さい」

グイッと顔を近付けられて参謀は将軍をグイグイと押し返す。

「魔王様……」

「まあ、話してやれ。将軍は落ち着け」

参謀は魔王に確認をとる。そして将軍はスッと座る。

「わかりました」

将軍はゴクリと唾を飲み込む。

「この魔王城には日が高くなる頃――そうですね、二時間後くらいでしょうか、その頃になると何者かが城内に侵入してきます。正体は不明。各部屋に配備されている者が現れ対応していますが、侵入者たちはそれらを攻略して進んでいる状況です」

参謀が端的に説明する。

「そういえば、配下の者たちが数人姿を消していた気がするが……そういう事だったのか」

将軍はよく考えて、そういえば……と思った。

「魔王様、そのような者たちをどうしてのさばらせているのですか。軍師殿もおられるというのに」

さすがに魔王を責める事などできるはずもなく、なんとか意見をできるギリギリの軍師に向かって言う。

「黙りなさい。これは魔王様のご意向だ。将軍ごときが意見する事ではない」

将軍なのでそれなりに地位は高いのだが、さすがにここにいるメンバーには意見ができる立場にない。そういうヒエラルキーなのだ。

「申し訳ございません」

将軍は床に座り頭を下げる。土下座だね。

「魔王様、恐れながら申し上げます。何故 なにゆえ その侵入者たちをそのままにしているのですか」

魔王の意向だと言われても、他の状況を知らない将軍に納得できるはずがない。

「そうだな。将軍にとっては、納得できるものではないかもしれないな」

魔王は穏やかな表情で将軍を見る。

「しかしな、わかってはもらえぬか」

魔王は説明をせずに話を切り上げようとする。

「参謀、この件については、夜にでもワシから話をしよう。そろそろ出勤の時間なのでな。宰相と軍師もそろそろであろう」

魔王はそれぞれにそう言うのと自室に向かった。

そう言われて時計を見ると、そろそろ出かける準備をした方がいい時間だった。

「ゆっくりしすぎましたね」

宰相はすっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干すと自室に向かう。

「残してごめんね」

軍師は参謀に謝って、コーヒーをそのままにして自室に向かった。

「……………」

その姿を将軍は受け入れられずにいた。

参謀は少しでも説明すべきだとは思ったが、魔王が自らすると言ったのだから、ここで説明するのは不忠にあたると思いなにも言えなかった。

やる気の将軍

悶々としているのが丸わりの将軍を気にしながら、参謀が家事という名の日々の仕事をこなしていると側近が帰ってきた。

「今日は少し遅かったですね」

遅いといっても許容範囲内だ。普段よりも一時間ほど遅い。そのせいで側近は魔王に会えていない。

「ちょっと仕事仲間であつてな。朝食はいらない」

参謀にそれだけ言うと、将軍に気付く事なく自室に向かった。

「ちなみに、魔王様たちには帰ってくる途中で会った」

と、報告の声だけが聞こえた。

「お疲れさまでした。ゆっくり休んで下さい」

参謀も特に気にする事なく、側近の分の朝食にと準備していたものを片付ける。食材は基本的に調理前なので、昼食に使えるだけなので問題はない。

そんな作業をしている参謀を見ていると、将軍の中にどこにもぶつけようのない気持ちが溜まっていく。そのどんよりとしたものは、彼の中で渦巻いていた。

「おやおや、そろそろ時間ですね」

参謀はモニターの電源を入れる。そこに映し出されたのは無人の石室だった。石の壁、石の床、石の天井――石で囲まれた空間でしかない。

「来ましたね」

そこにタイミング良く五人の姿が現れた。彼らは統一感があるようなそうでないような、めいめいの衣装を纏っている。

「参謀殿、この連中か」

将軍は勢いよく立ち上がる。

「そうです。ただ彼らの素性を調査中ですので、手を出さないように――」

と説明している途中で、将軍の姿がない事に気付いた。

「マズいですね」

魔王からは、この世界の人間を傷つける事を禁じられているので、直接手を出すわけにはいかない。それを知らずに向かった将軍を止めなければならない。それは留守を任されている自分の仕事だ。

「しかし、将軍を止められるかどうか」

戦闘が得意ではないので、戦闘に特化している将軍を止める事は難しいだろう。もとより、力で止める事ができるのは魔王くらいだろうが、その魔王は不在だ。もっとも、この場にいたとしても、本来の力を発揮する事ができない今は、力任せで止める事はできないだろう。

そういう状況ではあるが行かないわけにはいかない。

「今日は荒れそうですね」

参謀は途中の作業をキリよく終わらせると、問題の石室に向かった。

やる気の勇者たち

「さあ、今日も頑張りましょう」

難関だったスケルトンを攻略した事が自信になったのか、ハルトはいつもよりもテンションが高い。

そのテンションは、目の前に聳える魔王城よりも高いだろう。その高さは大気圏や成層圏を突破して、宇宙空間まで到達するくらいだ。

「そうね。最近結構慣れてきたし、この仕事もなかなか楽しいかも」

アヤサも珍しくやる気満々だ。昨日のアルコールは残っていないようだ。

「悪い。少し静かにしてくれ」

ワタルは真っ青な顔色で、頭を押さえながら消えそうな声で訴える。

「本当にダメなんだから」

アヤサはそんなワタルに対して、容赦のない音量で責める。今のワタルには内容よりも音量が辛い。

「アヤサ、わざとだろ」

「そんな事ないですよ」

マサユキの言葉に笑って誤魔化す。

「悪魔だ」

ケンゴが呟いたのに気付きアヤサが睨む。

「い、いえ、なんでもありません」

ケンゴはその眼力に一瞬で敗北し、ひたすら謝る。さすがに土下座まではしなかったけど。

「ワタルさん、体調管理はきちんとしないと。きっとこれから強敵がどんどん現れるはずですよ。ダンジョン攻略も中盤戦ですよ」

「本当に中盤だったらいいんだけど」

先がわからないので実際のところは不明なのだが、それでもそう思いたい気持ちはみんな同じだった。そんな空気をケンゴのその一言が、一気にどんよりとさせた。

「さあ、気分を切り替えて今日も頑張りましょうじゃないか」

マサユキがパンパンと手を叩く。

「マサユキさん……」

ワタルがその場に蹲る。

「おいおい、そこまでなのか。ハルトの言うとおりでだぞ。体調管理はしっかりせんとな」

「無理して飲まなきゃいいのに」

ケンゴが冷ややかな目で見ると、

「そういうわけにはいかないんだよ」

男の意地なんだ……と言わんばかりだが、二日酔いの現状では格好良さは微塵もない。余計に惨めだ。

「男の意地なんて、くだらないものの代表よね」

アヤサがワタルの心をポッキリと折る。

「アヤサよ、それは言わんでやってくれないか。わしも男なんでな。ワタルの気持ちがわからなくはないんだ」

ワタルを擁護するつもりはないが、さすがに意中の相手に拒絶されるつらさはわかる。

「そう？ くだらないでしょ。男にとってはやっぱり格好いいとか思っちゃうものなの？」

「思ってもいいけど口にはしないでやってくれんか。その辺は大人としてな」

「……しょうがないわね。マサユキさんの顔を立てておきましょうか」

アヤサはわざとらしくニヤニヤする。

「でもね、ケンゴも言ってたけど、無理して飲まなきゃいいのに」

それは相手を案じての事ではないのがワタル以外の全員はわかったのだが、ワタルだけは違ったのだが……まあ、それはどうでもいいだろう。恋は盲目とはよく言ったものだ。自分に都合がよいように変換されるものだ。

「わかった。だがこれからも、できうる限り頑張るさ」

「ダメみたいね」

アヤサは完全に興味をなくす。

「可哀想だな。だが、若い……いや、今だけの特権だぞ」

若い者の……と言いかけて、それほど若いわけでもないのかと思ひ言い換える。

「さて、朝の戯れも終わったところで、今日の部屋に入りますよ」

ハルトは準備の確認を行う。

「ワタルはどうせ昼過ぎまではこの調子だろうしな。ハルト、やってくれ」

マサユキの言葉に続いて、ケンゴとアヤサが頷く。

「いきますよ。ロード！」

ハルトが叫ぶと、五人の姿がその場から消えた。

「くそっ、どうなってるんだ」

問題の石室の近くに到着したのだが、中に入る事ができず、部屋の前で悪戦苦闘している将軍の音が通路に響いていた。

「中に入れない？」

今まで侵入者が来ている時に石室に入ろうと思った事がないので、参謀はどういう事なのかと疑問符を浮かべる。それというのも、普段は問題なく出入りできるのだ。

「何故だ！ 何故近付けぬ！」

どうやら本当に入れられないようだ。

「将軍、落ち着いて下さい」

参謀が到着すると、将軍は石室の前で自慢の拳をガシガシと撃ちつけていた。しかしその拳は、石室の少し手前でなにかに阻まれている。

「どういう事でしょう」

その光景を参謀は冷静に観察していた。

まるで石室の前に見えない壁があるかのようだった。いや、本当にあるのだろう。

「どういう事でしょう。将軍だからなのか、ぼくもなのだろうか」

思案するよりも行動する方がいいのだろうが、魔王の言いつけで侵入者たちに直接関わる事ができず、どうすればいいものか考えあぐねていた。

「どういう事だ！ くそっ！」

将軍は拳を撃ち続ける。

「このままでは埒があかないな。力のほとんどを消耗するので使いたくはなかったのだがな」

そう言うと将軍は右拳を構え、一点に全ての力を集中する。

体力を使いきるのだが、中に入れられない事には意味がないと、使う事を決断した。

「将軍っ！」

参謀は独断で行動している将軍を止めるべく叫んだのだが、既にその声は届かなかった。それどころか、将軍が放つ力の波動で近づく事すらできない。

「魔王様、申し訳ございません」

ただ謝罪の言葉を吐き出すのが精一杯だった。

そんな参謀の存在に気付く事のない将軍は、自らの力をさらに収束させていく。

ビリビリと空気が震え、それだけでなく壁を震わせ、その衝撃は城全体に広がっていく。

それがマックスになった時、

「撃ち砕け！」

力を収束させた右拳を撃ちつける。

その衝撃が見えない壁を砕いた。と同時に、今までの比ではない衝撃が城中に広がり揺らす。

「うわっ」

と、参謀は立っている事ができず、壁に背を預けて座り込む。

「よし」

- - -

見えない壁を砕いた将軍は、そうして石室に入っていった。

将軍の乱入

「なんだ、この揺れは」

突然の大きな揺れに、マサユキは思わず尻餅をつく。

小さな熊のようなオーガとの戦闘中、唐突に大きな揺れが襲った。

「地震か？」

ケンゴが少しパニック気味になる。

その揺れは、確かに巨大地震そのものだった。もっとも、誰も実際の巨大地震を経験した事はないので、その本当の恐ろしさを知らず想像でしかない。

「なになに？ 地震？」

アヤサもパニックになる。

「みんな伏せて」

「莫迦かハルト。こんなところで意味ないだろ」

意外にもワタルが冷静に言う。

確かに落ちてくるようなものがないので伏せても意味がない。全体が崩れる事はあるかもだけど。そうなったら、どうしようと防ぐ事はできない。

「頭を防御。って、ワタルさん無敵じゃないですか」

ケンゴも慌てふためいているのは、やはり軽装備なのが大きく影響している。それに引き替え、ワタルは重装備なのでこの場合だけうらやましがられている。

「ちょっと、みんなの上になってカバーしなさいよ」

「それよりも落ち着け。もう収まっている」

マサユキが言うが、パニックは収まらない。

「余震があるかもしれないじゃないですか。二次災害も考えられますよ」

冷静なのかパニックなのか、ハルトが冷静っぽくパニックになっている。

「それよりも目の前のモンスターだろ」

マサユキが言うように、オーガは揺れを気にする様子は皆無で襲いかかってくる。しかし、パニックになってちょこまかと動いているのが幸いしてなのか、見事に攻撃を回避している。

「どうしたものだろうな」

唯一落ち着いているマサユキでは、オーガに効果的な攻撃ができない。このままでは防戦一方だ……なんて思っていると、石室の扉が開いていくのが目に入った。

「みんな、落ち着くんだ。あれを見ろ」

だが、パニックになっているみんなには聞こえていない。

「ええい！ 動くな！」

マサユキが今までにない、ありったけの大声で空気を震わす。

「「「「……………」」」」」

その声で、全員がピタッと止まった。

今まで聞いた事のない大声が見事に効果を発揮した。

それと同時に扉が開き、そこから筋骨隆々の男が現れた。

「お前たちが魔王様に楯突く者たちか」

低く響く声で確認するように言うと、相手の返事や反応を待つ事なく、一番近くにいたアヤサを思い切り殴りつける。

女性相手に手加減なく殴るなんて……とちょっとすれば性差別な事ではあるが、相手にとって性別なんか関係ない。敵である——それだけだった。

あまりにも速い移動に反応できるはずもなく、気が付いた時には壁に叩きつけられていた。

それはもう一瞬とっていい出来事だった。

「アヤサ！」

ワタルが真っ先に反応できた。

「ハルト、セーブだ」

マサユキが即座に指示を出す。このままでは全滅してしまう。瞬間的にそう感じた。

「……あ、ああ……………」

しかしハルトは、今起こった出来事に頭が真っ白になっていた。マサユキの言葉が届いているはずもない。

「ハルト、気をしっかりもて」

セーブ&ロード——そしてポーズなどのかけ声は、勇者という役目を割り当てられているハルトにしかできない。

「しっかりするんだ、ハルト」

こうしている間にも次の攻撃がきてしまう。マサユキは死を覚悟した。

困惑の将軍

「弱い。弱いな。脆すぎる。どうしてこのような者を……いや、だからこそか。相手にするまでもないという事なのか」

将軍は予想外に手応えがなさすぎて戸惑っていた。仮にも魔王城に乗り込んできているのだから、それなりの戦力はあるのが通常だ。現にいくつかの部屋を突破しているのだ。それなのに――

一言で言えば――雑魚。そう、ただの雑魚だ。もしくはそれにすら値しない。目の前のゴミくずにも等しい。

「なんだ、この弱さは」

見えない壁を砕くために力のほとんどを消費している。そのため、相手の体を砕く事はできなかった。本来の力が発揮できていれば、こんな脆弱な生き物など粉微塵にもできただろう。アヤサにしてみれば、そのお蔭で助かったようなものだ。だが、もちろんそれは本人たちはわかっていない。

「ハルト！ セーブするんだ！」

そんな声だけが聞こえる。

「拍子抜けもいいところだ。しかし、魔王様の憂いはなくしておいた方がいいだろうな」

力を使い果たして相手ができるか不安もあったが、もうそんなものは微塵もない。余裕だ。余裕すぎる。むしろ拍子抜けだ。物足りなさすぎる。

「セーブ」

小さいながらもそんな声が聞こえたかと思うと、全く動けなくなってしまった。

次の瞬間、目の前にいたはずの侵入者たちの姿が消えた。

(どうなっているのだ)

周囲を見ようにも視線すらどうにもできない。どうやらオーガも動けなくなっているのは気配でわかった。

身動きができないまま、ただ意識が消える事はなかった。それが余計にもどかしい。

(くそっ！ 動け！ 動かぬか！)

必死に体を動かそうとするが、どこも全く動かす事ができない。

(あの脆弱な連中にこのような事ができるのか)

この状態で攻撃などされれば、抵抗すらできないのだからひとたまりもない。しかし、動けなくなった瞬間、相手の姿が消えてしまった。それに関しては安堵できる。だからといって、この状況を受け入れられるかという事はない。

(動けっ！ 動くのだ！)

なんとしても動こうとするが、力ではどうにもできそうになかった。

将軍は気付く事はなかったが、呼吸すら不要になっている。ましてや、心臓の鼓動すら止まっているのだ。

完全に時が止まっている。

やがて将軍の類稀なる力で保たれていた意識も、時の停止には逆らえず消えていった。

「ワタル、車から応急キットを持ってくるんだ」

マサユキは茫然としているワタルに指示を出す。そうしてから、自分は携帯電話で救急車を呼ぶ。

骨折はほぼ確実だろう。これで打ち身だけだとしたら、それこそ奇跡だ。内臓など見えない場所にダメージを受けている場合もある。残念ながらここで診断する事はできない。

それでも、なんとか呼吸があるのは救いだ。弱々しくはあるものの呼吸はある。胸も上下している。

(まさに危機一髪だな。もつとも、危機は去ってないがな)

ハルトやケンゴはともかく、こういう現場に慣れているはずのワタルが使いものにならないのが大きな誤算だ。

魂が抜けているような状態でも、言われた事は自動的にこなす程度に訓練されているのは救いだ。ワタルはそのままアヤサの応急処置を始める。骨折していると思われる箇所には添え木を当て、血で汚れた顔を綺麗に拭いている。体が記憶しているのって重要。

それを見てマサユキはひとまず安堵する。とにかく、ここで出来るのはこれまでだ。あとは行政の力に頼るしかない。救急に電話をした後、市役所にも連絡を入れてある。そちらから色々と手配してくれているはずだ。

少しでも早く……と祈っていると、遠くからバリバリバリと空気を震わせる音が響いてきた。

まさか……と思い空を見上げると、そこにはヘリコプターの姿が。

確かに市街地から離れているこの場所へは、いくら救急車でも時間がかかりすぎてしまう。できればヘリが来ればいいとは思ったが、まさか本当に来るとは思わなかった。しかも、ただの搬送用のヘリコプターではない。ドクターヘリだ。

「こっちだ」

マサユキは発煙筒で合図を出す。

それを発見したヘリが着陸する。

救急隊員たちがてきぱきとアヤサをストレッチャーに乗せて収容する。

「ワタル、お前は一緒に乗るんだ」

マサユキに言われてもワタルは動けなかった。

「すまないが、こいつを付き添いとして一緒に乗せてやってくれんか」

救急隊員たちは怪訝な顔をする。確かにマサユキでも同じ反応をするだろう。明らかに邪魔だ。

「役立たずなのはわかってる。ここはワガママを受け入れてもらえんか。こいつの気持ちを酌んでやってくれ」

真剣なマサユキに言われ、しょうがないですね……と救急隊員はワタルをヘリに押し込む。

すぐにヘリは病院に向かって飛んでいった。

「さて、わしらも行くぞ」

ヘリを見送ると、マサユキは残されたハルトとケンゴを車に乗せようとする。動かない男二人

を乗せるのは骨だった。こういうのは本当ならワタルの仕事なのだが、どうせあの状態では意味がない。むしろ手間が増える。

マサユキはなんとか二人を車に押し込むと、業務で指定されている救急病院に向かって車を走らせた。

怒れる魔王

「どういう事だ」

低い恫喝に参謀は地面にひれ伏し、ただ謝罪の言葉を述べる事しかできなかった。

「申し訳ございません」

もう何度繰り返したかわからない言葉を繰り返す。

普段は穏やかな食卓が、今までにない重い空間になっていた。その場にいる全員が現状の把握につとめている。

「いや、お前を責めても仕方ないな。将軍にはきちんと説明すべきであった」

最初は頭が沸騰したものの、すぐにおさまっている。起こってしまった事は仕方がない。時を巻き戻す事などできるはずもなく、どうする事もできない。だからこそ、これからどうするのかを冷静に考えるしかない。

「いえ、それこそ城を任されております自分の役目でございます」

「いや、将軍にはワシが説明すると言った。参謀はそれを遵守したのであろう」

魔王は後手に回ってしまった事を悔やむ。

「畏れ多いお言葉でございます」

「その将軍はどうしたんだ？」

同席している宰相が訊く。もっとも叱責されるべき当人が不在だ。

「将軍は石室で動けずにおります」

「動けない？ どういう事だ？」

普段この時間はいない側近だが、事が事なので急遽仕事を休んだ。もっとも、それは全員が同じだった。魔王は急遽店を臨時休業にし、宰相と軍師も家の事情という事で早退させてもらっている。

「他のモンスターと同じです。侵入者たちがいなくなった時と同じく、部屋の中にいた将軍は動けないようです」

結局、参謀は部屋に入る事ができなかったのも、モニターで中の様子を見る事にした。すると、将軍が侵入者の一人を瀕死の状態にしてしまった。慌てて部屋に向かったが、やはり入る事ができない。

仕方なく戻ってモニターを見ると、既に侵入者たちの姿はなかった。そしてオーガはもちろん、将軍もピクリとも動かない状態だった。

そのため、どうなったのかは想像でしかない。

「やはりなにかあるんでしょうね」

軍師が今までの事を踏まえて考える。

原理は不明だが、部屋のモンスターが倒される事なく侵入者がいなくなった場合、残されたモンスターは消える事なく全く動けない状態になった。その影響は石室のみなので、城の中での生活に影響はなく、追求する事はなかった。

「それは今はどうでもいい。問題は、この世界の者を殺めてしまったかもしれないという事だ」

魔王は魔王らしからぬ事を口にする。しかし、それは本音だ。

この世界で生活するしかないでしょう、この世界に受け入れられる必要がある。そのために不要な争いはしない——それが基本方針だ。侵略など最も愚かしい事だと考えていた。

できれば詳しく調査したい参謀だが、全くその手段が思い浮かばない。将軍に直接話ができれば簡単なのだが、今はそれが一番難しい。

石室の様子は記録されていないので、確認する事もできない。

結局なにもする事ができない。

「将軍の処遇は保留とする」

魔王のその判断は、言葉だけを聞けば不問に処したと思われるが、石室に入れない事や本人が動けないため、どうする事もできないというのが現実だ。

そして、侵入者の身元がわからないため、様子を確認する事すらできない。

無事であればいいと願うしかできない。もっとも、ほとんど無力である今、なにもする事ができないのは同じだ。

ただ重苦しい空気だけが支配し、ゆっくりと時が流れていった。

危険な状態

日が暮れる頃になって、ようやくマサユキたちが病院に到着した。

直行したかったのだが、やはり市役所に顔を出して報告するべきだと判断した。

もちろん、アヤサの事が心配ではないという事ではない。急いだところでなにも出来ないのは明白だ。それならばと、待つ以外に出来る事をしておくべきだと考えた。

その結果がこの時間だ。

少しは動けるようになったハルトとケンゴを引き連れ、マサユキは処置室に向かった。

その前の廊下に設えられているロングチェアには、病院には全く似つかわしくない格好をした大きな男が項垂れて座っていた。

「ワタルさん」

「ワタル」

ハルトとケンゴがその姿を見て駆け寄る。

「あ、ああ……」

ワタルは顔を上げるだけで精一杯だった。

「ワタル……」

遠くからでもワタルの顔に生気がないのがわかる。この状況ならばしょうがないと、マサユキはそう思うしかなかった。どうしてやる事もできない。彼を元に戻すには、アヤサの無事という結果しかない。

様子はどうか？ ——そう訊きたいが、それも意味がないとわかった。室内の様子がわかるはずもないし、途中経過が報らされるはずもない。

「ワタルさん、アヤサさんはどうですか」

愚問でしかない——それでもハルトが訊いた。

「わからない」

消えそうな声でそう言って首を振る。その姿を見ているだけで痛々しい。

「どうしてこうなった」

一瞬、それが誰の声なのかわからなかった。誰も発していないのを確認して、ようやくワタルの声なのだとわかった。

「厳しい事を言うがな、お前はわかっていたはずだぞ。こうなる可能性をな」

マサユキはワタルの横に座り、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「このメンバーの中で、それを一番身近に感じる事ができるのは、ワタル——お前とアヤサだろう。違うか？」

「……………」

ワタルは黙ったまま動かない。

前職を考えれば、確かにマサユキの言うとおりに。もちろん、ワタルも今の仕事が安全であるとは思っていない。しかし、どこかで危険はないという気持ちがなかったといえは嘘になる。油断があったと指摘されればそれまでだ。

「マサユキさん、今はちょっと厳しいんじゃないですか」

言っているのか迷いながらもケンゴが言う。

「厳しい事を言うと言っただろ。こういう時こそ現実を受け入れるべきだ。それはわしらも同じだ。わしらとて、いつこういう事になるかわからんのだからな」

その言葉はケンゴとハルトに刺さった。どこかゲーム感覚で現実味がなかった。ロールプレイングゲームの中でバーチャルとして体験している気分になっていた。しかし今回の件で、これは現実だと突きつけられた。そのせいで、自然と言葉がなくなる。

結果、それ以降は誰も言葉を発しないまま、ただ時間だけが流れた。

日付が変わろうという頃、ようやく処置が終わった。しかし、アヤサの意識は戻っていない。集中治療室のままだ。

マサユキは、付き添いにはワタルを指名し、一旦帰って休もうと提案した。このままここにいてもしょうがない。それに、明日も仕事がある。

冷たいと思われようとも、マサユキはあえてそう判断した。ルーチンワークである事が、心の安定には最も必要だと考える。

ハルトは残ると言って聞かなかったが、それでもマサユキは羽交い締めにして連れて帰った。ワタルはどんよりとしたまま、ただ包帯で覆われたアヤサの姿を見ているしかできなかった。肉体的なダメージはなくとも、精神的にはアヤサと変わらないほど重症だった。

なんとか落ち着こう

結局、誰も一睡も出来ないまま朝を迎えた。

完全に気が抜けた状態で、なんとか出勤したマサユキたちだが、精神的な疲労などを加味され急遽、特別休暇が与えられた。それも一週間。もちろん有給。

「急に休みって言われてもな……」

ハルトはできるだけ元気に振る舞う。

「確かに。せっかくこうして出勤したのにな」

重い気持ちのまま、それこそ無理して出勤してきた結果がこれだ。普段通りの業務をこなせる自信はなかったのだから、ありがたいと思う。その反面、気を紛らわせる事ができない。

「せっかくだし、堪能させてもらおうじゃないか」

そう言うマサユキも、どこか空元気なのがわかる。

とりあえずまだ病院にいるワタルに連絡して解散する事になった。

「じゃあ、せっかくなんでボクは溜まってる番組でも見る事にします。お疲れさまでした」

そう言ってハルトは家に帰っていった。

「さて、わしらはどうするかな」

急に休みと言われても、仕事のつもりだったので予定があるはずがない。

「落ち込んでる時は、あの味が恋しいですね」

「ああ、そうだな」

ケンゴの提案した香りと味は、確かに心を安らかにしてくれる。

「だが、さすがにまだ開店してないだろう」

今になって初めて、営業時間を知らない事に気付いた。普段は夕方以降なので、開店時間を気にした事がなかった。そこまで長居しないので閉店時間も知らない。

いつ行きたくなっても迎えてくれる——そんな素敵なお店だった。

「とりあえず行ってみましょう」

ケンゴの提案で行ってみたものの、案の定まだ開店前だった。ドアの前には「準備中、のプレートがある。そこに開店時間が書かれている。

「どうしましょう？」

「開店まではまだ三時間はあるな」

マサユキは店の前のプレートと腕時計を交互に見る。

「じゃあ、どこか喫茶店で時間を潰しましょうか」

「おい、なにを言ってるのかわかってるか？」

マサユキは、やれやれと首を振る。

「なにかおかしいですか？」

どうやらケンゴは、自分が言っている事のなにかおかしいのか気付いていないようだ。

「素だよな」

マサユキは大きなため息を吐く。

「だがそうだな。どこか静かに過ごせる場所がいいな」

普段は仕事なのでわからなかったが、平日の朝はほとんどの飲食店はまだ閉まっている。それもあって人通りが少ない。朝が早いので人がいないのは当然すぎて、昼前までは同じなのだと思われたのは収穫だった。

普段よく知っている夕方以降とは全く別の光景の中、男二人が歩いているのは周囲にはどう見えているのだろうか。マサユキはそんな事を考えて気を紛らわせる。

「なかなか店がないですね」

「そうだな」

歩けど歩けど開いている店がない。唯一見つけたのは、チェーン展開している海外資本の喫茶店だ。そこにしようかと考えたが、今の気分だとそこでも賑やかに思えてしまうので却下した。

「あんな所に公園があるな」

行く手に小さな公園を見つけた。

「あそこのコンビニでなにか買うか」

「そうですね」

二人は結局、コンビニでプレミアムドリップホットコーヒーなるものを購入し、公園のベンチに腰掛けていた。

さすがに目当ての喫茶店には負けるが、なかなかのいい香りが二人を癒してくれる。

「コンビニコーヒーも侮れないな」

一口飲んだマサユキは驚きの声をあげる。

「確かにそうですね。コンビニでこんなクオリティのコーヒーがあるとは思っていませんでした」

最初は缶コーヒーを買うつもりだったが、レジカウンターの近くにこれを見つけたので、缶コーヒーよりはいいだろうと買ったのだ。それがどうだろう。かなりのクオリティに衝撃を受けていた。

「それはそれとして、僕たちって周囲にはどう見えてるんでしょうね」

ケンゴがポツリと呟く。

「言うな。言い訳するだけ虚しい」

「……マサユキさんもそう思いますよね」

「そうだな。……ただ、念のために確認しておくが、薔薇とか想像していないだろうな」

「なんですか、それ」

ケンゴが意味がわからないと訊き返す。

「いや、わからないならそれでいいんだ」

ケンゴは、気になりますよと言うが、マサユキは無言でコーヒーを啜るばかりだった。

「そのバラってのはわかりませんが、どう見ても僕たちって仕事をサボってるようにしか見えませんか」

「ああ、そういう事か」

マサユキが考えていた事とは違った。もちろん薔薇でもない。

「えっ？ マサユキさんはなんて思ってたんですか？」

「ちょっと切なくなるな」

「気になりますね」

「いや、わしは……いや、言葉にするとやはり切なくなる」

マサユキはブンブンと首を振る。

「いやいや、気になりますって。サボりじゃなかったらなんですか？」

「そんなの決まってるだろ」

「決まってるもなにも、わからないんですってば」

そうだったなど言い、マサユキは言葉にする事にした。

「リストラされたが家族に言えず、公園で時間をつぶしている無職に見えるんじゃないかと思っ
てな」

「……………切ないです。切なすぎです。っていうか、そんなの言わないで下さいよ」

「お前が言えと言ったんだろが」

理不尽な物言いだった。

「だから言いたくなかったんだ」

「いやいや、マサユキさんが思わせぶりに言うから悪いんですよ」

「それに関しては悪いと思うさ。だが言ってみて、改めて切なくなっちゃったよ。なにしろ、現実にな
りかねないわけだからな」

「……言霊って信じますか？」

「科学畑の人間に言われるとはな。わしはわりとスピリチュアルには寛大だぞ。なにしろ神様を
信じているんだからな」

「だったら言わないで下さい」

「……そうだな。すまん」

特別休暇扱いになっているが、アヤサの状況次第では、このまま今回の仕事は中止になってし
まうかもしれない。役所の職員が職務中に重体など、立場上最も避けたい事象だろうというのは
誰でもわかる。ただでさえ事なかれ主義なのだから。

「しかし、こうも天気がいいのが余計に虚しいな」

空を見上げると雲がほとんどない晴天だ。太陽の光がこれでもかと射している。ベンチのそば
には大きな木があり木陰になっているが、木漏れ日が二人を照らしている。

「スピリチュアルに考えるなら、ここはどしゃ降りがピッタリですよ」

二人して見上げるが、そんな気配は微塵もない。

安らげる場所

仕事が休みになったので、予定外に録画していた番組を消化する事ができるようになったのだが、いまいち集中できない。そもそも楽しくない。

「心が乾いている」

左手で胸を押さえながら右手を掲げる。

普段なら充実していて、時の流れが短く刹那のように感じるというのに、何故だか今は同じ長さのはずなのに長く悠久のように感じる。まるで拷問だ。

「この乾き、どうすれば潤されるのだろうか」

ハルトはテレビを消すと出掛ける事にした。

特に目的地があったわけではないが、気が付けばいつもの場所にいた。

平日の昼過ぎだというのに人があふれている。

この人たち、仕事はどうしたんだろう？ などと考えながらその店を見つめる。まるで不審者だ。なにしろ、店の中では、可愛い服を着た若い女の子たちが働いているのだ。うん、不審者決定。誰か通報しないのか。

しかし、この街では珍しい光景ではなかった。不審者天国というわけではない。

こういう店に慣れていなくて、入ろうかどうか悩む人がわりといるので、通行人も店員も日常になってしまっている。なんだかいけない慣れ。

しかし、彼にいたってはそうではない。だって常連なのだから。なので、むしろ店員さんたちが、どうしたんだろうと不思議そうに見ている。

「今日は珍しい時間にご帰宅ですね」

気になって一人が外に出て、ほわわんと癒しオーラ全開の素敵スマイルで訊く。

「あっ、みいわさん。こんにちは」

「こんにちはです。どうしたんですか？ おかえりされないんですか？」

こういう場所に慣れていなければ、いけない勧誘に聞こえなくもない。

「中に入りませんか？ 今ですね、ほとんど息をしてないですよ」

「そうですね。わかりました」

ハルトは誘われるまま店内に入った。

みいわの言うとおりの、時間が時間だけに店内に客はほとんどいない。ハルトの他には一人いるだけだ。スーツ姿でパソコンをカタカタ操作しているので、外回りの途中に寄っているような雰囲気だ。

昼間ってこういう感じなのかな……などと考える。夜とは客層が異なるのだろうか。

「おかえりなさいませ、円環の勇者さん」

みいわがお冷やおしぼりとメニューを持ってくる。

「今日の限定はですね、れぼさんが作ったクリーミーたらこスパです。ちなみに今日の限定ケーキはカスタードミルクです」

一応メニューの説明をする。

「今日もいつものでいいですか？」

「……………」

みいわがほんわか笑顔で訊くが、ハルトは無言でメニューとにらめっこ。しかし、ほとんど見ていなかった。

「それじゃ、決まったらベルを鳴らして下さいね」

みいわは素晴らしい笑顔を残してテーブルを離れていく。

(ここなら癒されるかもって思ったけど、どうしたんだろう)

最後の砦であるはずなのに効果が薄い。これは予想外。それでも落ち着くのは、慣れ親しんだ空間という事があるのだろう。

他に行くべき場所が思い浮かばない。職場と職場帰りのここ、そして自宅というルートが完全にできあがってしまっている。自分の行動範囲がとても狭い事を思い知らされる結果となってしまった。

「あらら、どうしたんですか。リストラされたみたいな雰囲気ですよ」

と、ニコニコしながら一人近付いてきた。丸顔がチャーミングで、とても明るく人気がある一人だ。

「みんなさん。そのジョークはちょっときついですね」

ハルトは今できる最高の笑顔で返すが、それでも暗いのがよくわかる。

「いやいや、円環の勇者さんにはちょうどいいくらいでしょ。で、なにがあったんですか？」

遠慮なしの直球だが、そこがまた人気がある。

「みんなさん、もうちょっと遠慮というか、デリカシーはないんですか」

みいわさんが苦笑いしながらテーブルにやってくる。

もう一人の客は一人でパソコンをパチパチしているので、さすがに話しかけづらいのだろう。それに、こうして落ち込んでいるのは珍しいので、なんとかしてあげたいという気持ちもあった。どうせ暇だし。

「でもまあ、話くらいなら聞きますよ。なにができるとも思えませんけど」

「みいわちゃんだって、わりときつついね」

「そうかなあ？」

「そこは力になりますくらい言うておくべきじゃないの？」

「言っても、きつとなにもできないし」

「そうだけど、そこは建前でしょ」

「それを言っちゃうのはな……………」

そんな話を聞いていると、なんとも微妙な気分になってくる。しかし、そのせいで落ち込んでいた気持ちが少しだけ楽になった……………ような気になる。

「二人とも、それを本人の前で言うのはなしでしょ。建前は心の中でしてくださいよ」

「いやいや、わざとですよ。だって、この方が円環の勇者さんって喜ぶでしょ」

直接的ではないがMだと言われて、ハルトはちょっと嬉しくなる。

「確かに……って、いやいや、違う違う」

「否定しても無駄ですよ。今すごく嬉しそうだったじゃないですか」

「ソナコトナイデスヨ、みんなさん」

「カタコトだ。カタコト」

大事なので繰り返された。

「それじゃ、聞きますよ」

みんなは完全に聞くつもり満々だ。みいわも遠慮気味にしているが、興味津々という笑顔だったりする。

「はあ……ちょっと重い話なんですけどね」

ハルトはそう前置きする。

「ところで、今日はゆきなさんはいないんですか？」

「円環の勇者さんも、ゆきなさん目当てですか。そうですね、役不足ですね。でも残念。ゆきなさんは今日は休みですよ。昨日、家庭の事情とかで早退したんですよ」

みんなが言うと、

「そういえば、ヤマトさんも同じ理由で早退しましたっけ」

みいわがニヤニヤしながら言う。

「……………な、なんですとお」

あまりの事に一瞬思考がフリーズして、その衝撃に面白リアクションをしてしまう。

「なんですか、それ。ゆきなさんとヤマトさんが。まさか結婚してるとか？」

「それはないでしょ。っていうか、円環の勇者さんのリアクションって面白いですよ」

みんながゲラゲラと笑う。

「みんなさん、笑いすぎですって。ゆきなさんにもヤマトさんにも事情があるだろうから、あまり言わない方がいいんじゃない？」

「大丈夫でしょ、今なら。さすがにもう言わないし。こんだけショック受けてたら、円環の勇者さんは言い触らさないだろうし」

ね？ と念押しされる。

元々そんなつもりはなかったが、ウインク付きで言われると断れる野郎がいるだろうか、いやいない。いるはずがない。いないっいたらいない。

「で、円環の勇者さんの悩みってなんですか？ さっきの事はノーカンね」

みんながニヤニヤしながら訊く。

「コンプライアンスがあるので言えない事もありますけど、仕事中に同僚が大怪我をしたんです」

「……あら大変」

みんなが軽い口調で言う。

「それって、円環の勇者さんの彼女さんですか？」

みいわが訊く。

「そういうんじゃないです。これはマジで」

ハルトが平然と答える。一切の動揺もない。

「つまんないですね。そういう色恋が絡んでないと、盛り上がりませんね」

「本当ですよ。でも、ただの同僚で、そんな風になるなんて、ただならぬ関係なんですか？ もしかして、彼女じゃなきゃ彼氏とか」

みいわはとんでもない事を口走る。

「それはないわ」

「なにになに？ 面白そうな事してるじゃない」

みんながドン引きするが、三人の会話を聞きつけたれぼがキッチンから出てきた。

「すっごく面白そうな話が聞こえたんだけど」

キラキラと目を輝かせている。

「あっ、円環の勇者さん、おかえりなさい」

一応ねと挨拶を付け加える。

「で、なにになに？ 素敵そうな会話でしたけど。BでLな話は大好きですよ」

れぼのグイグイ感に全員がドン引く。

「いやいや、そういう話じゃないから。その相手は女性ですし」

ハルトが説明する。

「なあんだ、違うんですか」

れぼは、相手が男でないとわかった途端、あからさまにガッカリする。

「れぼちゃん、自重自重」

みんなが注意する。

「すみません。大好きすぎて、ちょっと暴走しちゃいました」

てへりと可愛く舌を出す。

「で、なんでしたっけ？ なにに悩んでるんですか？」

みいわが話を戻そうと頑張る。

「同僚が大怪我をしまして……」

「そうでしたそうでした」

みいわはポンと手を叩く。

「大変な仕事なんですね」

「まあ、そうですね。楽しい仕事だと思ってたんですけどね……。でも、こういう危険性がある仕事だったんだって、あまり考えてなかったんですよ。わかってたはずなのに」

言葉を紡ぐ度、ハルトはずももんと落ち込んでいく。

「彼女さんでもないのに、そんなに心配するなんて、円環の勇者さんって優しいですよ」

みんながなんとか場の空気を変えようとするが、結果的に失敗だった。変わらないよね、そう簡単には。

「それじゃ、なにもできないですけど、みんなで祈りましょう。そうしましょう」

めげずにみんながリトライ。

しかし、効果はなかった。

「もういいもん。知らない」

みんなが挫けた。テーブルに、のの字を書き始める。

「あわわ。えっとですね、祈りましょう」

ハルトが指を組む。

「いいですよ、そんな無理しなくても」

完全にいじけモードのみんな。

「いえいえ、祈りましょう。是非、一緒に祈って下さい」

「……わかりました」

みんなが、すっと姿勢を正す。

「それじゃみんなで一—」

みいわとれぼに目配せする。しょうがないな……と言いながら、二人も指を組む。

「一—円環の勇者さんの同僚さんが元気になりますように。円環の勇者さんも元気になあれ」

みんなは、やってやったとドヤ顔で満足そうだ。

「ありがとうございます。きっと元気になると思います」

「円環の勇者さんも元気にならないとですよ」

みんなが満面の笑みで言う。

「ありがとうございます」

心がぼかぼかしてくる。

やっぱりここは最後の砦だったんだなと思った。さすが最高の癒し場所。

「で、注文はどうしますか？ 相談だけなんてなしですよ」

みいわが真顔で言う。

「あっ、忘れてました。元気になったので……限定をお願いします。大盛りで」

「かしこまりました。作ってきますね」

れぼがキッチンに戻っていく。

「さあ、もりもり食べましょう」

「みんなさんに言われると、本当に元気になりますね」

「でも、ゆきなさんの方がいいんですよね」

「みいわちゃん、今それはなんかきついわ」

みんなが凹む。

「そういえば、そっちの問題もありましたね。ちょっと気になります」

「じゃあ、そのままでいて下さい」

みいわがニコリと言う。

「みいわちゃんってSだね」

「みんなさんには負けますよ」

そんな和やかさで、ハルトは少し癒されつつあった。そして、なにかに目覚めそうになっていた。

月の音色が聞こえない

「すみません、今日は臨時休業させてもらうつもりなんです」

マサユキとケンゴが開店時間の少し前に行くと、ちょうどマスターが貼り紙をしているところだった。

「そうですか。そりゃ残念だ」

「本当にすみません。ちよつとのつびきならない事情がありまして……」

「そうですか。それならしょうがないですね。マサユキさん、どうします？」

「残念だが家に帰るか。他に用事もないしな」

ここで文句を言ってもしょうがない。きちんと受け入れるのが大人だ。そして事情は詮索しない。

「本当にすみません。しばらく休む事になりそうですので、営業を再開した時にはまたお願いします」

それを聞いて二人は驚かずにはいられなかった。

「しばらく休むって、今日だけじゃないんですか」

思わずケンゴが大きな声で訊く。

「ええ。ちよつと問題がありまして、どのくらいかかるかちよつとわからないんです。すぐに解決するといいんですけどね」

マスターが深刻そうに言う。

「しょうがないですな。できるだけ早い再開を期待しています」

それでは今日はこれで――とマサユキは背を向ける。

「本当にすみません」

マスターは深々と頭を下げる。

喫茶店 `月の音色、が臨時休業という事で、完全にする事がなくなってしまった。

二人は仕方なく公園に戻ってきて、ベンチに並んで座っていた。

「残念だったな」

マサユキがケンゴの肩にポンと手を置く。

「そうですね。このまま帰ったら、僕はどうかになるかもしれません」

俯きながらそんな事を言う。

普段なら大袈裟だろうと言えるのだが、さすがに今はマサユキも同じ気分だった。

アヤサの事を忘れるためというわけではないが、ずっと考えていられるほど人間の心は強くない。少しでも別の事をしないと、潰されてしまう。

「だからこそ、ワタルは厳しいだろうな」

「そうですね。僕らよりも……でしょうね」

病院でずっと付き添っているワタルは、他の事を考えるのは不可能だろう。それは他の場所においても変わらない。

どんな心境かは想像するしかない。

「そうですね。僕なんかとは比べものにもならないですよね」

「だからって、わしらがなんにも感じないわけでもないんだがな。だからこそ難しいな」

今考えられる癒しの場所を失った二人は、どうする事もできず、なにも考えられなかった。

重苦しい空気

電子音だけが聞こえる。それだけならまだいい。

この重苦しい空気は、さらに気持ちを重くしていく。

他にも患者が処置されているので、パタパタと職員たちが慌ただしそうにしている。その音がむしろ平静を保たせてくれている。

(病院ってのは、もうちょっと薬品臭いかと思ってたんだけどな)

意外なほどに臭いはない。

他に誰も来ないという事が少しだけ不思議に思ったが、アヤサのプライベートをほとんど知らないと感じさせられただけだ。そもそも、そんな深い話をした事がない。

(あれだけ居酒屋で色々話していたのにな)

薄い会話だったんだな……と苦笑する。

(そんな程度の自分しかこの場にはいないんだな)

同僚に関しては、気を利かせてくれたのはわかっている。しかし、やはり彼女の家族が来ないのは違和感があった。

マサユキたちが連絡先を知っているとは思えない。しかし役所の担当からは、そういう連絡があつてしかるべきだろう。

(そんな事をオレが考えたところで、どうにもできないけどな)

気を紛らわせる事すらできないのが悲しかった。

それぞれがなにもできないまま、ただ時間だけが過ぎていき――

――一週間が経った。

状況はなにも変わっていない。

アヤサの容態は、快方に向かうわけでもなく、かといって悪化する事もなかった。それはまだ不幸中の幸いかもしれない。

ワタルはその間、ずっと病院にいた。

ハルトたちがお見舞いに行った時に、一度帰ってはどうかと提案したが、ワタルは無言で首を振るばかりだった。

さすがに衛生的にどうかという事で、マサユキが無理矢理帰らせた。それ以降、入浴や着替えのためだけに帰宅する事を除けば、ずっとアヤサの傍にいた。

ろくに食事も摂っていないので、日に日にげっそりとしてきている。

付き添いダイエットですか、などとハルトが茶化したが、重い空気の中では不発だった。ケンゴは不謹慎だと責めたが、わざとそうしたのだとわかっていたマサユキに窘められる場面があった。

なにもできない1週間 魔王サイド

魔王城サイドでは、状況が全くわからないという事で、ヤキモキとした日々を過ごしていた。

側近はあまり仕事を休むわけにはいかないと、すぐに仕事を再開していた。

ただ三日目からは、こうしていてもしょうがないと、軍師と宰相も仕事を再開した。

そして五日目、参謀の提案もあり、魔王も久しぶりに店を開ける事にした。魔王は事態が解決するまではと思っていたのだが、店を開ける事でなにかしらの情報が得られるかもしれないと、参謀が提案したのだ。

しかし、現実はそううまくいくものではない。特に情報がないまま時間だけが流れた。

新メンバー配属でハイテンション

そんな一週間で過ぎて、久しぶりに出勤したハルトは、まだ重い気持ちのまま、仕事着に着替えていた。

今までは着替えるとテンションが上がっていたが、さすがに今はローテンションのままだ。

「お久しぶりです」

ハルトは着替えながら、出勤してきたマサユキに挨拶をする。

「ああ、久しぶりだな。一週間なんぞ短いと思ったが、意外と長かったな」

そう言いながら、マサユキも着替え始める。

「そうですね。でも、終わってみればあつという間だった気がします」

「そうだな」

「おはようございます」

そこへケンゴも出勤してきた。

「おはようございます」

「おはよう」

ハルトとマサユキが返事をする。

「じゃあ、ボクは先に行ってます」

着替え終えたハルトは、先に駐車場に向かった。

「わしも行くか」

「僕もすぐ行きます」

「急がんでもいいぞ」

「……マサユキさん、今日はワタルさんは休みですよ」

ハルトはふにふにと柔らかそうな二つのマウンテナメでマサユキを見る。

「そうだな。さすがに今日は休むだろうな」

マサユキは近くの花壇の縁に座り、張りのある素敵なピッチピチの膨らみナメでハルトを見る。

「ですよ。アヤサさんはまだあんな状態ですし」

ハルトは二つのマウンテンをナメで目の前のマサユキに言う。

「ただ、なにも連絡がないからな。もしかすると、仇を討つとか言って、出勤してくるかもしれんがな」

そういう覇気くらいあるだろうと、ピッチピチの膨らみナメでハルトに言う。

二人はとある違和感をあえてスルーしながら、わりとどうでもいい会話をしていた。

「お待たせしました。……………って、へっ？」

着替え終えたケンゴが、その光景を見て固まる。そして、とある場所に目が釘付けになる。

「さて、揃ったようだし、そろそろ出発するか」

「そうですね。行きましょうか」

しかしハルトとマサユキは、そんなケンゴすらもスルーする。見事な連携だった。

「……ちょ、ちょっと。この状況を説明して下さいよ。どうなってるんですか」

ケンゴが慌てふためく。それこそコントのようだ。

「どうかしたのか？ 置いていくぞ」

「行きますよ、ケンゴさん」

それでもまだスルースキルを全開で発揮する。

「いやいや、どうしてそんなに普通なんですか。これは明らかに気になるでしょ」

と、ケンゴが素敵な二つのマウンテンを指す。完全なセクハラだが、当人が訴えない限りセーフだ。

「おはようございます」

二つのマウンテンの持ち主が、癒しオーラ全開の素敵な笑みで挨拶をする。ぺこりとお辞儀をすると、鮮やかなピンク色の装甲に覆われた二つのマウンテンの間のバレーが強調され、自然と視線が強制ロックオンされてしまう。男ってどうしようもないね。だが、これは女性だろうと、つい見てしまうだろうものだ。

「ケンゴよ、少しは空気をだな……」

「そういう問題じゃないでしょ。ってというか、スルーの方が問題ありじゃないですか」

「挨拶が遅れました。本日付けで配属されましたミネカと申します」

ミネカと名乗った美少女が、再びお辞儀をする。ふわりと艶のある長い髪が胸にかかる。

「あ、ああ。やはり気のせいじゃなかったんだな。すまん。わしはマサユキだ。よろしく。で、こっちが――」

「ハルトと言います。一応、勇者ポジションです」

ハルトが頬を赤らめながら挨拶をする。

「でもって、こいつが――」

マサユキはケンゴを指す。

「えっと……」

「ケンゴだ。他にワタルというのがいるんだがな。今日は諸事情で休んでいる」

戸惑うケンゴをスルーして、マサユキが話を進める。

「マサユキさん、オレは休みじゃないですよ」

ガシャガシャと重い音を響かせながら、ワタルがやってきた。

「ワタルさん、いいんですか」

「大丈夫だ、ハルト。あのままだ、オレにはなにもできないからな。むしろ、アヤサの仇を討つのが、オレの役目だろう」

マサユキとハルトの予想的中。

「だが、目が覚めた時に誰もいないのは淋しいと思うぞ。誰かがいてやった方がいいだろう」

マサユキが指摘する。

「……はっ！ そういえばそうだ。全然思いつかなかった。しくった。このまま帰ろうか……」

頭を抱えて困惑しながら、ワタルはようやく目の前に知らない美少女がいる事に気付いた。

「……………」

ワタルは目をこする。

「……幻覚なのか？ オレの目の前に、すっげえ可愛くてエロ……いや、セクシーな女性がいるんだが」

ワタルが誰ともなしに訊く。

「おはようございます。初めまして。ミネカと言います」

ミネカがワタルの方を向いて挨拶する。

「……オレはどうかしちまったのか。アヤサの事で頭がおかしくなったのか？ アヤサと会話していないだけで、こんなに欲求不満になっているのか」

「ワタル。残念なのかどうなのか、幻覚じゃなくて現実だ」

「う、嘘だ……。っていうか、どうなってるんだ？」

ワタルが困惑するのも当然だ。そもそも、まだ誰もこの状況を完全に理解できていない。

ただ、彼女がアヤサの交代要員である事は理解できた。

それはわかっているのだが、問題は彼女の姿だ。可愛いのはいいとしよう。それだけで喜べるのが男という生き物だから。

そんな男どものリビドーを刺激しまくる彼女の仕事着が問題なのだ。

とにかく面積が狭い。

防具である事はわかる。しかし、その面積が狭い。イコール肌色の面積が広いのだ。

ピンク色の防具が覆っているのは、額と手の甲から肘にかけての部分、足から臍にかけての部分。でもって肩。まあ、ここまではそれほど問題でもない。ワタルのように全身に防具をまとるのは、動きを制限されてしまうので身軽な方がいいだろう。

しかし、それも限度があるだろう。

その部分以外だが――あとは胸と腰回りだけなのだ。

それはまるでセパレートタイプの水着のようだった。いわゆるビキニアーマーだった。

そういう防具に加えて、そもそものプロポーションが抜群なのだ。出ているといい感じの場所はほどよく出ており、引き締まっているといい感じの部分は、キュッと引き締まっている。というか、腹筋が割れている。かといって、マッチョという感じではない。ボディービルなどで鍛えた感じではないように見える。

「あの……あまりジロジロ見ないでいただけますか」

ミネカはもじもじとしながら、手で体を隠そうとする。しかし、その行動がさらにリビドーを刺激する。

「マサユキさん、オレは不義理だろうか」

「……ワタル、言いたい事はなんとなくわかった。男ならしょうがないさ」

妙に悟った事を言うマサユキだが、内心ではデレツデレになっている。ポジション的にそれを表に出せないのが、必死に隠そうとしている……のだが、自然と口元がゆるんでしまう。

「自分は草食系だと思ってましたが、僕は今、初恋をしているみたいです」

ケンゴもどうかしてしまっている。

「みなさん、しっかりして下さい。キリッとしないと」

ビシツとしているハルトだが、いつもとは明らかに雰囲気が違う。どこかわざとらしい。妙に

張り切っている。

「ハルトも男だったか」

マサユキがどこか嬉しそうに呟く。

「みなさん、行きましょう」

ドヤ顔でハルトが言い切る。

男性陣全員のテンションを上げるというチャームの威力は、げに恐ろしや。

初めての魔王城の前に

ナイスドライブでいつもの場所に到着。

「これが魔王城ですか。こうして間近で見るとは初めてです」

ミネカが目の上に手を当てながら見上げる。

男性陣はその姿に見とれてしまっている。確かにすっとした姿は、絵画のようで美しい。しかもビキニアーマーというセクシーさ。これを見ないなんてどうかしている。

「ここがオレたちの職場であり戦場だ。危険もあるが、オレがしっかり守ってみせる」

ワタルがビシッと決める。

「そうですね。あたしは防御面では弱いので、頼りにしています。その代わりに、攻撃は積極的に行っていきたいと思います」

ミネカはシュツシュとシャドーボクシングをする。そのキレは見事で、美しさと相まって芸術のようだった。

「なかなかやるね。そういう経験が？」

ワタルが少し驚きながら訊く。このままでは自分の出番がないかもしれないし、そもそも自分では役不足かもしれない。

「前の職場で鍛えていましたから」

それより——と、ワタルたちが詳しく訊こうとする前に、ミネカが話し始める。

「あたしはまだ初めてですので、状況がまだ把握しきれていないので、今日はできたら現場の様子を感じたいのですが……」

ワガママで仕事の進捗を邪魔してすみません、と謝る。

「そうだな。このメンバーでどの程度できるかわからないからな。ハルトよ、今日はセーブを積極的にした方がいいだろうな。少しでも危なくなったら、とにかくセーブして戻る事にしよう」

「そうですね。わかりました。このメンバーでのバトルに慣れないといけませんし」

ハルトも初めてという事で考慮する事にする。

「ありがとうございます。できるだけ迷惑をかけないように頑張ります」

ミネカが笑顔で言えば、男連中は頷くしかできない。

「ミネカちゃんも無理しないようにな」

ワタルがオレを頼れとばかりに言う。

「はい。ですが、多少の無茶は必要だと思っています。その覚悟はあります」

妙に覚悟があるのが気になったが、個人的な事を無理に聞き出す事もないと、マサユキはスルーする。

「それじゃ、行きますか」

それぞれ装備を整えたのを確認したハルトが言う。

「やってやるさ。アヤサのためにもな」

「ワタルよ。気になる女性の前で、他の女性の事を話題にするのはNGだからな」

「そ、そんな事ないですよ。オレはアヤサ一筋……いやいや、そういう話じゃなくて……」

マサユキの言葉にテンパる姿が、一行の緊張を和らげる。

「それじゃ行きますよ。ロード！」

ハルトの声をきっかけに、一行の姿が消えた。

リベンジマッチ

消えた一行の姿は、魔王城の中にあった。あの石室だ。否応なしにアヤサの事が思い出され、足が震えてしまう。

それを思い起こさせるものとして、そこにいる相手も大きく影響している。

その相手は一行が到着したと同時に再び動き出した。

再び動けるようになった将軍は、戦意を失いつつあった。

オーガは決められているかのように襲ってくる。しかし、その後ろで圧倒的な存在感を放つ将軍は、腕を組んで見ているだけだ。将軍はハルトたち勇者一行を、敵に値しないと判断していただけなのだが、それがミネカには違和感でしかなかった。

「オレに任せろ」

ワタルがオーガに突っ込んでいく。

「あたしは、もう一人の敵を」

ワタルならば援護は必要ないと判断し、ミネカは将軍に向かっていく。

「待て！」

マサユキが止めようとするが、ミネカは既に飛び出していた。

(ん？ さっきはいなかったヤツだな)

時間が経っている事を知らない将軍は、見逃していたのかと考えるが、向かってくるからには相手くらいはする。

ミネカは全体重を右拳にのせる。

うわあああつ！ と叫びながら、全力で殴りかかる。

しかし、その拳は将軍に掴まれてしまう。

「くっ」

「弱い。弱いな」

本来の力が使えれば一瞬だが、この程度ならば今の力だけでも問題なさそうだ。だからこそ物足りなさを感じ、それが手加減となっている。

「くそっ」

ミネカは体をひねって、離れて距離をとる。

「さすがに強いわね」

決して見くびっていたわけではない。強いと予想していた。それでも、その予想以上だった。

「ミネカさん、離れて！」

ミネカを助けようと、ハルトが剣を構えて突っ込んでくる。

「散れ、雑魚が」

将軍は腕を横に振り、ハルトとミネカを吹き飛ばす。

二人はそのまま石室の壁に打ちつけられる。

「ハルト、ミネカ、大丈夫か」

マサユキが駆け寄る。

「……すみません、なんとか大丈夫です」

ミネカは膝に手をつきながら立ち上がる。頼りなさそうな防具だが、しっかりと防御姿勢をとり、受け身もバッチリだったので、見た目よりはダメージがない。

それに引き替えハルトは、なんとか頭を守る事はできたが、背中を強く打ちつけてしまっていた。

「ケンゴ、そっちはなんとか頼む」

「了解……って、僕に相手できるわけじゃないですよ」

「それでもなんとかしてくれ」

キョドるケンゴにズバツと言う。

「ハルト、大丈夫か」

「……ちょっと厳しいかもです」

「マサユキさん、一度撤退しましょう。この装備では難しいです」

「そうだな」

マサユキは将軍を見るが、特に攻撃してくる様子はない。

ワタルはどうなっているのか見ると、ワタルはアヤサの仇とばかりに意気込んでいたので、オーガを追いつめていた。

「まずはお前からだ！」

ワタルはトドメとばかりに、剣を頭上に振り上げて、勢いよく振り下ろす。

オーガは大ダメージを受け、うめき声とともに姿を消した。

それと同時に、ゴゴゴツと石室の扉が開いた。

本来ならばここで攻略で、次の部屋に向かえるのだが、その扉の前には将軍が待ちかまえている。

「オーガを倒したか。その程度にはできるようだな。雑魚とはいえ、魔王様を悩ませるお前たちをこのままにしておくわけにはいかないな」

将軍は残された力を全て拳に集中させる。将軍からすれば微々たるものだが、雑魚と判断した連中を倒すくらいはできる。

「ハルト、撤退するぞ」

マサユキが指示する。

「ですが、せつかく……」

「きちんと状況を把握するんだ。ワタル、お前ならどうする」

マサユキはあえてワタルに訊いた。少しでも冷静に判断できるのか確認したかった。

「……このまま、あいつを倒したいですね」

やっぱりダメか……と、予想通りすぎて呆れてしまう。

「ハルト、撤退するんだ！」

「でも……」

「ここは一時撤退です」

まだ迷っているハルトにミネカが言う。思わぬ発言に、全員がミネカを見る。

「すみません。出すぎた真似かもしれませんが、ここは撤退が正しいと思います。このままでは

、全滅してしまいます」

「そんな話をしている暇はなさそうなんだけど」

ケンゴがハラハラしながら言う。将軍は力を込め終え、一行に向けて力を放とうとしているところだった。

「ハルト！」

マサユキが叫ぶ。

「セーブ！」

ハルトは慌てて叫んだ。

将軍の力が放たれた瞬間、石室の時間が止まった。

反省会と作戦会議（歓迎会）

「間一髪だったな」

マサユキは冷や汗が止まらない。ダラダラと流れている。一瞬でも遅ければ全滅していたかもしれない。

日常にスリルを求めるにしても、ここまで命懸けのスリルは必要ない。

「本当です。現場って大変ですね」

ミネカは腰が抜けて座り込む。

「どうして終わらせたんだ。今の勢いなら——」

「頭を冷やして下さい！ 状況を把握できないと、無駄死にするだけです」

ミネカが真剣な目でワタルを見る。思わぬ事にワタルは言葉をのむ。

「新参加者が口を出すな」

「ワタル！」

あまりな言葉にマサユキが咎める。

「せっかくアヤサの仇を討てるところだったんだ。オレには今までの経験がある。それを、今日から参加した女が口を出すべきじゃないだろう」

セクハラやパワハラになりかねないが、ミネカはワタルの心境を斟酌し、そういう気持ちはスルーする。

「そうですね。確かに新参加者のあたしの言葉は薄っぺらいです。みなさんにはそれなりの経験があります。ですが、あの判断が間違っているとは思いません」

ミネカは一步も退かない。

「無謀と無茶は命を落とします。常に冷静たれ。あたしが常に心に留めている言葉です」

ミネカの声が柔らかくなる。

「さて、今日は反省会が必要だな。それに、彼女の歓迎会もしないとな」

マサユキがこの空気を払拭しようとする。

「そうですね。歓迎会は必要ですよ」

ケンゴが賛同する。

「悪いがそんな気分じゃない。オレは病院に行かなきゃいけないんだ」

「これは強制参加だ。欠席は認めない。ミネカさん、あんたも当然出席してもらおうからな」

「歓迎会なんて……辞退させていただきます」

「今、強制参加だと言ったはずだ」

「パワハラですよ。こんな理不尽な職務命令には従えません。そもそも、先輩ではありますが階級は同じです。命令に従う必要はないと考えます」

ミネカは淡々と言う。

「反省会と作戦会議を行う——それならどうだ？ 腹が減ったから、なにか食べる事ができる店で行う。それでいいか？」

マサユキは動じない。冷静に返した。

「……わかりました」

この先の事を話し合うのならと、渋々でも頷くしかない。

「ワタルもいいな。アヤサの本当の仇を討つための作戦会議だ」

マサユキに目で促され、ワタルは無言で頷いた。

「そういうわけだ。……って、ハルトはなにをしてるんだ。お前まで落ち込んでどうするんだ」

これで大丈夫と思ったが、ハルトはしゃがみこんで、地面にのの字を書いていた。

「どうしたんだ、お前は」

「ボクのせいでみんなが……。ボクがもっとわかっていれば……」

それを聞いてマサユキは、あーっと頭をかく。

「とにかくこうして無事なんだ。とにかく反省会で好きなだけ反省しろ」

面倒なヤツだ、とため息を吐く。

「マサユキさん、お店はどうします？ さすがに、`月の音色、だと迷惑になりそうですね」

「確かにそうだな。これだけの人数で喫茶店は、どうも違う気がするな。かといって、この前のメイドカフェも却下だぞ」

「ですよね。だとしたら……」

「適当に店を探すか。この時期なら宴会はないだろうし、予約も必要ないだろう」

夏前の今の時期なら、歓送迎会の類はないだろう。さらに時間も早いので、席が空いているはずだ。

「そうだ。ワタルがいつも行ってる店にしましょうよ」

ケンゴがナイスアイデアだとばかりに言う。

「それはな……」

マサユキは、アヤサとの思い出がある場所はどうかと思ったのだが、ワタルがそこにしましょう、と言ったので、そこに決定した。

居酒屋で距離を縮めよう

一度役所に戻り、今日の業務報告をすませると、ワタルの案内でいつもの居酒屋に向かう。

渋々だったワタルとミネカも、諦めたというよりはむしろ乗り気になっている。

さすがにまだ夕方前なので、店の近くに来てはまだ開店前の店もちらほらある。

普段、こういう場所に足を運ばないハルトは、興味深そうに周囲を見ていた。それはミネカも同じで、興味津々という感じだった。

「到着です」

まずワタルがミネカと一緒に店内に入る。ハルトたちはその後ろに続いた。

「いらっしゃいませ」

まだ宵前なので店の中は閑散としているのだが、威勢のいい声に迎えられると、その雰囲気だけで酔いのテンションになる。

「あら？ 今日とは別のお相手ですか。やりますねえ」

と、馴染みの店員が、ワタルとミネカを見て、ワタルにこっそりと言う。

「いやいや、今日は職場のみんなと一緒になんで」

一応否定はするものの、カップルに間違われて満更ではないようで、ワタルの口元はゆるみまくっている。

店員も連れのハルトたちを確認する。

「あら、本当だ。いらっしゃいませ。奥のお座敷にどうぞ」

店員に案内されて五人は座敷に向かう。

「ご注文はなににいたしますか？」

お通しの小鉢をそれぞれの前に置く。お箸とお皿はまとめてテーブルにセットされているので、ケンゴがそれぞれに配っていく。

「そうだな……オレは生かな。他に生は？」

「わしも最初はそれでいいか」

「僕もそれで」

マサユキとケンゴが答える。

「えっと、ボクは……レモンサワーで」

「おいおい、ここでそんなのかよ」

ワタルがハルトの注文に難癖をつける。

「いいじゃないですか、別に」

「ワタルよ、飲みハラになるぞ」

「今はなんでもかんでも、なんとかハラって面倒だよな。昔はもっとぎっくりしてたのに」

と、飲んでもいなくちから既に酔っているかのようだ。

「あたしは、カシスオレンジをお願いします」

ミネカが遠慮がちに言う。

「なんだか可愛いよな。女の子って感じの注文だよな」

「ワタル、それはセクハラじゃないか」

「マサユキさん、勘弁して下さいよ。なんでもかんでもそれは厳しいでしょ」

「それを判断するのは彼女だがな」

マサユキがミネカを見ると、彼女は別に大丈夫ですよ、と首を振る。

「よかった……」

ワタルはホッと胸をなで下ろす。

「お前はほとんどの発言がハラスメント傾向だからな」

マサユキは、やれやれとため息を吐く。

「さて、なにを頼もうかな……」

ケンゴは二人のやりとりをスルーして、メニューとにらめっこしている。

「刺身の盛り合わせと、焼き鳥の盛り合わせ。それと唐揚げを二人前。出汁巻きも二人前。それと、キュウリと茄子の一本漬け。あとは……」

と、さくさくと注文するワタルがミネカを見る。

「えっと……サラダはありますか？」

「色々あるぞ。どれにする？」

ワタルはメニューの該当個所をミネカに見せる。

「そうですね。シーザーサラダをお願いします」

ミネカは遠慮がちに注文する。

「わしはそうだな……あのオススメってのを一つもらおうか」

と、マサユキが壁に掛けられた黒板を指す。

「フルーツトマトと土佐はちきん地鶏の炒め物ですね」

店員が確認する。

「それを一つな」

「なんですか、それ。美味しそうじゃないですか」

ハルトがパラパラとメニューを見るが、レギュラーメニューではなく仕入れによって変動するメニューなので、そんな料理は載っていない。そのため、写真がないのでどういうものかわからない。ただ、美味しそうなの事だけがわかる。

「とりあえず一つ注文して、分ければいーだろう。もう一度注文しちやいけないうて事はないんだぞ」

「……そうですね」

「とりあえずそんなもんかな？」

「あ、僕はホッケをお願いします」

ケンゴが追加する。

「じゃあ、とりあえずそれで」

「かしこまりました」

店員が厨房に注文を伝えに行く。

そして、すぐにそれぞれの飲み物を持って戻ってくる。

「早いな」

マサユキが感心する。

「彼は仕事が速いんですよ。他の人も遅いわけじゃないですけど、彼が一番ですよ」

ワタルが妙に褒めるので、店員はいやいやと言いながら照れる。

「いやいや、自分なんかまだまだですよ。他にすごいのがいますから」

「他にいたか？」

ワタルは知る限りの店員の顔を思い浮かべるが、該当しそうな人がいない。

「この店じゃなくて、家なんですけどね」

「なるほど。家族か」

「まあ、そんなとこですね」

「もしかして、恋人とか？」

店員が言葉を微妙に濁したので、ワタルがさらに突っ込んだ質問をする。

「いやいや、そんなんじゃないですよ。だいたい、そいつは男ですから」

「本当か？」

「本当ですって」

「そろそろ乾杯しないか」

まだ乾杯すらしていないのに、既に店員に絡むワタルをマサユキが止める。冷えている飲み物も、ぬるくなってしまう。

「そうですね。乾杯しましょう、乾杯」

ハルトが盛り上げようとする。ちょっと騒ぎすぎな感があるが、まだ他に客がいないので誰も咎めない。

「じゃあ、ミネカちゃんを歓迎しまして、乾杯！」

前置きもなにもなく、ワタルが声をかけるので、みんな慌ててジョッキをあわせる。

ところどころでジョッキがぶつかる音がする。

ワタルは一気に飲み干して、お代わりを注文する。アヤサと飲んでいるせいで、ペースが速くなってしまっている。

が、店員はいつもの事なので、既にスタンバイしていたりする。妙な阿吽の呼吸。

「すみません」

ワタルはアヤサの代わりとばかりに、グビグビとジョッキを空にしていく。

「ワタル、ペースを考えろ。自棄飲みはやめておけ」

「いえ、大丈夫ですよ。オレは毎日で鍛えられてますから」

そう言いながら次を注文する。

お代わりと一緒に、キュウリと茄子の一本漬けが運ばれてくる。

それを肴に、ワタルはグビグビとビールを飲みまくる。

この飲み方には、さすがに全員が心配になってくる。

「本当にやめておいた方がいいぞ。ほら、楽しく談笑しながらだな……」

「やめて下さいよ。いいじゃないですか、好きに飲ませて下さいよ」

飲む前から酔っていたかのようなようだったが、ジョッキを空けていく事で完全に酔いが回ってきているようだ。

「お待たせしました。どうぞ」

店員がシーザーサラダをミネカの前に、出汁巻きをワタルの前に置く。そして、テーブルの真ん中に刺身の盛り合わせを置いた。

「ほら、少しはなにか食べないとな。ほら、出汁巻きを食べろ」

「あと、これはいつもご糞にしてもらってるサービスです」

と、蜆の味噌汁をワタルの前にだけ置く。

「すみません」

マサユキが代わりに礼を言う。

「ほら、せっかくだしそれも飲め」

ワタルは言われるままそれを飲むが、すぐにビールを飲むので、果たして効果はどれほどのものか。それでも多少はマシだろう。

「まあ、好きに飲めばいいさ」

いくら言っても無理そうなので、マサユキは完全に諦めた。

「こっちは楽しく飲もうか」

ワタルを好きにさせつつ、シーザーサラダと出汁巻きをつまみながらジョッキを傾ける。

「それにしても、なかなかすごかったじゃないか」

マサユキがミネカの動きを褒める。

「そうそう。本当にすごかったですよ。まさか、あんな積極的に攻めるなんて思わなかった」
ケンゴも思い出して賞賛する。

「アヤさんにも負けない感じでしたよね。やっぱり、なにか格闘技をしていたんですか？」

ハルトが若干興奮しながら訊く。

「まあ、本格的にはしていませんでしたが、少しは……」

ミネカが言葉を濁す。

「まあ、無理して話さなくてもいいんだぞ。わしらとて、過去の職歴は色々あるからな」

「別に守秘義務にふれない事なら大丈夫なんですけど……」

そう言うが、守秘義務という言葉自体が穏やかではない。

「軽く自己紹介がてら、わしらの事を話しておこうか。別にたいしたものじゃないがな」

マサユキがそう前置きして話し始める。

「わしは元NASDAQ職員でな、神職の資格もある」

「僕は今まで理研で働いていました。それがどうしてだか、ここに引き抜かれたんですよ……」

ケンゴが照れながら、それを誤魔化すように出汁巻きを食べる。

「なかなか不思議な感じですね」

現在の仕事とあまり関係性を見いだせず、ミネカは戸惑ってしまう。彼らの職歴を考えれば、自分の方が関係性が高いんだな……と一人頷く。

「ちなみに、飲んだくれているワタルさんは、元機動隊員らしいですよ」

ハルトが勝手に説明する。

「そうなんですか」

「それと、今入院中のアヤサさんは、元自衛隊員らしいですよ」

そうしてアヤサの話をしていると、ワタルが絡むように――WACだよ、あいつはさ、と会話に割り込んでくる。

「聞こえてたんですね」

「当たり前だろうが。っていうか、オレを除け者にするなって」

ワタルが物理的にも近付いてくる。

「アヤサさんって、元WACなんですかね」

ミネカが大きく頷く。

「……マサユキさん、ワックってなんですか？」

「さてな。なにかの略称じゃないのか。おそらくだが、自衛隊員の事だろうな」

と、二人でこそこそと話していると、

「WACってというのは、女性陸上自衛官の事ですよ」

と、ミネカが説明する。

「おお、そうなんだ」

「なるほどな。しかし、ワタルはともかく、あんたも知ってるとはな。そういうのが好きなのかい？」

「えっと……」

マサユキの質問に、ミネカは俯いて言葉を濁す。

「いやいや、そういうのが好きな女の子は別に珍しくなからう。恥ずかしいものじゃあるまいし」

「そうですね。ミリタリー女子とか素敵じゃないですか」

ハルトが目を輝かせる。

「そうですね。だって、ハルトなんか典型的なヲタクだよ。メイドカフェとか普通なんだろう？」

「ケンゴさん、別にボクは自分の趣味嗜好に関して卑屈に思う事はないですけど、なんだかその言い方だと蔑まれているように思えるんですけど、気のせいですか？ メイドカフェだって、いかがわしくない健全な場所ですよ。なにも後ろめたい気持ちはないんですよ。むしろオアシスです。至高の場所ですよ」

ハルトが冷静に淡々と言う。

「いやいや、そういうつもりはないんだって。でもさ、なんとなくそういうのって、恥ずかしいから隠すってよく言うじゃないか」

「確かにそういう人もいるみたいですね。恥ずかしいと思うなんて、どうかしてると思いますけどね。自分に自信がなさすぎるんです」

「いやいや、お前がポジティブすぎるんだって」

「そんな事はありません。好きなものを好きと言えないのなら、まだまだ好きという気持ちが足りていないんです」

「……人それぞれだろう」

「それはあるかもしれませんが、気持ちが向かうべきベクトルは同じです」

「ハルトよ、そのくらいにしてやれ。ケンゴだって、悪気はないんだ」

「わかっています。ですが、悪気はなかろうと、あまり卑下するような事はやめていただきたいですね」

「……あ、ああ、悪かった」

あまりにも真面目すぎるハルトに、ケンゴは謝罪の言葉を言わざるを得なかった。

「お待たせしました」

ちょっと重くなりそうな空気をぶち壊すタイミングで、料理が運ばれてきた。

ナイスタイミングだ——とマサユキは感心する。

「焼き鳥の盛り合わせと、唐揚げです」

テーブルのお皿を寄せながら並べていく。

「ホッケです」

と、それはケンゴの前に置く。

「それと今日のオススメのフルーツトマトと土佐はちきん地鶏の炒め物です」

そう言って置かれたものは、わりとシンプルなものだった。

鶏肉とトマトを櫛切りにしたものを炒めたものだった。他には特になにも入っていない。

「うまそうだな」

「なんだか、味気なくないですか？」

「シンプルイズベストですよ、ケンゴさん」

「そうですよ。素材の味で勝負できるって事ですよ」

と、ミネカも加わる。

「い、いや……そのだな。別にこれが悪いって意味じゃなくてだな……」

そう言われケンゴは、自分の失言にあたふたと慌てて言い訳をする。

「どうぞ、食べてみて下さい。店長の自信作ですよ」

そんな言葉を残して店員は戻っていく。

「どれどれ。オススメなんだし、期待できるんだろうな」

マサユキは小皿にとる。

「う～ん、いい匂いだ」

香ばしくもどこか甘酸っぱい香りが食欲を刺激する。

「どれどれ……」

マサユキは鶏肉とトマトを一緒に食べる。

「……………」

マサユキは時間が止まっているかのように固まる。

「マサユキさん、どうしたんですか？」

「どうですか？」

ケンゴとハルトがジッとマサユキを見る。

「おいしいですね、これ」

ミネカも食べていたようで、素直に感想を述べる。

「お肉はぎゅっとしまっていて噛みごたえがあって、じゅわっと肉汁が出てきて、それがトマトの酸味もあって……。でも、トマトはトマトでサポートだけじゃなくて、むしろお肉のジューシーさがトマトを引き立てている感じですね。トマトがメインかもしれません」

まるで食レポのようだ。

「それじゃ僕も……」

と、ケンゴが箸をのばす。

「……うまっ。さっぱりしてるのに、肉々しさがある」

「ボクもボクも」

「オレにもくれ」

ハルトとワタルも箸をのばす。

「なんだ、これ。マジでうまい」

「シンプルですけど、それぞれのうまみが主張しているのにマッチしてますね。さっぱりめだから、いくらでもいけそうです」

「そうだよな。でもって、酒がすすむ」

ワタルはジョッキを飲み干すと、ビールのお代わりと料理も注文する。

「そういえば、ミネカちゃんってWACじゃなさそうだけど、無関係でもない感じがするんだよな」

新しいジョッキを受け取りながら、ワタルが唐突にそんな事を言い出す。

「どういう事ですか？」

ミネカが少し声を震わせる。

「別に。ただそう思っただけさ。隠すような事があるのかないのか、それはわからないけど、どこことなくアヤサと雰囲気似てる気がしたんだよ、戦い方っていうかさ」

そんな事を言いながら、地鶏をぱくぱくと食べる。

「ワタルさん、食べ過ぎですよ。一人で食べないで下さい」

「いいだろ、ハルト。どうせ注文したんだし」

「それでもです。ああ、もうなくなる」

「早く食べないとなくなるぞ」

ハルトが文句を言っている間にも、他のみんなは食べ続けているので、皿は既に空になりそうだ。

「ここに集まってる連中は、別に優れてるからってわけでもないだろ。少なくとも、オレはエリートじゃないしな」

「ワタルさんは落ちこぼれかもしれませんが、僕はそこそこ……」

「ケンゴ、無意味な見栄はよせって」

「確かに研究成果はあげれませんでしたけど、もっと予算と時間さえあればなんとかなったんです」

「見苦しい言い訳だな。他になにか注文するか？ 揚げ物の盛り合わせ追加ね」

ワタルはひよいと通路に顔を出して注文する。

「かしこまりました」

「このマルゲリータをお願いしようかな」

ミネカも同じように注文する。

「マルゲリータって、ピザか？ そんなもんで飲めるか？」

「いいじゃないですか。ワタルさんは油まみれになっていて下さい」

ミネカがしれっと言り返す。酔いのせいなのか、場の空気のせいで口が軽くなる。

「なかなか言うね。やっぱり、それなりの場所で過ごしてきたんだろ」

「……そうですね。別に気にする事もないのかもしれませんがね」

ミネカは吹っ切れたかのようで、すっきりとした表情になる。

「WAFだったんです」

そうだったのか、とワタルとハルトは頷くが、ケンゴとマサユキは首を傾げる。

「あのさ、ワッフってなに？ 僕らにもわかるように言って欲しいんだけど」

「なになってWAFはWAFだろ。それ以外にないだろ。っていうか、誰でも知ってるような事だろ」

ワタルは自信満々に言う。ハルトも常識ですよと呟く。

「WAFは、女性の航空自衛官です。あたしは航空自衛隊に所属していました」

「なるほどね、納得だな。しかも、動きからして整備士って感じじゃないな。そもそも後方って感じがしないな。救難隊か？」

戦闘機パイロットか航空救難部隊どちらかと考えれば、自然と後者になってしまう。

「間違いじゃないですね。本当はファイターパイロット志望だったんですけどね。適性がなかったみたいです」

ミネカはカシスオレンジと一緒に、言葉や気持ちを飲み込む。

「やっぱきついかな。それでも、ヘリパイじゃなく救難ってのは、根性あるんじゃないか。別に隠すような事でもないだろ」

「そうかもしれませんがね。でも……」

と、やはり言葉を濁す。

「救難でなにかやらかしたか？ ト라우マになる事件なんて、最近あったか？」

ここ数日、救難に関する重大な事件や事故は起きていない。もっと前かもしれないが、どちらにしろ思い浮かぶものはない。

「メディックになれませんでした」

ワタルが考え込んでいると、ミネカがぼつりとかぼした。

「……はあ？」

ワタルがすつとぼけた声を出す。

ハルトも驚いた顔をしている。

しかしマサユキとケンゴは、わからない単語が多すぎてよくわからず聞いているだけだ。

「おいおい、メディックっていえばエリートもエリートだろ」

「そうですね。メディックになるなんて、かなり選ばれた人ですよ。なりたくてもなれない人なんて、ファイターパイロット並にいるでしょ」

狭き門という事もあるが、かなりの適性を要求されるため、努力でどうにかならない事も多い。もちろん、常に訓練を続ければ可能性がなくはない。そんな事はミネカもわかっている。しかし、それと納得できるかというのは別だ。

「それだけ目標が高いつて事か。オレとは別世界だな。オレなんか、カッコいいとかそういう志望動機だったからな。現実に絶望もしたが、期待があまりなかった分、気は楽だったのかもな。それでも結局リタイアしてるわけだけどな」

お待たせしました、と料理が運ばれてくる。

「おっ、待ってました」

と、ワタルが早速、地鶏とフルーツトマトを食べる。

「あっ、なくなっちゃう」

ハルトも慌てて箸をのばす。

「まあ、詳しい内容はよくわからないけどな、まだまだ若いんだし、これからだって叶えられるんじゃないのか？」

マサユキがそう諭しながら箸をのばす。

「僕もよくわからないけど、それにチャレンジしようってだけで、かなりスペックは高いんじゃないの。やっぱりうまい」

ケンゴも美味しそうに食べる。

そんな姿を見ていると、一度や二度の失敗などどうでもよく思えてきた。

「あたしの分も残しておいて下さいよ」

そう言いながらミネカも箸をのばす。

「早いもん勝ちだろ」

「ワタルさん、食べ過ぎですって」

「だから早いもん勝ちだつての」

わいわいと夜は過ぎていった。

将軍をどうしよう

「将軍はあのままか」

深夜になり城に戻ってきた魔王が参謀に確認する。

「はい。オーガは倒されてしまいました。将軍が侵入者たちの前に立ちはだかつております。しかし、侵入者たちはすぐに消えてしまい、将軍はまた動けぬままとなっています」

参謀が報告する。

「なるほどな」

「侵入者に関してですが、一人変更されておりました。将軍が攻撃を加えた者の姿はありませんでした」

「そうか。将軍の攻撃をまともに受けていたのだろう。無事のはずはないか」

「申し訳ありません」

「参謀が謝る事ではない。それにまだ、最悪の結果だと決まったわけでもあるまい。可能性は限りなく高いがな」

深刻な魔王の表情に、参謀は小さくはいと頷くしかできなかった。

「過ぎた事はどうしようもないが、これ以上将軍に行動させるのは危険だな。被害を広げる可能性が高い。そもそも、侵入者たちが将軍に対抗できる可能性はあるのか？」

参謀は静かに首を振る。

「部屋に入る前に、ほとんどの力を消費したとはいえ、将軍の力は侵入者たちを上回っております。戦いが長引けば、将軍も力を取り戻すでしょうし、なおのこと厳しいものとなるでしょう」

「そうか。やはりこちらで将軍を止めねば、この世界に被害を与えてしまうようだな」

「なんとか考えてみます。おそらく明日も侵入者たちが来るでしょう。その際、将軍に魔王様のお言葉を伝えられるか試してみます」

「頼んだぞ」

参謀は大きく頷いた。

「さて、今宵の夕餉はなにかな」

「はい、今日は――」

重い話はそこそこにして、やはりくつろぎたい。

「今日もいい匂いだな」

「本当だ」

ちょうどそこに宰相と軍師が帰ってきた。

「みなさんお帰りですね。すぐに準備します」

参謀は忙しそうにキッチンに向かった。

装備を強化せよ

「装備の強化が必要です」

ミネカは全員を前にそう提案した。

市役所の会議室にミネカの声が響く。

「装備の強化？ どうするんだ？」

勢いで飲み過ぎたワタルが長机に突っ伏し、頭を押さえながら言う。

「このままでは、とてもじゃないですが勝てません」

「すまん。ちょっと声を落とし気味で」

マサユキも頭を押さえる。

その隣では、ケンゴも頭を抱えていた。

「みなさん、二日酔いってどういう事ですか」

「うっせえ、ハルト。叫ぶな」

ワタルが苦しそうに呻く。

「そうだぞ。ガンガンするんだ」

ケンゴは真っ青な顔で、今にも吐きそうだ。

グロッキーな三人は、昨日あまりにも盛り上がりすぎて、普段ではあり得ないハイペースで飲んでしまい、結果こうなってしまうている。体調管理ができないのが大人でもある。

ミネカもかなり飲んでいたのだが、アルコール分解酵素万歳らしくケロッとしている。

ハルトはそもそもあまり飲まず、昨日も後半はソフトドリンクだったので問題なし。

「装備の強化ですか。確かにこの先、強敵が現れれば必要かもしれませんね」

「既に必要だと思います。現状の装備では、あの強大な敵には太刀打ちできません」

ミネカが力説する。

「すまないが、声を抑えてくれないか」

マサユキが耳を押さえながら言う。

「すみません」

ミネカは、はっきりとした声で謝罪する。本人に自覚はないが、自然とはっきりとした声量で話してしまう。普段の会話ではそうでもなのだが、こういう場ではどうしてもそうになってしまうようだ。

決して悪い事ではないのだが、グロッキー三人組にとっては拷問でしかない。嫌がらせだ。

ただでさえそういう状況の上、頭痛を助長するミネカの声で、完全にダウンしてしまっていた

。

「ちなみに、ミネカさんはどんなものを考えているんですか？」

唯一まともに会話ができるハルトが真剣な顔で訊く。

装備の強化といっても、戦車のようなものは不可能だ。かといって、扱える銃器も限度というものがある。

「そうですね。銃火器は必要かと思います。刀剣よりは扱いやすいかと。アサルトライフルくらいは最低限必要でしょうね」

「……なるほど。やっぱりそうだよね」

ハルトが大きく頷く。

「確かにそれは重要かもしれませんが、ボクたちが扱えるものは限られています。現実問題として、法律やら色々面倒なんです」

「そうですよね、やっぱり」

わかっているけども落胆してしまう。

「そうなんです。ワタルさんはともかく、ボクたちはそういう訓練を受けていませんから、アサルトライフルなんて扱えないですし」

それを聞いてミネカは、そうなんですと、と素で驚いていた。

「昨日も話にありましたけど、ボクたちって別に戦闘職種じゃないですからね」

「そういえばそうでしたね。戦闘職種なのはワタルさんだけですか」

「入院中のアヤサさんも元WACなのでそうなんですけど、他は研究職中心ですので、本当なら前線には出ないポジションですよ」

「そうですよ。どうしてこういう布陣なのでしょう。それこそ機動隊はもちろん、むしろ陸自の仕事じゃないんですか？」

いまさらながらも、もったもな疑問だった。

「色々あるみたいです。ボクたちはあくまでも、書類の記入と回収が目的であって、戦闘ではないですから。もしそういう人たちだけだと、いかにも戦争じゃないですか。自衛隊は軍隊じゃないですけどね」

「でも、ワタルさんとアヤサさんが……」

「二人は、元、ですから。それはミネカさんもそうでしょ？」

はっきりと言われるとつらい。

どう言い繕ってもリタイア組だ。挫折して諦めたという事実は変わらない。

「専守防衛であっても、それに近い組織が動くのは問題があるんです。ですが民間に任せるわけにはいきません。なので、ボクたち公務員が特別組織を作っているわけです。職務上、戦闘のようなものはありますが、目的はそれじゃないですから」

ハルトは淡々と告げる。それを聞いてミネカは、首を横に振った。

「そんなの建前でしょ。政府はあの魔王城を排除しようとしているはずですよ」

「それはミネカさんの考えでしょ。政府は魔王城を受け入れようとしています。そのために、ボクたちが必要書類を持って行くんじゃないですか」

「だから、それは建前で……」

ハルトが真っ直ぐに見ているので、それ以上の言葉を言えずに飲み込んだ。

「違いますよ。これは本気です。ボクたちは本気で、このチームを組んで、魔王城の主に会って、色々話をしようとしているんです。そもそも今のところ害はないですし、排除する必要はないでしょ？」

「どうしてですか。あの魔王城のせいで怯えている人もいますよ」

「そうでしょうね。でも、それは魔王城に限ったものじゃないですよ。ご近所問題なんてどこ

にでもありますよ」

「……それをそんな言葉で済ませるんですか」

「そうです。同じです」

ハルトは一瞬も悩まなかった。

「……………」

あっさりと言われて絶句する。

「ミネカさんは、なにか敵対する理由があるんですか？ なにか被害を被ったんですか？ それなら話は別ですけど。でも、ボクたちは区別をしません。それはただの差別ですよ」

軽い口調で言っているものの、内容はグサグサとミネカに突き刺さる。

ハルトの言葉は偏っているとはいえ、それはそれで正論だ。

魔王城の排除は正義の行いで、航空自衛隊をリタイアしたとはいえ、国家防衛に携わる事ができると張り切っていただけに、この現実は厳しかった。

「そういうわけなので、銃器は難しいでしょうね。まあ、ボクやワタルさんの剣が限界でしょうね。銃刀法違反じゃないかと言われると、反論が難しいんですよ。許可はありますけどね」

「……わかりました。では、あかし用として銃器を申請します」

剣が認められるなら……と言ってみる。

「申請書は受理できますが、配備されるとは限りませんよ。銃だと可能性は限りなく低いですね」

「何度でも申請します。みなさんだって、あの敵を倒さないといけないでしょ。そのために必要なんですから、必要なものじゃないですか」

「色々あるみたいなんで、あまり期待はしないで下さいね。で、今日は……無理そうですね。ワタルさんたちがこんなにグロッキーじゃ、とてもじゃないですけど……」

ハルトが机に突っ伏したままの三人を見る。

「すまん」

マサユキがなんとか声を絞り出す。

「本当ですよ。体調管理はしっかりしないと。せつかく再開して、いきなりこの状態は……。いくらボクたちがわりと自由でも、なにかしら抗議があるかもしれませんよ」

「だよな。わかってる」

すまん……とそのまますま言葉はなかった。

「じゃあ、ボクはミネカさんの武器を申請しておきますね。それとミネカさん」

とハルトは、さっさと部屋を出ようとしているミネカに声をかける。

「ボクがいないと魔王城に入れませんか。向こうが入れてくれれば大丈夫かもしれませんけど」

「……わかりました」

まるで思考を読まれたかのようなハルトの言葉に、ミネカは固まった。どうやら凶星だったようだ。

「今日は無理そうですし、帰りましょうか。いても仕事になりませんし」

「このまま帰るんですか？」

ミネカが訊くと、ハルトはそうですよと頷いた。

「三人がこんな状態じゃ、魔王城に行けませんし、解散しかないでしょ」

「そんな。公務員が無断欠勤とか……」

「確かにそうですね。でも、他の公務員——たとえば消防隊員が出動しなかったら、それって欠勤扱いですか？」

「消火活動がない時は訓練をしているはずですし、待機しているのも任務だと思います」

「ですよね」

ハルトは軽く頷く。

「ミネカさんが所属していた救難隊だって、アラートがなければ出動しないでしょ？」

「訓練を続けています。いざという時のために必要な事です」

ミネカは少し苛立ちを込める。

「ですよね。だからボクたちは休むんです。自由時間ですので、本当に自由にして下さい」

「だったら、あたしは訓練をします」

「それもいいですね。正直、ミネカさんの戦力は貴重なので、強ければ強いほど助かります」

「そうですか。ありがとうございます」

ミネカは肩を怒らせながら部屋を出ていった。

「ハルトよ、ちょっと言い過ぎじゃないか？」

「そうだぞ。せっかくの若い子なのに……」

ワタルとケンゴが、少しだけ顔を上げる。

「このくらいで折れないと思いますよ」

「そうだったら困る」

マサユキが机に突っ伏したまま、顔だけを横にする。

「さすがに銃器は無理ですよ。それができたら、すごく楽ですけど」

「まあな。完全に戦争モードになっちゃうけどな」

ワタルが言いながら額を押さえる。

「あれで諦めてくれないかな……」

「そうだな。それはそうと、大きな声を出すな」

マサユキが声も絶え絶えに言う。

「すみません。というわけで、今日は帰って休みましょう」

「無理」

ケンゴが即答する。

「じゃあそのまま。ボクはいつもの場所に行ってますね」

そう言って、ハルトは出ていった。

残されたグロッキー三人組は、しばらくそこで休んでいた。

今日こそは

「おはようございます」

今日も元気にハルトが出勤する。

「おはようございます」

いつもは誰もおらず、返事があるはずもないので、およ？ っと首を傾げる。

目の前にはピンク色のビキニアーマー。

準備万端ですぐにでも魔王城に向かいたいというオーラを放ちまくっているミネカが、長椅子に腰掛けている。

「ミネカさん、おはようございます」

「おはようございます、ハルトさん」

そう言ったミネカの表情は、どこか強ばっている。怒っているように見えなくはないが、昨日の事があり、どう接すればいいのかわからないという、どことなく所在なさげな表情だった。

「すぐに着替えてきますね。他の人たちもすぐに来るでしょうし」

そう言っている間にも、おはようとマサユキが出勤してくる。さすがに今日はグロッキーではない。

「おはようございます。さあ、今日も頑張りましょう」

ハルトの言葉に、だたと答えてマサユキと一緒に着替えに向かう。

「……………」

ミネカは気まずい感じを拭えずいた。

それからしばらくして、ケンゴとワタルも出勤し、それぞれ着替え終わってメンバーが揃った。

「それでは、今日こそあの部屋を突破しましょう」

ハルトが鼓舞するように拳を突き上げる。

「そうだな。っと、そうだそうだ忘れてしまうところだった」

マサユキが慌ててなにかを取りに向かう。

「すまんすまん」

すぐに大きなバッグを持って戻ってくる。

「マサユキさん、大事なものを忘れないで下さいよ」

「そう言うハルトこそ、覚えてるなら教えんか。どうせお前も忘れてたんだろ」

「バレましたか」

あははと頭をかく。

「なんですか、それ」

話の内容がわからないケンゴが訊く。

「まさかオレの新装備か？」

「ワタルさんって、妙なところで勘がいいんですね」

「じゃあ、本当にオレの装備か」

「いや、違う」

ワタルが喜ぶが、マサユキがその幻想をぶち壊す。ワタルの背中には、残念そうな文字が見えるかのようだ。

「ミネカさんの新しい装備です」

ハルトがそのバッグをミネカに渡す。

「あたしの……ですか？」

ミネカは戸惑いながらそれを受け取る。

まさか申請が通るとは思っていなかったので、寝耳に水の事だった。

「本当にあたしのですか？」

バッグはわりと重い。

「そうですよ」

「手配が早いですね」

元々配備されていない装備なので、色々と煩雑な手続きが必要だったろう。しかし、昨日の今日でそれができるとは……とハルトのスペックの高さに感動しながらバッグを開ける。

「……………」

ミネカが一瞬フリーズした。

「……これは？」

しばらくして、ようやくその言葉だけが出てきた。

「ミネカさんの新装備です」

ハルトは事実をそのまま告げる。

「これが、ですか？」

中に入っていたものは、ミネカの期待とは違った。

「そうですよ。装備の強化です」

「あたしが申請していたものとは違うようですが」

「やはり銃器は難しいですね。というわけで、代わりにこれです」

ハルトがそれを指す。

「これってあれですか。トンファーとかいうものですか？」

なんとなくの知識はあるものの、現物を見るのは初めてだ。

「そうですね。トンファーです」

そこに入っていたのは、二本の棒のような武器だった。途中で突起があり、そこを握る事ができるようになっている。

「まあ、その辺が妥協点だろうな」

ワタルは腕を組みながら、うんうんと頷く。

「でしょうね。さすがにアサルトライフルとか無理でしょ」

ケンゴも同じように頷く。

「そういうわけだ。だが、強化は必要と判断して、武器を追加する事にした。——おっと、建前上は自分の身を守るための防具としてだったな」

武器をおおっぴらに配給できるはずもなく、危険から身を守るために必要な`防具、として登

録されている。それは、ワタルやハルトの剣に関しても同じだ。作業に必要なものとしての扱いだ。林業に携わる人が、斧やチェーンソーを使えるのと一緒だね。

「こんなものでどうしろと？　せめて刀剣くらいは……」

見かけ上はなんとなく強そうだが、実際に扱うにはなかなか難しい代物だ。関節の動きを封じてしまうのが難点だ。

それでも、防御にも優れているので、使いこなせば攻防一体のものとなる。だからこそ選ばれている。

「それは設定上難しいです」

ハルトの言葉はミネカにはちんぷんかんぷんだ。そもそも、武器として扱えるかどうかもわからないものを支給されても、果たして効果があるのか疑問だ。

「意味がわかりません」

そりゃそうだ。いきなり「設定上、と言われても、理解できる人の方が少ないだろう。

「説明はされてるはずなんですけどね……。ミネカさんは「戦士、として登録されていますよね」

はい、とミネカが頷く。

「そういう事です」

説明終了。

もちろん、ミネカにはわけがわからない。

「すみません。どういう事ですか？」

「ミネカさんは「戦士、です。なので銃はもちろん、剣の装備は邪道です」

「全く意味がわからないんですけど」

当然だ。

「ハルトよ、それは不親切じゃないか？」

「そうだぞ。それに、「戦士、だって剣を持っている場合もあるだろう」

「そうだな。このチームに関しては、「戦士、というのは「格闘家、みたいなポジションだからな」

マサユキ、ケンゴ、ワタルが少しだけフォローする。

「そうですね。役職上は「戦士、ですけど、「闘士、とか「格闘家、みたいなものですね。というわけです。理解していただけましたか？」

これでいいでしょ、とハルトは満足そうだ。

「いえいえ、わかるわけないですよ」

ミネカはぶんぶんとう首を振る。

「とにかく、あんたは本来なら武器を持つ事はできないんだ。実際、アヤサはそれを貫き通してるしな。だからこそ、そういうポジションには、それなりに訓練された者が配置されているわけだ」

マサユキができるだけわかりやすく説明する。

「つまり、あたしは素手で戦えて事ですか」

ミネカは愕然とする。

戦士が持っていても違和感がない範囲で……という条件で選ばれた武器なのだ。そういう条件があった事を、もちろんミネカが知るはずもない。

「そういう事です。ギリギリのところがそれですね。結構使えると思いますよ」

ハルトはわりと無責任に言う。

「……わかりました」

とても納得できるものではないが、これが命令とあらば受け入れるしかない。

「理不尽で不合理ね」

ミネカがそうぼやいたのは、誰も聞かなかった事にした。

決めろリベンジ

「ロード！」

魔王城に到着した一行は、ハルトのかけ声で魔王城の中に移動する。もちろん、あの石室だ。オーガは攻略したものの、予想外の強敵によって、これ以上進む事ができずにいる。アヤサが大怪我をしたという事もあり、因縁深い場所でもある。

ハルトたちが到着すると、動きを止めていた将軍が動けるようになる。

「お前たち、これ以上魔王様を煩わせるな」

動きを止められている間も回復する事はなく、いまだ本調子ではない。それでも充分だという自負はある。

そこにこそ、ハルトたちがつけ込む隙がある。

「悪いけど、ボクたちはこの先に行かないといけないだ」

「アヤサの仇、きっちりさせてもらうぞ」

ハルトとワタルが将軍に斬りかかる。

他の相手よりは話ができそうでも、交渉が通じるとは思えないので、やはり実力行使しかない。

「この程度か」

将軍は二人の剣を手で弾いてしまう。

そうして胴が開いた瞬間に、ミネカがトンファーで突きにかかる。

「ふん。効かぬわ」

将軍は胸を張ってミネカのトンファーを受ける。まるで弾き返されるような衝撃に、ミネカは後方に自ら跳んで衝撃を和らげる。

「やっぱり強敵ね。でも、これって意外と使えるかも」

どうしてこんなものが支給されたのかと不満たらたらだったが、こうして実際に使ってみるとなかなか使いそう。さすがに初めてなので、本来の力は出ていないかもしれないが、それでも素手よりはどれだけ効果があるだろうか。

「アヤサの仇だ！」

ワタルは諦めずに、何度も何度も斬りかかる。

「時間をかけると、相手が回復してしまいます。速攻で決めますよ」

ハルトの声で動いたのは、意外にもケンゴだった。

「今こそ僕の見せ場かもね」

「わしも忘れるなよ」

マサユキも前が出る。

普段は後方支援の二人が前が出るのを見て、ミネカは二人が自ら死に向かっているとしか思えなかった。しかしワタルとハルトは、全く心配している様子がない。むしろ応援しているようにも見える。

「ハルトさん、止めないんですか」

ミネカは言わずにいられなかった。どう見ても二人は戦闘向きじゃない。このままだと、むぎ

むぎ殺されるだけだ。

「大丈夫ですよ。ほら、ミネカさんはタイミングをきっちりはかって下さいね」

「タイミング？」

ミネカにはよくわからない。いきなりタイミングとだけ言われても、なんのタイミングなのかわからない。事前説明なしなんて不親切もいいとこだ。

どう文句を言おうかと考えていると、マサユキとケンゴがマントの下からなにかを取り出した。

なんだろうと思う暇もなく、二人はそれを相手に向けて投げつけた。

当たった瞬間に、パリャンと軽い音を立てて割れた。どうやら鈍器ではなかったらしい。

「ん？ これって……？」

割れた瞬間、どこかで嗅いだ匂いが部屋に充満した。

「アルコール？」

それは居酒屋でよくある匂いだ。お酒の匂い。だがこれは、そんなものよりも強烈だ。お酒でいえばウォッカ。もはやアルコールのみ。二人が投げつけたのはまさに、純度の高いアルコールだった。

「な、なんだ、これは」

将軍は嗅ぎなれない匂いに戸惑っている。

そうしているとすぐに、視界がぐんにやりと歪み始める。

「な、なんだ？ どうなっている？」

嗅ぎなれないという事は、耐性がないという事でもある。ただでさえ強烈なアルコール空間に、慣れない状態にいると一瞬で酔っぱらった状態になる。

ケンゴとマサユキは、あわよくば急性アルコール中毒状態を狙っていたが、さすがにそこまではいかなかった。

「次いくぞ」

「了解です」

マサユキとケンゴは、間髪入れずに次の行動にうつる。

マントの下から、さっきと同じようなものを取り出す。

アルコール追加か？ とミネカが考えていると、二人はそれを投げつけた。

またパリャンと軽い音がして割れた。

「うがっ」

その中身が将軍の体にまとわりついて、バランスを崩して倒れてしまう。

「なんですか、あれ」

将軍の体には、白くてネバネバしたものがまとわりついている。

「よくわからないですけど、とにかくネバネバしたものです」

ハルトが解説になっていない解説をする。

ミネカは、そうですか……としか言えない。

「さあ、今ですよ」

将軍が酔っぱらって、さらにはネバネバで動けない今こそ、最大のチャンスだ。

ワタルとハルトが剣を構えて、将軍に突っ込んでいく。

「ミネカさん、いきますよ」

ぽかんとそれを見ていたが、ハルトの声で現実に戻され、トンファーを構えて突っ込んでいく。

「アヤサの仇！」

ワタルはその言葉しか知らないかのように、とにかく叫びまくる。実際、ワタルの頭の中には、その事しかなかった。それが全てだった。

身動きがとれない将軍に対し、ワタル、ハルト、ミネカの攻撃が繰り返される。まさにタコ殴り状態だ。決してリンチじゃないよ。

「おらおらおらおらおら……」

ワタルは何度も何度も斬りつける。防具はもちろんだが、皮膚もかなりの硬度があるようで、なかなか斬れない。それでも、ダメージは累積しているようで、苦しそうにしている。

ミネカはなんだか悪い事をしている気分になりつつ、とりあえず攻撃を続ける。身動きがとれない相手に卑怯な……と思われても、こうでもしないと勝利できないのは事実だ。相手がまともに動ける状態で対等に戦うには、あまりに力量の差がありすぎる。なので、これが最良の状況だ。

「ぐっ、ぐあっ」

将軍はうめき声を上げる。酔いやネバネバのせいだけでなく、ダメージのせいで動けなくなってくる。

「お前たち、正々堂々と……」

「黙れ！」

よさげな事を言おうとした将軍だが、ワタルの剣戟で言葉を続ける事ができない。

「悪いけど、ボクたちは卑怯な事とか、姑息な事をしないと勝てないんだ。別に正義の味方ってわけでもないし」

そんな事を言いながら、ハルトも攻撃の手をゆるめない。

「あたしはなんだか不本意ですけど、このチャンスは生かさせてもらいます」

ミネカもトンファーで殴り続ける。

「あとで後悔しまくりそうだな……」

と、ミネカはまだ吹っ切れていなかった。それでも、攻撃をやめない。

「くそおっ！」

タコ殴られ状態だった将軍は、全ての力を出して、最後の抵抗を試みる。

不思議な力が将軍から放たれ、その衝撃で三人は吹き飛ばされ、石室の壁に打ちつけられる。

「まだそんな力があったのか」

強固な装備のお蔭で直接的なダメージがなかったワタルが、ゆっくりと立ち上がろうとしてよろける。

「くそっ、結構な衝撃だったからな」

右手で頭を押さえる。

「大丈夫か、ワタル」

「多分……。すみません、マサユキさん。大丈夫じゃなくても、このチャンスを逃すつもりはないですよ」

「そうか」

「二人とも大丈夫か？」

ケンゴがぐったりとしているハルトとミネカに駆け寄る。二人の防具はワタルほどではないので、強く打ちつけられたダメージが大きかった。

「ボクたちよりも、あいつにとどめを」

ハルトは痛みで動けない。

「あいつは動けないみたいだ。さっきのが最後の力だったんじゃないかな」

「だったらなおさらですよ。回復される前に、一気に決めて下さい」

「だが、僕じゃみんなみたいには……」

デスクワーク向きのケンゴには、どれだけダメージを与えられるか、本人が一番疑問に思っている。

「ワタルさんとミネカさんは？」

「そうだ。ミネカちゃんだ」

ケンゴはミネカに駆け寄る。

ミネカは打ちつけられた衝撃で気を失っていた。

「おい、大丈夫か？」

ケンゴは肩を揺する。

「うおっ、すべすべだ」

直接肌に触れたケンゴは、きめ細かくすべすべのお肌に感動する。普段のケアはもちろん、なにしろ若さというものがある。その触り心地は、あまり女性経験のないケンゴには刺激的すぎた。本能在理性を打ち砕く。

しかも相手は気を失っているわけで、なにをしてもよさそうな状況だ。あんな事やこんな事が可能だ。

こんな状況ではあるものの、据え膳食わねばというヤツで、わきわきと手がふくよかな部分にのびていく。

「んっ……」

不意に吐息が漏れ、ケンゴはビクンと手を止める。

「……………」

しかし、ミネカが起きる様子はない。そうなれば、さっきの吐息は、ケンゴの理性をさらに打ち砕くものにしかならない。むしろクリティカルヒットだ。

わきやわきやと手を動かして、あと少しでふくよかなマウンテンに到達しようとした時、ミネカがゆっくりと目を開けた。

「うわっ」

ケンゴは慌てて後方に転がる。

そして次の瞬間、ほぼ消滅しかかっていた理性が、一気に復活していく。

「ぼ、僕はいったいなにを……」

一気に我に返る。しかし、ケンゴが悪いわけではない。男ならしょうがないって。だって、そういう生き物だもん。いくら表面上は真面目でも、こんな状況になればこうなって当然。

「あれ？ ケンゴさん？」

ケンゴの所行を知らないミネカは、純真無垢な表情をケンゴに向ける。

「うわあああつ」

ケンゴはその視線に耐えられず、尻餅をついたまま距離をとる。

急に離れていくケンゴの行動が意味不明すぎて、ミネカは首を傾げる。その仕草が可愛く、ケンゴの良心にグサグサ突き刺さる。

「ミネカさん、動けますか？」

いつの間にやら、這いずってハルトが近付いてきていた。

「なんとか大丈夫そうです」

痛みはあるものの、なんとか動けそうだ。

「すみません。ボクはこういう状態なので、動けそうにありません。ミネカさんが最後のとどめをお願いします」

「あたしが……ですか？」

ハルトの提案にミネカは驚く。しかし、ハルトの状態を見ると、確かにそれしかないように思える。

「わかりました。終わらせます」

ミネカはゆっくりと立ち上がり、トンファーを構える。

「うっ」

思っているよりもダメージがあるらしく、脇腹に痛みが走る。

それでもミネカは、将軍に攻撃するために、ゆっくりながら近付いていく。

将軍は力を使いきり、完全に諦めた状態だ。動けないのを受け入れている。

「ふん、お前たちの勝ちだ。私はもう動けぬ」

ミネカが近付くと、将軍がそんな事を言う。

「魔王様、申し訳ございません」

潔すぎる将軍の姿に、ミネカは戦意を殺がれてしまう。

「どうしてあなたは悪でいてくれないの」

ミネカは完全に戦意を喪失する。

「私たちが悪だと？ それはお前たちが勝手に決めた事であろう、侵入者たちよ。魔王様の居城に侵入し、魔王様を煩わせる事は悪ではないのか」

「……………」

そう言われて、ミネカはなにも言えなかった。

突然現れた魔王城。この状況をなんとかしようとするのは正義で、突然現れた魔王城は悪である。

そんな単純だが一方的な方程式ができあがっていた。

視点を変えれば、ミネカたちこそが突然侵入してくる悪である。

考えてみれば簡単な事だ。

「だけど、あたしたちは受け入れられない。あなたたちが、この世界に突然現れて、それがいい事のはずがない。少なくとも正義じゃない」

そう思う事が、最後に残された牙城だった。だからこそ認めるわけにはいかない。

「なにしてるんだ、ミネカちゃん」

ミネカがなにもできずにいると、ワタルがよろよろしながらやってきた。

「考える必要なんかない。そいつはアヤサを傷つけた。この世界に侵攻してきた。そういう事なんだよ」

書類作成という目的を完全に忘れてるよ……と、遠くでハルトは思ったが、声を出すのも辛く、スルーする事にした。

「とにかく、アヤサの仇だけはとらせてもらおうぜ」

「好きにすればいい。私は敗者だ。勝者には従おう」

「カッコいい事言うじゃねえか。だったら、遠慮なくさせてもらおうぞ」

全く容赦という言葉に縁がないワタルは、これではまるで悪者なのだが、本人はそんな事を気にしていない。アヤサの仇をとるといふ、それだけが彼を動かしている。

ワタルは剣を構えて、将軍に突き立てる。

「ぐっ……」

将軍はうめき声をあげるが、微動だにしない。正確にはできないのだが、動ける状態であっても同じだっただろう。

「魔王様……」

その言葉を残し、将軍の姿が消えていった。

ガコンと剣が重い音を立てて倒れる。

「……………終わったのか」

ワタルはガシャツと音を立てて膝を突く。

「終わったんですか……」

ミネカもその場に座り込む。

「あたし、なにもできませんでした」

ミネカがぼつり呟く。

「セーブ！」

ハルトは痛む脇腹を押さえながら、渾身の力で叫んだ。

ドキドキドライブ

「大丈夫か、二人とも」

魔王城の外に移動して、地面にのぺっと寝そべった状態のハルトと、成し遂げた感で放心状態のワタルに声をかける。

「ちょっと動けそうにありません」

ハルトが苦笑いしながら言う。

「しょうがないか。帰りはわしが運転するでしょう」

「マサユキさん、運転できたんですね」

運転はいつもハルトだったという事もあるが、移動は基本電車だったので、他の誰も運転しているところを見た事がない。ただワタルとミネカに関しては、前職が前職だけに、そういう事は当たり前前にできるというイメージがあった。

「運転くらいできるさ。まあ、しばらくしていなかったがな」

「そうなんですか。ちなみに、どのくらい運転していないんですか？」

ケンゴが訊いてしまう。

「そうだな……。前に運転したのはいつだったかな」

マサユキは腕を組んで考え込む。

アヤサが大怪我をした時も運転したのだが、他のメンバーは放心状態で記憶がなく、マサユキもアドレナリンが大放出中で興奮しまくりで、今ひとつ記憶が定かではなかったりする。そのため、その時の事はなかった事になってしまっていた。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ。そんなに考え込むほどですか」

「そうだな。去年も一昨年も運転していないな。あれはいつだったか……」

「ちょ、なんですか。めちゃくちゃペーパーじゃないですか」

「大丈夫だ。免許はある。あれ？ 今日持ってたかな」

それを聞いて、ケンゴだけでなく、全員が青ざめる。

「あたしが運転します」

このままでは命の危険性があると判断し、ミネカが名乗り出る。

「無理はいかんだろ。その体で運転はさせられんだろ。ワタルも同じだぞ」

ワタルはグツと言葉を飲み込む。今まさに言おうとしていたのに。

「でも、久しぶりの運転は、しんどくないですか？」

「いやいや、大丈夫だ。わしは基本は後方だったからな。ハルトたちのようなダメージはない」

「でも……」

「なんだ？ もしかして、お前が運転するのか？」

言われてケンゴは、ブンブンと首を振る。

「無理です。僕は免許がないので」

……問題外だった。

「ほらみろ。わししかおらんだろ。おっ、あったあった」

と、荷物から免許証を取り出す。見事にゴールド免許だ。

「ゴールドだぞ。安心して任せろ」

普段から運転しているのゴールドと、ただ持っているだけのゴールドは、その価値に雲泥の差がある。

誰もが不安しかなかったのだが、マサユキは運転する気満々だ。

「ほら、今日は帰るぞ。ケンゴは助手席だ。他は後ろに乗れ」

そう言って、マサユキは後部座席を倒す。フラットになって広々だ。

「荷物はケンゴが膝の上だな。あとは、できたスペースに。ほら、お前たちは川の字にでも寝ろ」

強制的にマサユキが準備をし、拒否できない空気になってしまった。

「諦めるしかないんじゃないか」

「ワタルさん、僕はまだ死にたくないです」

「あんな現場にいたんだ。死ぬ事だって覚悟してるだろ」

「それとこれは別です」

ハルトも反論する。

「オレだってイヤだ。だがな、そうとでも思わないと、どうしようもないだろう」

「わかりました。諦めます。あたしはあの場で死にました。もうどうでもいいです」

ミネカが自棄になる。

「ミネカさん……」

ケンゴが恨めしそうに見る。

「しょうがないじゃないですか。諦めましょう。事故るとは限らないじゃないですか。運を天に任せましょう」

「……まさかの神頼み」

「ボクも諦めました」

「おい、ハルト。お前までかよ……」

いよいよ味方がいなくなった。

「わかったよ。僕も諦める」

ケンゴはそう言うしかできなかった。ここで文句を言い続けても、好転する見込みがない。

「よし決定だ」

ワタルが車に乗り込む。それに続いて、ハルトとミネカも乗り込んだ。

「無事に帰れますように」

ケンゴは神に祈りながら、助手席に乗り込んだ。

「さあ、出発だ」

運転席に座って、出発を今か今かと待っていたマサユキはアクセルを踏み込んだ。

ブオオオンと音がするだけで進まない。

「マサユキさん、サイドブレーキ」

「ああ、すまん。忘れてた」

瞬間、マサユキ以外が青ざめた。

「僕、歩いて帰ります」

ケンゴは降りようとするが、ロックされていたので開かない。

「ほら、もう出発するぞ」

今度はちゃんと発車する事ができた。

「降ろしてえ〜」

ケンゴの叫びが車の中に響いた。

「うるさい、ケンゴ。黙れ」

マサユキの一喝も、なかなかの音量だった。

それぞれの居場所へ

「お疲れ」

報告を終え、着替えも終わると、マサユキはルンルン気分でみんなに言った。
役所の玄関前では、まだ昼過ぎという事もあり、市民の方々が行き来している。
他の職員はまだ働いているが、マサユキたちの今日の業務はこれで終わりだ。
ダメージの事を考慮して、急遽明日も休みとなった。休養日だ。

「よかった。本当によかった。僕は生きている」

ケンゴがそんな事を繰り返しながら、着替え終えて玄関前にやってきた。

「ケンゴよ、これからあそこに行こうか」

あそこというのは、もちろん喫茶店 `月の音色、だ。しかし、今のケンゴには聞こえていなかった。

「じゃあ、ボクたちはちょっと病院に行ってきます」

「そうだな。本当に送っていかなくてよかったのか？」

「いや、いいですいいです」

ハルトが全力で拒否する。

「電車で行きたい気分なんで。そうですよね、ワタルさん、ミネカさん」

ハルトが訊くと、二人は力強く頷く。

「オレたちだけで充分だから、マサユキさんたちはマサユキさんたちで、ゆっくり休んで下さい」

「そうか。ワタルたちがそう言うなら、わしらは一足先にリラックスさせてもらうかな。ほれ、行くぞ」

と、ケンゴの腕を引っ張って歩いていった。

「……助かった」

ワタルがヘナヘナと座り込む。

「あの運転は、寿命が縮みました」

ミネカが素直に感想を述べる。

「そうですね。なかなかスリル満点でしたね。そんじょそこらの絶叫マシンなんか、比べものにならないですよ」

左右の揺れはもちろん、信号の度に前後に揺れ、しかも寝ているように言われていたので、外の景色が見えず、その予測もできない状態だった。突然揺れるのだから、常に構えていないといけない。精神的に疲労しまくるドライブだった。

「じゃあ、行くか」

「そうですね」

「はい」

と、ひとしきり感想を共有して、三人は念のためにとの検査と、打撲の治療のために病院へ向かった。

ちなみに特に異常はなく、ワタルはそのままアヤサの見舞いという事で、泊まる事になった。
ミネカとハルトは、検査を終えてそれぞれ帰路についた。

今日も今日とてご帰宅です

「おかえりなさいませ」

ハルトは自宅以外に帰る事にした。

「円環の勇者さん、今日は早いですね」

みんなが、素敵スマイルで出迎えてくれる。

「こんにちは、みんなさん。今日はちょっと早く仕事が終わったから」

まだ開店して間もないという事もあり、他の客の姿はない。

「そうなんですか。っていうか、大丈夫ですか？ なんだかボロボロじゃないですか」

「ああ、これ。大丈夫大丈夫」

顔や体に絆創膏や包帯がちらほら見える。大丈夫には見えない。

「ここに帰ってきたら、もうそんなのどうでもよくなったよ」

「いやいや、無理はよくないでしょ」

ゆきながハルトを叱る姉のようにやってきた。

「ゆきなさん。すみません。でも、本当にここにいれば治りそうなんで」

「しょうがないわね。ヤマトの料理なら、それもあるかもね」

ゆきながキッチンを見ると、ひよいとヤマトが顔をのぞかせる。

「確かにヤマトさんの料理ならありかもですね。というわけで、なににします？ ちなみに今日の限定は……」

と、みんなが笑顔で言うが、

「先に席に……」

ハルトが苦笑いしながら言う。

「ごめんなさい。忘れてました」

みんながペコペコと頭を下げながら、ハルトを席に案内する。

「いやいや、ボクも普通に話してたし。で、今日の限定ってなんですか？」

席に座って改めて訊く。

「えっとですね。今日の限定は、ゆきなさんが作ったミルフィーユカツプレートです」

「じゃあ、それをお願いします」

「あら、ありがとう。でも、ヤマトの料理の方がよくない？」

「いえいえ、ゆきなさんの愛情がこもった料理なら問題なしです」

ハルトは、ビシッとサムズアップ。

「まあいいけどね。じゃあ、準備するわね」

そう言って、ゆきながキッチンに向かう。

「それと、二人のピンチェキもお願いします」

まだ時間が時間なので、この二人とヤマトしかいないようだ。

ゆきなの料理ができるまでは、特にする事もなく、みんなと会話を楽しんでいた。

そうしていると、ゆきなが料理を運んできた。

「お待たせしました。今日の限定第一号です」

「待ちました」

こんがりとキツネ色の衣は、見ているだけでもサクサク感が伝わってくる。

「じゃあ、いただきます」

至福のコーヒータイム

「ひとつ山を越えたって感じだな」

「そうですね」

マサユキとケンゴはカウンター席に座り、コーヒーを飲みながらそんな事を話していた。

「なにやらお疲れのようですね」

マスターがサービスです、とクッキーを出してくれる。

「すみませんな。ありがたくいただきます」

マスターお手製の甘いクッキーと、オリジナルブレンドのコーヒーはとてもよくすごく合う。表現の重複なんか気にしない。

「ちょっと今日は、ちょっと大変だった仕事がひとつ片付きましたな」

「そうなんですか。お疲れさまでした」

マスターはグラスを磨きながら言う。

「本当に大変でしたよ。でも、よく攻略できたなって思いますよ」

「そうだな。連携はもちろんだが、運が良かったのかもな。もう一度同じ状況でも、攻略できる気がしない」

「同感です」

ケンゴが深々と頷く。

「なんだか羨ましいですね」

「マスターもなにかあるんですか？」

マサユキが訊く。

「いいえ、ちょっと家の事情というものなんですけどね。どうしていいものか、悩んでいる事があるんですよ」

「そうですね。プライベートな事は、あまり口出しできませんが、もし、わしらでアドバイスできそうな事があれば、相談くらいにはのれると思いますよ」

「ありがとうございます。その時はお願いします。ひとまず、自分たちでなんとかしてみま——」

その時、店の電話のベルが鳴った。

「失礼します」

マスターが電話に出る。

「マスターにも色々あるようだな」

「ですね。僕たちでなんとかできるなら、なんとか……ですね。市役所を通せば、たいていはなんとかかなりそうですし」

「そうだな。使えるものは使わないとな」

そんな話をしていると、マスターが清々しい顔で戻ってきた。

「なんだか、すっきりした顔ですね」

マサユキが機敏に気付く。

「ええ、そうなんですよ。解決したわけではないんですが、少し状況が変化したようでして。こ

のまま好転してくれればいいんですがね」

「そうですか。それはよかった。解決するのを祈ってます」

「ありがとうございます。どうですか、お代わりは。お話を聞いていただきましたし、サービスしておきますよ」

マスターはカップを指す。

「そうですね。せっかくですし、お言葉に甘えておきましょうか」

「マサユキさん、僕たちなにもしてないような……」

「お前はまだまだだな。こういうのはな、話を聞いてもらうだけで、解決の糸口はあるものなんだよ。気分が軽くなるしな」

「そういう事です。遠慮なさらず」

それじゃ……とケンゴもお代わりを頼んだ。

至福のコーヒータイムは、芳しい香りの中で。

乱れた電子音

「アヤサ……」

自身の治療を終えたワタルは、ベッドの脇に座り、手を組んで祈っていた。

自分にできる事はこのくらいしかない。

いっそ自分だったらよかったのに――何度そんな事を考えただろう。

しかし、そんな事は考えるだけ無駄というものだ。

「アヤサ……」

何度祈っても、規則正しい電子音が聞こえるだけだ。規則正しいというだけでも、安心できる要素なのだろう。

「あのさ、今日さ、オレたち、あのすっげえ強いヤツに勝ったんだぞ。どうだ。ちゃんとアヤサの仇を討てたんだぞ。オレだって、やる時はやるんだからな」

本当なら、目を覚ましている時に言いたい。

「だからさ、さっさと起きてくれよ。祝杯しようぜ。またあの居酒屋で、浴びるほど飲もうじゃないか。オレなら、いつでも付き合うからさ。今度はみんな一緒に飲もうじゃないか」

ワタルが話しかけても、アヤサの反応はない。

「そういえばさ、新メンバーも増えたんだぞ。結構可愛い子でさ、それだけじゃなくて強いんだ。戦力アップだぞ。アヤサが加われば最強じゃないか？ 最強コンビになると思うんだ。ああ、想像するだけでいい感じだな。美人コンビ。こりゃいいかもな」

ピッと規則正しかった電子音が一瞬乱れた。

「ん？」

気のせいだったのか、規則正しい電子音が続いている。

「まあいいや。とにかく、その子ってすっげえエロ……いや、セクシーでさ、アヤサもああいうの着てみるってのはどうかな」

ピッとまた音が乱れた。

「ん？」

しかし、また規則正しい音が続くだけだ。

「だから早く起きてくれよ。頼むよ」

「……………スケベ」

ガタッとワタルは椅子から滑り落ちる。

「お、おわっ。ア、アヤサ！ えっ？ う、嘘だろ？ マ、マジか？」

ワタルは目をゴシゴシとこする。それから自分の頬を殴る。せめて平手の方がいいのだろうが、拳でガッツリとやってしまう。しかもほぼ全力で。

「……ってえ～」

危うくノックアウトしてしまうところだった。事実、一瞬意識が飛んだ。

ワタルはヨロヨロと起き上がる。

「ア、アヤサ」

「さっきからうるさい。男が語るのってウザい」

そういう声に力はなかったが、アヤサの笑みにワタルはハートを撃ち抜かれた。

「目が覚めたんだな。よかった。よかった」

ワタルが両手を高々と挙げて叫ぶ。

「病院内では静かに……あ、目が覚められたんですね。先生、先生」

注意しに来た看護師さんが、担当医を慌てて呼びに行く。

ワタルはひとしきり喜んで、他のメンバーに連絡をした。

元気が戻ったよ

「ん？ ワタルさんから？」

仕事用の連絡アドレスで、メッセージが届いたので見ると、ワタルからのものだった。

「なんだろう？」

口の中のカツを飲み込んでから、そのメッセージを確認する。

「へっ？」

一度読んだが、その内容が頭に入ってこない。

「えっと……」

もう一度読み返す。

「嘘っ！ 本当？」

バツと立ち上がったので、ガタツと大きな音がする。

「どうしたんですか？」

みんなが驚いてハルトを見る。

「どうしたんです？」

ゆきなもハルトを見る。声には出さないが、ヤマトもキッチンから顔を出していた。

「いきなり大きな声を出したら、びっくりするじゃないですか。で、なにがあったんですか？」

「みんなさん！ パフェお願いします。えっとストロベリーパフェで」

突然のオーダーに、みんなはよくわからず首を傾げる。

「かしこまりました」

と、キッチンから声がして、ヤマトが調理を始める。

「急にどうしたんですか？ 他にご主人様やお嬢様がいないからいいですけど、あまり騒がないで下さいね」

ゆきながやんわりと注意する。

「すみません。今すっごくいい連絡があったんです。もう、最高に嬉しいです」

「お待たせしました」

ヤマトが直々パフェを運んできた。

「ありがとうございます」

ハルトは満面の笑みでパフェを食べる。

ボクたちの戦いはこれからだ！

「お待たせしました」

「おう、ハルト。これで全員揃ったな」

ハルトが居酒屋に到着すると、他のメンバーの前には、既に飲み物が用意されていた。

ワタルは既に飲んでいるのか、少し赤い顔でジョッキを掲げながら出迎えてくれる。

「すみません。っていうか、もう飲んでるんですか？」

「いいじゃないか。めでたいんだから」

そう言って、ジョッキを空にしてしまう。

「すみません、お代わり」

はい、とすぐにいつもの店員さんが、新しいジョッキを持ってくる。

「ワタル、とりあえずここで、乾杯をしようじゃないか」

「そうですね。じゃあ、勇者のハルト。お前が音頭をとれ」

ワタルは既に酔っているようで、テンションが高い。

「ボク、まだ飲み物が……えっと、ジントニックをお願いします」

「おいおい、なんだ、そのぬるいのは。ガツンとウォッカとかいけよ。そうだ、ウォッカをくれ」

「すみません、ちょっとウォッカは置いてないですよ」

ジントニックを持ってきて、律儀に答えてくれる。

「すまないな。こいつは完全に酔ってるみたいでな。相手にしなくていいから」

「オレは全然酔ってないですよ」

ほらな、とマサユキが苦笑いすると、わかりました、と店員さんは下がる。

「ほら、飲み物が揃っただろ。飲むぞ。ハルト、頼む」

なんだかんだでマサユキも騒ぎたくてしょうがない。嬉しい事があったんだから、今日は無礼講だ。

「わかりました。辛い戦いに勝利し、アヤサさんも目覚めるといふ、素晴らしい日になりました。これからも、アヤサさんが復帰して、みんなで困難が続くと思います。でも、ボクたちなら大丈夫です」

「ハルト、長い」

ケンゴがぼやく。

「せっかく決めようと思ってるんですから」

「ほら、続けて」

マサユキに言われて、ハルトは深呼吸する。

「とにかく——ボクたちの戦いはこれからだ！」

グラスが鳴る音が重なった。

Fino.

公務員勇者御一行様

<http://p.booklog.jp/book/110263>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110263>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト